

※ r 1 8 小説を書きたいので停止 スタンドが手に入ったと思ったら、毎日ランダムでしたとき（白目

KEY (ドM)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんにちはんこそば

ヤンデレハーレム好きのKEY（仕事で執筆中なのでそちらを優先）と申します

投稿するとしたら空いた時間で書いた分のストックで昼の12時です

あなたの感想をお待ちしております

現在は仕事で執筆中ですのでできたら更新、という程度です。

ルーキーランキング11位に入りました

どうということなの・・・？（驚愕

ありがとうナス!!

あ　　ら　　す　　じ

ジョジョのアニメが放映される

←

ジョジョ全巻読んだ

← ジョジョかけえええええええ、兄貴いいいいいいいい
← 艦これにであった

← あっ、そうだ（唐突）

← 黄金の意思をもったスタンド使いを艦これに送り込むぞ（名案）

← 艦これのことわからにやしい・・・

← あっ、そうだ（黄金の意思）

← 艦これっぽい世界ってことにすればいいんだゾ（小説絶対投稿するマン）

← スタンド何にすればいいんだろう・・・

← 毎日、ランダムで12時になったら違うスタンドに代わるようにし

よう（決意）

← スタンド確認のため、ジョジョ全巻読み直す

← はまってしまい、小説投稿を忘れる

← ジョジョ面白すぎ、ヤバイヤバイ・・・

← 岸辺露伴先生に怒られそうなので投稿

← やりました

← ハーレム＋ヤンデレ＋艦これ＋ジョジョってもうこれわかんねえ
な・・・

お前（読者）どう思う？

好きなスタンドはホワイトアルバム（このスタンド出したくてこの小説書き始めた）

さて（唐突）、今回の作品に対するあなたの意見をいただけませんか？読み手であるあなたの作品に対する、意見、欲望、願望など、なんでもいいので気軽にフィードバックをいただければ、こちらもさらに良いものを提供できますので、あなたの力を貸してください

ハーレム+ヤンデレ+艦これ+ジョジョというニツチな作品を気ままに書いているおります

いつも読んでくださり誠にありがとうございます

あなたの一言がともうれしいです

エロは偉大なり

KEY（仕事で執

筆中なのでそちらを優先）

目次

- 神様。設定集ってなんのことですか（無垢）—— 1
- 一章 鎮守府と接触するまでのお話
- プロローグ 神様。毎日違うスタンドで戦わないといけないって
どういうことですか（白目）—— 5
- 一話 神様。あんたのこと信じてなかったけどありがとう（感動）
18
- 二話 神様。やっぱりあんたのこと信じるのやめるわ（激おこ）
31
- 三話 神様。家宝を棚に飾ってますがご利益はありますか（迫真）
39
- 四話 神様。俺の人生はシエクスピアも笑い転げる喜劇なので
すか（絶望）—— 56
- 五話 神様。俺の知らないところで何が起きようとしているんで
すか（恐怖）—— 66
- 六話 神様。触手プレイをする側の女の子ってどう思いますか（疑問）
—— 72
- 七話 神様。女性を拾ったと思ったら婚約者になっていました。
ポルポルくんってこんな気持ちだったんですね（共感）—— 82
- 八話 神様。愛する人がいるっていうのはいいものですね。人生
の墓場に入ってしまったましたが（憐憫）—— 91
- 九話 神様。妻に首輪をかけられてるような気がするんですが気
のせいでしょうか（寒気）—— 98
- 十話 神様。月までぶっ飛ぶ衝撃を食らったんですが私が何かし

ましたか（悲しみ）

103

十一話 神様。目が覚めたら幼女が私のスタンドに馬乗りになっていたんですがどういう状況なのですか（困惑）

109

十二話 神様。なんかスカウトっていうのを受けているんですが美人局ではないですよ（恐怖）

114

十三話 神様。俺のスタンドと相手のスタンドを取り換えっこプリーズしたいんですがオーダーはうけつけているのでしょうか（懇願）

119

十四話 神様。これハードモードどころかルナティックだと思っ
んですけど（助命嘆願）

126

十五話 神様。勘違いって実はなくて、思い違いならあるって最近
気づきました（誇らしげ）

131

十六話 神様。カカア天下つてどうやったら生き残れますか（平服）

136

十七話 神様。こういった時に強いスタンドがくるって死亡フラ
グじゃないですよ（疑心暗鬼）

142

十八話 神様。なんかシリアスっぽくなってきましたが結局これ
ギャグってどういうことなんですか（異論）

147

十九話 神様。もし俺が死んじゃったとしても彼女は許してく
れるでしょうか

154

最終話前半 鎮魂歌は誰のために

159

最終話後半 虹は晴れて

167

二章海外留学（隠語）編

一話 神様。転職活動用のESの書き方を教えてください（亡命）

175

二話 神様。司法取引って何のことですか（寝耳にウオーター

181

三話 神様。酔っぱらいのあしらい方って同じく酔っぱらいになるしかないってほんどですか（落胆）

四話 神様。国に喧嘩売っちゃったけど、菓子折りで許してもらえますか（死に顔）

五話 神様。女性の方から襲ってきても有罪にならないってどういうことですか（控訴）

六話 神様。裁判って弁護士がつくものではないのですか（おびえ）

七話 神様。おうちに帰れたと思ったたらすぐにあいしやるりたーんしました（謎）

八話 神様。女騎士のくつ、ころせ！ってリアルに存在するんですね（わくわく）

九話 神様。俺はあと何回天井ネタをやれば許されるのですか？（質問）

十話 神様。なんで毎回相手のスタンドがチートなのですか（反抗）

最終話 神様。たすけて（）

幕間 神様。サンドイッチ（意味深）っておいちいですよね（確認）

三章ハネムーン・・・できたらいいなあ

一話 神様。そうだ、京都行こう、ってなるの修学旅行以来なんですけど（懐古）

二話 神様。突然ラスボスとエンカウントしたんですが逃げても

いいですか（必死）

251

三話 神様。これがわがハネムーンの途中だと思ひ出したのが嫁さんたちはガチ切れしないでしょうか（失禁）

258

四話 神様。タマヒュンツて物理的にもなるんですね（新体験）

265

五話 神様。これって不倫に当たりますか？（相談）

270

六話 神様。先日殺しあつた人が上司ってなんでやねん（不敬）

276

七話 災厄と最悪って似てねえか国語のせんせいよおおおおお

お（閃き）

282

八話 そろそろ死ぬかもしれない（悟り）

286

九話 えっ、誰？（困惑）

293

十話 お休み おはよう グラ……誰だお前は?!（驚き）

300

十一話 バラバラ猟奇さつじんじけん未遂（誤字にあらず）

305

十二話 ファイツ!!（カーン）

310

神様。設定集ってなんのことですか（無垢

今までに出たキャラ集（随時追加してくかも

田中太郎くん

ジョジョラー

どうして自分の名前がジョジョというあだ名にできる名前じゃないんだ

と本気で思っている馬鹿

ジョジョを愛してやまず、本編、アニメ、外伝小説、設定集

先生のインタビュー集、FCゲームもやる信者

好きなスタンドはゴールド・エクスペリエンス

食費が浮かせるからとかなんとか

食べたら攻撃が跳ね返ることに気が付き落ち込む

ごく普通の商社に勤めるサラリーマンだったが数々の戦いを経て、成長し続ける

ジョジョが好きすぎて『黄金の意思』を持つようになったある意味天才

日常生活では強いスタンドが出やすく

戦いが起きる日はあまりぱっとしないようなスタンドが出やすいのが悩み

フツちゃんのアプローチにおされつつも、もし結婚して子供ができたら俺が名前を付ける、

といって最後の抵抗を試みる（なお、それさえも彼女の計画通りの模様

そして、最終的にはハッピーエンド（意味深）になる模様

好きなジョジョキャラはブローノ・ブチャラティ

フツちゃん

ホワイトアルバムを身にまとった田中に瞬殺される

その後、仲間とはぐれて倒れていたところを田中に救護され
看病されてヲちる

かつては殺しあった男女が偶然出会って再会する、といったシチュ
エーションがツボだった

田中君と『仲間』のためにある計画を進行中

最近ジヨジヨを読み始めた

好きなジヨジヨキャラはトリツシユ・ウノ

提督

ブラック鎮守府を受け持つ提督

正直いって犠牲をいとわずに結果を出そうとする効率重視のお
ぼっちゃん

修羅場をあまり経験していないからか、現実味のない作戦ばかりを
やろうとして

艦娘たちから嫌われる

とにかく過酷な労働環境にして、たくさん艦娘を働かせればいい
と考えている

ヲっちゃんを利用しようとしているが、女の怖さを知らないがゆえ
に

自分の方が利用されていることに気づけない
『選ばれる』ことになる

艦娘たち

現在

赤城（病み） 加賀（病み） 蒼龍 飛龍 瑞鶴 翔鶴 秋雲（病

み） 吹雪

が出ている

なんで田中君が救った娘すぐ病んでしまうん？（節子並感

深海棲艦

ヲっちゃんを筆頭にいろいろと人間側と対立を続けている娘たち
戦争に悪も正義もないが、彼女たちは滅ぼされない自衛のために
戦っている

ヲっちゃんの計画が進むと（田中君の体力が）大変なことになる

あと、ジョジョをヲっちゃんが貸して読ませている（未来）

田中君のスタンドについて

毎日夜中の十二時なるとつぎの能力に入れ替わる
完璧にランダムなのでとんでもないスタンドが出てくる可能性も
ある

今までのスタンド変化集

第一章

← ホバム
?????

← ?ーフ
????

← ヘド
????

← スナ
?????

← ??ワ
??

←

????? ← ????? ← ?? ← ? ← ??? ← ???
 . . ヨ ャ
 ?????? ?????? ?? グ
 . ??? (ヲっちゃんを看病していた時)
 . ??? (ヲッちゃんを海から拾った時)

一章鎮守府と接触するまでのお話
プロローグ 神様。毎日違うスタンドで戦わないと
いけないってどういうことですか（白目

スタンドほしい

それは、かめはめはを打つのに憧れる男の子のような願望
一度くらい男だったら思うはずだ

自分だけのオリジナルの力
圧倒的な強さ

女子にモテたい（血涙

モテたい（二度目

そんな欲望がむくむくと湧き上がってきた

ジョジョの奇妙な冒険という作品に出会ったのは中学三年生のこ
ろだった

当時、私は高校受験の追い上げの真つ最中であつた
漫画を読んでいる暇なんてなかったはずだが、何を思ったのか手を
出してしまい
第一希望に落ちましたとき

とは終わらず、滑り止めの第二希望に何とか入れた

しかし、そんなことは些細なこととして、頭の片隅に追いやられ、ジヨジヨを読む毎日

一週間で第六部までの約80巻をすべて読破してしまった(馬鹿野郎)

そんなジヨジヨの根底に流れるテーマは

『人間賛歌』

人が、意思をもって道を切り開いて生きていく、人と人のぶつかり合いが描かれる作品だ

その一人一人のキャラが魅力的であり、敵でも自分なりの考えを持ち、信念をもって、主人公たちに戦いを挑んでくる者たちもいる

そして、思った

来世はスタンド使いになろう、と

いや、お前馬鹿じゃん

とか言われそうだけど

スタンドほしい

自分の心の強さが能力の強さにつながるなんて、グレートなせつていだけ

と思っている

スタンドとは、人の心が具現化したものであり、たいていは一人につき、一体、背後霊のようにについている

そして、スタンドはスタンド使いにしか見えず
スタンドはスタンドにしか倒せない

スタンドが死ねば、スタンド使いも死ぬ
それがスタンドのルール

高校受験が終わり、高校に入り、ジヨジヨの元ネタの音楽を聴きながら学園生活を送っていた

そして、ほどなくして、また、第一志望の大学に落ち、一浪することになる

一浪した後はちゃんと第一志望の学校に入れてホツとする

いや、さすがに三連敗はきついです……

そして、あの運命の日がやってくる

ジヨ ジヨ の ア ニ メ 放 送 開 始

リアルでふおおおおおとおと叫んだ

あの時の興奮、感動は忘れられない

だってよお

歴代のジヨジヨが全員ラッシュするシーンからOPがはじまるんだぜえ

こりや何度でもみるしかねええ

つと、録画しておいたジヨジヨのアニメをあほみたいに何度も何度も見ていた

現在8部までであるが、つながっているのは1〜6部なので、早く6部までみたいな
と思っていた

エルメスの兄貴は乙女（強弁）

ここまでのくそ長いモノログはなんだったのかって顔をしているからよおお

自己紹介させてもらうが

俺はジョジョ中毒の田中太郎!!

和名にスピードワゴン先生の名言はあわない・・・

本当に田中太郎とかいう名前なんだ

かえって珍しい

そして、今、自分の人生の岐路にたっているらしい

目の前にいる黒い霧のような物体が語り掛けてくる

あ、これ夢だ、と、明晰夢だと判断して

だったら、好きなジョジョのキャラが出てこないかを黒い霧を無視して念じる

ひとしきり、好きなジョジョキャラの名言、名シーンを堪能した俺に空気を読んで待つていてくれた霧が語り掛けてくる

「もういい?」

あつ、うん

そう、はしゃいだ子供をあやすように言ってくる

「んじや、単刀直入に言うよ。君、ジョジョ好き?」

YES!!YES!!YES!!

テレンス・T・ダービーが心を読んでいた時の承太郎をまねて答える

「おお、いい食いつきっぷり。じゃ、もしもスタンドがもらえらしたらどう？」

もらうにきまつてるだろうがよお

このダボがあああ

と右手で弧を描くように振り、チンピラヴォイスで即答する

「よし、んじやきみで決定」

え

「いや、会社の社長が部下を出世させるのって100%好き嫌いで決定しているのと同じで、私たちみたいな超常の存在もこういった実験を好き嫌いでその実験の相手をきめているんだよねー」

けらけらと笑うもや

まっつて

スタンドももらえるって聞いたけど、何もらえるか知らん

「ああ、能力はきになるよねえ。大丈夫。悪いようにはしないから。」

いや、つーかオタク誰？

今更目の前の謎の物体の正体を探ろうとする

．．．．．
「しらないほうがいい」

無機質、無感情な声で言われて

やべ、これ友達の家事情にふみこんで地雷踏んじまった時と同じ
や

と悟る

「そう、長生きする秘訣は知りすぎないことだ」

そして、もやのかたちが変わっていく
黄金の意思の始まりの波紋使いへ

また変わる

究極生物を倒した男へと

そして、二転、三転して変わり続けるその姿

お前はいつたい『何』だ

その光景を固唾をのみつつ見守る

「私が『何』かなんてどうでもいいじゃあないか。」

飄々としたその態度からは嫌味っぽさは感じられない

いや、むしろ．．．

「じゃ、行ってらっしゃい。君の魂の行く先はどこなんだろうね」

愉快そうに笑いながらそういうそいつ

意識が消えゆく最後の瞬間に
六対の天使のような羽がそいつの背中から見えた

うわああああああああパープルヘイズがおってくるううう
ううううう

「最悪の夢をみて起きた俺
なんでよりにもよって細菌兵器のパープルヘイズに追われるねん
と、独り暮らしでぐちゃぐちゃに汚くなった男部屋で着替えをあさ
り

朝食を作る

朝はめんどくさいから、前日の夜にスーパーの特売で買っておい
た惣菜を出して食べる
テレビをつけてニュースを見る

『……つまり、年々増える国防費に対して、与党は深海戦艦を倒
すために必要な予算編成と説明しており、これに対する野党の……』

相も変わらずそんなニュースばかりだった

ある日突然現れた船の化け物

女性のような見た目麗しい彼女たちだが、人類の敵だという

ま、軍のお偉いさんたちが何とかしてくれるさまじよ、とおもいつ
つ

横にごろんと寝転がってジョジョの単行本を読みふける

いやー

さすが荒○先生だはー

外伝のデッドマンズQの主人公が『あいつ』って知ったときマジで
びびったなあ

なんて思いながら、各部の最終決戦を見返す

一部から六部までさつと読んで、スーツに袖を通し
革靴を履く

んじゃ、行きますか

バッグを片手に外にでてカギを閉める

私がジョジョに出会ったのが8年前の14歳の時
いまはもう、社会人一年目として働き始めていた
給料は多くないし、たまの残業が原因でジョジョを読めなくて少し
不満だが、

職場の人たちはみないい人が多く、安心して仕事ができる

手取り16万円から、食費を削り、住宅手当で家賃を補てんして、浮
かせたお金をジョジョグッズに充てる

最高に幸福だった

い
今ならプツチ神父が天国を目指した気持ちができるのかもしれない

そして、吉良と同じくしががないサラリーマンやってみて思う
植物のような平穏な暮らしもいいな、と

ジョジョ読める時間が取れるのなら、どんな薄給でもいいや
そう考えながら、職場まで向かう

.....

こんにちはー

職場についたらまず挨拶

これは本当に社会人として大事

「あ、おはよう。今日もはよいねー」

そんなことないですよーと謙遜しておく

いや、実際は早くきて、仕事始めて、早く終わらせて、帰って録画
してあるジョジョのアニメみたいだけんど

ちよつと、そんな自分に罪悪感

ああ、すいません、課長

有給とって三部の格ゲーを家でやっていてもいいですか

と、プロジェクトの納期があと二週間に迫っている状況で思う

「なんとかメンバーそれぞれの役割の仕事が、予定よりも3日ほど早く
終わっているみたいだから、そのうちの余った一日を使って、あと
でフルチェックしようか」

はい、と答え、自分の仕事机まで向かう
よーし、やるぞお

そのあと開かれた飲み会を付き合いのため一次会だけ参加して
帰ってきた

あー、やっと帰ってきたああああ
金曜の夜はテンションがあがる

実は、会社から徒歩10分の場所に住んでいて、すぐに帰れるのだ
が、飲み会があると、職場から浮かないために三回に一回は参加する
ようにしている

でも毎回それで30000〜50000円とぶのがなあ
ジョジョの一番くじが8回ひけるじゃないのおお
と思いつつ、自分の部屋の中に入り布団に倒れ込む

ああーちゃんとスーツハンガーにかけておかないとしわになっ
ちやう

そのまま寝てしまう

爆ぜる轟音で目が覚めた

んぎやあああああああああ!?

なんだ?!キラークイーンか?!オエコモバか?!
と、跳ね起きて窓を開けて状況を確認すると

なんかきれいなちゃんねーが海の上でぷかぷか浮いて戦っている

ああ、そういうえば艦なんちゃらっていうかわいこちゃんが
深海棲艦というこれまた肌白の美人の娘と戦っているんだっけ

えっ、ここ戦闘区域なん?
と思いつつ、その戦いをスマホオで取り始める

あの持っている砲台とか、ラットみたいな遠距離型のスタンドかな
なんてのんきなことを考えながら撮影していたら

砲弾が飛んできた

ああああああああああ

部屋から自分が顔をのぞかせている窓の横の壁に着弾する

そして、爆発

直撃は避けたが、築35年の家賃2.5万というオンボロアパートを容赦なく粉砕していく

そして、炎上しはじめる建物

やっべ、ホワイトアルバムがいれば超低温でなんでも止められるの
に

ギアッチョマジ強キャラ

なんて思いながら後ろを向くと

爆風で吹き飛んだジョジョグッズが目に入る

シイイイイイイイイイイザアアアアアアアアアア

ありつたけの涙を流しながら、ジョジョグッズを持てるだけもつて、部屋から逃げる

ちきしよおおお

逃げるんだよおおおおおおおおおー

これ、会社に休暇申請通るかなあ!?

なんて心配しながらにげまどった

T o b e c o n t i n u e d

一話 神様。あんたのこと信じてなかったけどあり
がとう（感動）

はひっ、はひっ、はひっ

情けない声をあげつつ、燃え盛る我が家から逃げる俺

何とか守りきれた、昔一番くじであたったキラークイーンの特大ス
タンドや、

ザ・ワールドのフィギアを抱えて走る

このフィギアを当てるために一万五千円かけたんだ
燃やされてたまるか

戦いの中心から安全な場所まで避難しようとする
海の近くまでやってくる
すると、声が聴こえる

「大破進軍?!本気ですか?!提督?!」

『撤退は認められない』

「……っ!!」

なんだ、なんだと思いつつ、電信柱に隠れて音のする方を見居ると
なんか、弓道着みたいなものを着たサイドテールの美人がしゃべっ
ている

えっ、なにこれ

隠れながら状況を把握していく

『貴様らは兵器。我々人間を守るためにその命を散らせ』

「……了解……っ!!」

そういうやいなや、その娘の周りに姦しく、同じような女の子たちが集まってくる

女子会かな？

などとのんきに構えていると、なんだか険悪な雰囲気で喋っている

なんか、早く逃げましょうとか

いや、逃げようにも敵の戦力が多すぎて追いつかれるとか

ああ、そういや、給料日あしただったわ

インターネットカフェのお得料金で一晩寝て過ごすか

なんて思っている

また砲弾が飛んでくる

うおおおおおおおっ!?!と吹き飛ばされないように近くの電柱にしがみつく

女子会を開いていた面々も何か覚悟を決めたような顔で、攻撃が飛んできた方向に向かって去っていった

.....

ゆるせねええええなあああああ

ジョルノがここにいたらきつとこういうだろう

覚悟とは！犠牲の心ではない!!と

さっきの娘たちは自分が死んでもいいからほかの娘たちを逃がせればいい

そんなことを考えてそうな瞳だった

ジョジョ好きとしてはそんなことは認められない

ああ、認めてたまるか

おれはしがらないサラリーマンだし

なんもできない無力な一般人だ
でもなあ!!

目の前に女がいて!!
悲しい顔してうつむいてたら!!

見知らぬ相手でも助けるにきまっているだろうがよおおおおお
お!!

袖をまくって進む
何が起きているかも分からず
この日、俺は『守護霊』とであった

.....

娘
艦載機を飛ばしながら制空権を確保して、友軍を逃がそうとする艦

正規空母の一航船、加賀
戦略的価値が高い彼女が殿を務めてでも逃がそうとしていたのは

同じく正規空母の一航船、赤城

今、まさに最期を迎えようとしていた

敵に囲まれ、徐々に戦力を削られる

互いにかばいあっていたのが悪く働き、どんどん戦況が悪化して
く

「もういいです、加賀さんだけでも逃げてください・・・」

「そんなことできるわけないでしょう・・・!!」

激昂して叫ぶ彼女

しかし、どんどん敵が近づいてくる

このままでは二人とも死んでしまう

やっとあの海戦で別れてから

やっとまたみんなにあえたのに

私が着任した鎮守府はブラックと呼ばれるタイプの場所だった

成果のためなら、艦娘の犠牲もかまわないというレイシストの提督
が動かしている

幸い、まだ轟沈した娘はいないが、時間の問題になってきた

この戦いで私は死ぬのだろう

昔沈んだ時と同じような感覚

また、どこかへ自分という存在が還っていく

ごめんなさい・・・みんな・・・

目の前に迫る攻撃を

目をつむって待つ

しかし、来るべき衝撃はやってこなかった

・・・？

不思議に思い
目を開けると

黄金の光を宿した瞳の男と目があった

自分はどうかやら抱きかかえられているらしい
暗くて顔はよく見えないが
それも、この男性に

・・・!?

その事実が気が付いて暴れる
ちよ、ウエイウエイウエイウエイ
あわてて取り乱す私をなだめる彼

抱きしめられて感じるそのぬくもりに鼓動が高まる

やっと落ち着いたか

そう、ホツとする彼

人間がなんで

いや、海の上に立っているなんて

そして、信じられない光景を目にする

彼の足元の海水が凍結している

日本の東北地方でもまずありえないその状況に絶句する

さっぱり事情は分からんけど、あいつら全員倒せばいいんだろう？

そう聞かれ、はい、と反射的に答える

じゃ、ここで待っていて

私を下ろして立たせた彼は、敵がいる方向まで進む

手を伸ばし、止めようとするが、その背中を見てと思わず固まって
しまう

信念と、誇りを感じさせる背中を前にして、止めようもないことを
悟る

彼がスケーターのように、凍っている足場を滑りはじめ
その身を不可思議なスーツが包み始める

何分かかるかわからないがそれでも少しずつ前に進み続ける
わっせ、わっせと一寸法師みたいに漕いでいると

ボートに穴が開く

ぼろすぎて、穴が開いてしまうほど腐食が進んでいたらしい
適当にボートの外壁を一本はがし、それで埋めておく

すると、そこにも穴が開き、ボートに水が入ってくる

どうやら俺に船大工の才能はないみたいだな
とぶぎけていると

船の近くが突然しぶきあがる

なんだ?!

と、おもいつつ、真正面を見据えると
なんか、明らかに人間じゃなさそうな女の子が立っていた

頭に触手が付いたかぼちやみたいな帽子をかぶっている
あれ、こいつどっかで見た気がするな
と思っていると、砲撃をかましてくる

敵だったかー、と思ってももう遅く
直撃は避けたがボートが破損してしまう

しずむううううううう

悪魔の実を食べたわけではないが、沖からだいぶ遠くまで離れたところまで来たので、ここで沈んだら、最悪死ぬ可能性がある

必死に揺れるボートにしがみつく俺をあざ笑う帽子っ子
てめっ

激おこステイックぷんぷんファイナルフラッシュ状態だったが
なすすべもなくボートが削られていく

野郎……、じわじわとなぶり殺しにする気か……!!
そう気づき、ぶちぎれる

そこだけ!! ジョジョ好きとしては見過ごせない目をした女がその
先にいるんだ!!!

そう立って睨めつける俺をあざ笑う彼女

てめえみたいなブスとは違うんだよ!!!
と、いうと

ブチン、と何かが切れる音が響く

あ、日本語わかるのね

触手に首をからめとられ、吊り上げられる
息が苦しく、死にそうだ
キックで触手を蹴飛ばすが、効果はないようだ

だんだん、顔が青くなる俺と、それをみてさらに笑みを深めるアマ

ちく・・・しょ・・・う・・・
こんな・・・ところ・・・で・・・

意識が遠のいていき、明瞭な死の感覚がわが身を襲う

こんな・・・と・・・こで・・・

しねるかあああああああつ
!!!!

そう叫びながら、効くはずもないパンチを繰り出すと

彼女の触手が凍った

「・・・・・・・・?!」

意味不明、理解不能といった形で凍った触手を切り捨て、離れる深
海凄艦

自身の手を思わず見る

ははっ・・・・・・・・、嘘だろ・・・

この、この力は!!

「ナニヲシタ・・・ッ!!」

再び触手で襲い掛かってくる彼女
しかし、その矛先が届くことは二度とない

ホワイトアルバム

そう呟いて、海水に手を触れると
半径20メートルの物体がすべて凍った

さつきまであれだけ驚異的だった彼女も
驚愕の表情を浮かべて、氷像に変わり果てる

スタンド

スタンド

スタンドが俺に芽生えた

ずっと、ずっと、ずっとほしくてたまらなかった能力
その、能力の一つが、今、俺の手の中にある
握りしめたこぶしから冷気が漏れ出す

闘志があふれてきて、今ならどんな奴だって倒せる、と確信を持つ

それは、地球上に存在するあらゆる物体を停止させる、あのジョルノでさえ、正面から戦って勝つことはできなかつたスタンド

—273. 15度の冷気を操る最強クラスのスタンドの一つ

ホワイト・アルバム

無敵のスーツを身にまとい装着する

足から生えているブレードを使いながら滑り

そうして、彼女たちのもとへ急ぐ

ギアツチヨ先輩、このスーツマジ温いつすね

なんてことを考えながら

T o b e c o n t i n u e d

その日、日本のとある海岸で異常現象が確認される

ロシアでも北極でもなく、日本の海が凍ったと

二話 神様。やっぱあんたのこと信じるのやめるわ
(激おこ)

あの日結局、超低温の能力を使って、敵を全滅させて
なんか、あとからテレビでみたら、異常気象だの、天変地異だの
海が凍った現象について騒いでいた

あのスーツ着ていたから顔ばれはしていなはず・・・

インターネットカフェのリクライニングシートで一夜を明かし、
ネットで情報を収集してみるとそんなことを知った

あのは本当に大変だった
.....

ひやおおおおおおおお

海を凍らせながら爆走する俺

超きもちいいいいいいいい
腕を横に振りながら進んでいく

あの後、敵は全員ひかせた
どうやったのかというと、何人か瞬間冷凍で固めてやって、
退かなきゃこいつら割るぞ、といって、凍った深海凄艦を叩いて脅
した

興奮したように言う五航戦

今はその声さえも耳には届かない

彼は一体誰なんだろう

私を

私の命を救ってくれた彼は何者なんだろう

そして、今まで感じたことのないあたたかな気持ちに目覚める

彼の背中が遠く離れていくほど、胸のあたりが苦しくなる

ああ

きつと

これは

絶対に逃がさない

絶対に

リンゴオがいたら、『お願いいたします』、と言って決闘を申し込むであろう、漆黒の意思をにじませた目を輝かせ、彼が消えていった方をじっと見続ける加賀

その口元は三日月に歪んでいた

おバカ丸出しの声を挙げて滑り続ける俺
あれからもう、何分間滑り続けた
このまま地球一周としゃれこむか?!
と、テンションがマックスだったが

突然、能力が消える

へ、と間抜けな声を漏らし

海に落下する

.....

なんてことがあつたからなあ

新聞片手に思いにふける

一面の記事を読み進めていくと、昨日の市街地での戦闘行為が問題視されているようだ

鎮守府の提督に責任があるという軍部の答弁に対し、とかげのしつぽきりではないか、

というマスコミの社説

まあ、俺には関係ねえなど、と思い投げ捨てる
テンション最高潮でスタンドを使っていた俺は、昨日の深海凄艦の
ことをすっかり忘れていた

そして、新聞の片隅に移る、昨日会った娘たちの写真に気が付かず
眠りこける

.....

あつぶねえええええええ

急に能力消えちやっただけ

え?!

なんで?!

何度念じても、よんでも出ない、ホワイト・アルバム
流れていた流木につかまり、何とかおぼれずに済む

しかし、原因はわからないが、このままだとまずい
生身で陸地まで戻るのはほぼ、不可能に近い

必死に考える俺に神様がちよつとだけ味方をしてくれたのか
ほかのあるスタンドが出てきた

それは

.....

まさかお前とはなあー

.....

スタンドらしくないあのスタンドをペットボトルの中に入れてしま
まう

こいつがいたから何とか陸地まで戻ってこれたのだが

そして、気が付いたことがある

あの時、俺のホワイトアルバムが消えたのは夜中の12時

海水に浸かって、止まってしまった腕時計が12時を指している

そして、そこから別のスタンドが使えるようになった

.....つまり、あれか？

24時間、毎日使えるスタンドが変わるってのか？

セックスピストルズとか銃規制社会のこの国で出たらどう使えば
いいんだああああああ

と叫び、せめてクラフト・ワークぐらいのスタンドが明日は出ます
ように

と願いつつ、眠るのであった

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

三話 神様。家宝を柵に飾ってますがご利益はありますか（迫真）

「どういうことですか!!提督!!」

そう叫んで机をたたく彼女

黒髪ロング、おっとりした顔つき、豊満なスタイル

正規空母の一航船

赤城である

「なぜ、あの時に大破進軍などめいじられたのです!!!」

普段の彼女を知る者からは信じられないような大きな声を挙げる
その剣幕に周りの艦娘たちも思わずうっと身を引く

ただ一人、ぼーっと心あらずな彼女の相方を除いては
「貴様らはただ、われわれの命令にしたがっていればいい」
そう、冷たい目で彼女をにらむ男

鎮守府提督である

「しかし!!今回の戦術はあまりにも・・・!!」

「あまりにも・・・なんだ?」

そういおうとする赤城にかぶせてしゃべりかけてくる
それ以上いおうものならどうなるかわかっているだろうな、という
意味を込めた瞳をのぞかせて

「~~~~~!!演習にいつてまいます!!」

ドアをバタムと強く締めて出ていく彼女

そのあとを追うほかの艦娘たち

侮蔑の感情を込めた視線を提督に送り、出ていく

しかし、一人だけまだ出ていなかった
加賀

あの戦いでかろうじて生き延びた艦娘の一人である

遠くを見つめるその瞳は、一体何を追っているのだろうか

「貴様もさっさと退室しろ」

「あら、みんなもういなくなっていましたか」

「……?」

いつもと様子が違う加賀に疑念を抱くが、気のせいだと片付け、
しっしと手で追い払う

「まったく、兵器は兵器らしくあればいいものを……」

そういって、懐から取りす薬のびん

「いざとなればこいつを使うか……」

……

「ほんとサイテー!!」

執務室から出た瑞鶴が叫ぶ

「なんであんな人が私たちの提督なんだろう……」

落ち込んだ声でそう呟く蒼龍

「赤城さんの気持ちももつともです。下手すれば私たち全員全滅して
いましたし」

そう、腕を頭の後ろに組みながら歩く飛龍

「一体、大本営は何をしてるんでしょうか……」

瑞鶴の姉である翔鶴が疑問の声を挙げる

「つて、あれ？加賀さんは？」

この場にはいないもう一人の仲間を目で探す

「そういえば加賀さんも最近様子がおかしいよねー」

「そう、そう、なんかぼーっとしているっていうか・・・」

「まさか・・・」

「恋?!」

ないない、それはない、とみんなで手を横に振る

「あるとしても、赤城さん相手ならあるかも・・・」

「へえ、何があるんですか？」

ぴいつつと変な声を挙げて驚く瑞鶴

「加賀さんはきつとあの戦いのショックでちよつと頭がパーになっているだけです」

そう力説する赤城に、自分の相方だろ

と突っ込まずにはいられない面々

「ま、おいしいものを食べればきつと元気になるから放っておきましよう」

それはあんただけです、とは言えず、みんなで食堂に向かうことに

.....

加賀は、艦載機を飛ばしながらある人物を探し続けていた

本来、艦娘の装備品は戦闘行為、および、演習目的の場合などに限り、使用が許可されている

これは明らかに軍規違反であり、軍上層部に発覚すれば、厳罰処分は免れないだろう

それでもかまわずに使い続ける彼女

艦載機に乗っている妖精さんは、加賀さんの得体のしれぬ笑みにおびえながら必死で件の人物を探し続ける

私はあの時、あの場所で死ぬはずだった

それを助けて、私を生かしたのは彼だ

だったら責任をとって、彼が私の人生をもらうべきだ
そうするべきだ

乙女チックな完璧な理論で行動し続ける加賀

大好きな昼食もほとんど食わずに艦載機を飛ばし続けている
彼の背中を見ればわかる

そう確信し、街を探し続ける

その顔つきは、心中を凶る女のような粘着質なものであった

.....

うおおお、さむうううううう

背筋がぞくぞくつとして、気持ちが悪い

職場からは一日だけお休みをもらっていたが、アパートの引っ越しのために速攻で終わらせる

しかし、私のことを案じてくれた上司から

「プロジェクトうまくいっているよ」

と現状報告をいただき

せつかくだから溜まっている有給休暇もつかっちゃいなよ、と言われ、厚意に甘える

しかし、こうして根城を移せたのはいいけど、ずーっと部屋にいるのみなー

そう思いながら、次の文庫版のジョジョを開けると

ひらひらと何かが落ちる

なんだこりやと、おもい

拾いあげると

ジョジョのアニメのトークショーが近くのららぽのワンブースで行われるという

能力を使い、体を入れ替えて体調を万全にし、私服に着替え、シューズに足をつまみ込む
行くつきやねえ

男は、戦場へと向かった

.....

「赤城さん!!これ、この服なんてどうですか?」

そういつて私に露出の多い服を進めてくる瑞鶴

ちよつとそれ派手じゃない?と露出が多いことを遠回しに伝える

「大丈夫ですつて!!赤城さんならスタイルいいから似合いますつて

!!

そう押され、結局買ってしま

試着室で着替え、来たまま服やから出る

最近慢心しすぎて、おながが・・・

そうため息をつく私

結局、あのあと私たちは休暇をもらい、このららぽにみんなで遊びに来ている

加賀さんは一人で何かやっているようだけど

まあ、大丈夫だろう

先日の戦いのことを思い出す

もし、加賀さんが沈んだら

もし、みんなが消えていったら

もし、私がいなくなったら

そう考えると、怖くなってきたのでかぶりをふるって思考を変える

そうだ、みんなでデザートを食べよう、と提案をしようとする

みんないなくなっていた

嘘!?はぐれちゃった?!

あわてて周りを探してみるも、誰も見つからない

困ったと思い、人込みから抜け出て、ホール中心地においてある像の前でみんなの姿を追ってみる

やはり、どこかに行ってしまったようだ

周りから、ちらちらとみてる視線を感じる

おながが出ているのに気づかれていたのかな、と思い顔を赤くする

すると、3人組の男が声をかけてきた

「あのくさつきあなたのことを呼んでいた女の子たちがいたんです
けど……」

そういわれ、はっとする

彼女たちか

「その子たちのところまで案内しましょうか」

ありがとうございますといい、ついていく

歩いていくと

どンドン人込みからはぐれていく

そして、人がほとんど来ないような通りまでやってくる

あの、ここに本当に……

その続きをいうことはかなわなかった

男たちが体を押さえつけてきた

……?!

「いやあ、ちよろいねえ。さつきあんたを呼んでいた女の子たちは別の
方角にいるよ」

罠か!? そう思い。戦闘態勢をとるとするも、体に力が入らなくなる

な、なにが・・・

「最近さ。深海なんちやらつてのと艦なんちやらつての戦いが激しくてさあ。」

風俗行つて女を抱こうにも、お店がしまつちやつてだけなくて苦しかつたんだ」

腕を見ると注射をされているのが分かる

く・・・す・・・り

「大丈夫後遺症はないから安心してね♡」

「ま、これから俺らに犯されて馬鹿になつちやうかもしれないけど」

「ぎやはははは、いっぱいたのしもーねー」

そういつて、下卑た笑いでこちらの体に手をかけてくる男たち

い、いや・・・

「むだむだ。なんでわざわざこんな場所までおびき寄せたのかわかつてんでしょ?」

「助けなんて来ないつて!」

「じゃ、いただきまーす」

そういつて、男の腕が胸に伸びる

ああ、

加賀さん

瑞鶴

翔鶴

蒼龍

飛龍

そして、なぜか、海を凍らせて、たった一人で深海棲艦を撃退した彼の姿を思い出す

いやあああああ!!

すると

手を伸ばしていた男の体が突然吹っ飛ぶ

目を回し、失神している

「だ、だれだごらあ!!」

あたりを見回し、やったであろう相手を探す二人

すると、そこにその人はいた

両腕を組み

なんだか変な猫みたいな顔のお面をかぶって

.....

まさか、アニメの吉良役のあの人のお話が聞けるとは・・・

感動し、売っていたキラークイーンのお面をかぶりつつ歩く
サインを書いてもらったお面を大事につけて、これ、一生家宝にし
なきゃ・・・

と漆黒の意思を抱いて、家宝絶対守るマンになることを決意する
すると、ペットボトルに入っていたそいつが何かにきがついたのか
騒ぎ立てる

どうした、水がたんないのか？

ちげええよダボが
と罵倒されつつ、そいつが示す方向を見る

一人の露出度が高いえらい美人が三人の男に囲まれ、明らかに人が
いない場所へと向かっていく

おおいおいおい
あれちよつちまずいんじやねーの
と思ひ、追跡を開始する

追いながら左手を出して、シアーハートアタック!!、といってキ
ラークイーンのマネを試してみたのは秘密

追い付くと女性が今にも三人の男に乱暴されそうになっている

その光景を見た瞬間、何かがぶちぎれ

ペットボトルから黒い物体が思いつきり吹き出し
胸に手をかけようとしていた男を吹き飛ばす

す
だれだごらあ!!と言ってきたので姿を出して、彼女から注意をそら

両腕を組み、ふんぞり変える

「てめえ、あとちよつとでやれたのにじやましやがってよおおおお
おおおお」

そう切れて

ナイフを取り出すチンピラ

きやあつと、短くもかわいい悲鳴を上げる女性

あれ、なんか聞き覚えがあるような

「おらああああ死にぐされこのドぐされがああああああ
そういつて、ナイフを突き立ててくる相手

両腕を組んだまま微動だにしない俺

勝った、死ねい!!

と思いつつ、男がナイフを刺そうとすると

あごを吹き飛ばされた

脳を揺らされ、立てなくなる
その顔面にこぶしを突き刺す

そのスタンドの名を呼ぶ

フー・ファイターズ

そういうと、ペットボトルの水の中に戻る異形の物体

「お、おまえええええええ!! な、なにをしたのかしらねえが!! それ以上
近づくとこの女をぶつ殺すぞ!!」

まだ残っていたもう一人の男がナイフを女性の首に向ける

ああ、そういやもう一人いたなと思いつつ

.....

すでに終わっている勝負にけりをつける

今日出たスタンドがクレイジーダイヤモンドだったら、あの強盗の
おなかにナイフを融合させるシーンが再現できたのになーと、考えな
がら距離を詰める

「う、うづくなっかっていってんだろぅがあああああ!!」

激昂し、ナイフを少し彼女の首にさす

すると、彼女の首から血が少し流れ出る

「へ、へつつへへ・お、俺がこいつを人質に取っている限りてめえは俺にてだしできねえええんだよド低能がアーーーーーーー」

そう、勝ち誇った笑みを向けて、にやにや笑う男

不安そうな顔をして、涙目になっている彼女

やっぱり、同じ男としちやこんなこと認められねえ

ブチャラティだったら最初の5秒で全員ぶったおしてたんだろ
うな、と思う

「そのままじっとしてろおおおお!!このナイフでてめーの顔面をウニの塩漬けみたいにくちやくちやにしてやるぜええええええええええ!!」

そういつて、倒れているもう一人の男が持っているナイフを奪い取ろうとすると

倒れている男の口の中から黒い物体が出てきて男を襲う

「あばあああああああああーーーーー!!!なんだこりやあああああああ!!!」

絶叫し、彼女を離す男

フー・ファイターズ

二人目に倒した男の脳をあげを打って揺らしたときに何匹かもぐ

らせといた

死なない程度に体の水分を奪って増殖させておいた
てめーみたいなのがスはそうするってわかってたぜ。ド三品

プラクントンの群れに襲われ、もがく男の顔を右ストレートで撃ち
抜く

吹っ飛び、壁にもたれかかって倒れる

最初っから詰んでたんだよマヌケ

そう眩き、倒れている女性のもとに向かう

大丈夫ですか？

「あ……」

呆然とこちらを見つめる彼女

「へんな薬を打たれて……体が……」

あ、よく見ると腕に注射の後が見える

いや、今日はこの能力でよかったなー

ちよつと目をつむっててくれますか？

そういうと、おずおずと目をつむってくれる彼女

いけ、フーフアイターズ

プラクントンを小さな針孔から入れ、薬の成分と思われる物質を
すべて吸わせる

原作のワンシーンでは、フーフアイターズの一匹当たりの大きさは

血液中の赤血球と同じくらいだと示唆されている
ならば、

それよりも大きな液体を見極めて、プランクトンに吸わせて、排出
することは可能なのではないか？

そうあたりをつけて、彼女の体からどんどん薬物を抜いていく

サービスで、首のナイフによる傷跡も、腕の注射針の跡もプランク
トンを詰めて、あとが残らないように完治しておいた

完全に治った自分の体を見て、驚きの表情を挙げる彼女

スピードワゴンはクールに去るぜ

とはならず、人通りの多い道まで送っていった

途中、彼女がこちらを赤い顔をしながらチラチラ見てきたが
サインを色紙にももらい、喜んでいた俺は全く気が付かなかつた

.....

「赤城さん!!」

そう叫んで駆け寄ってくる彼女たち

「心配したんですよお!!」

ごめんごめんと、謝る

「.....? 赤城さんなんかいいことでもありました?」

え、そう見える?

やっぱり？

えへへえ、と頬を緩ませる私

「か・・・」

か？

「加賀さんに続いて赤城さんもおかしくなっちゃったー！！」

そう叫ぶ瑞鶴と、そんな彼女をたしなめる翔鶴

あ、そうだ、彼のことをみんなに紹介しなきゃ、と思い
後ろを振り返ると

いなくなっていた

ぴたっ、と体が止まり、そして、黒いオーラが漏れる

「あ、赤城さんこわい・・・」

と後輩の子が言っているが聞こえない

ふーん

そうなんですね

・

あなたは私のことを二度も助けておきながら
名前すらいつてくれないんですね

仕方がないですね・・・

本当に仕方がないです・・・

私が追って差し上げますから・・・

次に会えたらたつぷりと『お礼』させてくださいね・・・♡♡

『あなた』・・・♡♡

そういつて、恍惚のヤンデレポーズをとりながら、さつきまで彼がいたほうを見続けた

一方馬鹿（主人公）は

ひゃっふうふうふうふうふうふうふう

と、家に帰って、家宝のサイン入りのキラークイーンのお面と色紙を戸棚に飾りギャング踊りしていた

To be continued

四話 神様。俺の人生はシエイクスピアも笑い転げる喜劇なのですか（絶望）

昨日のららぽでの一件が終わり、次の日になる

12時になるとプランクトンたちが消えていってしまうのを、泣きそうになりながら眺めていた。

気にするなど言ってくれた彼らには、たった一日の付き合いでも感謝の念を抱かずにはいられなかった

スタンドがこうして毎日変わるのはなぜなのだろう

俺は、精神が入れ替わっているわけでもなく、ディアボロのように多重人格を持ち合わせているわけでもない

しかし、一つわかるのは、きっと俺が運命に選ばれたということだ
矢に選ばれた者が、特異な能力を身に着けたのと同じように
今日のスタンドを使って部屋に溜まったごみを片付ける

なるほど、この力は確かに便利だ
人間がおよそ出せるスピードを超えて
動く自身の手を見つめてそう呟く

.....

まだ、あと三日間分有給休暇があつて困る

休みが取れて、自由なことをできるのはうれしいが、反面何をしようか悩む

ASBをやりなおそうかなー

なんて考えていると
あることに気が付いた

そうだ

アニメイト行こう、と

四部のアニメが放映されている今なら、グッズも多く取り揃えられているはず

シアーハートアタックのラジコンとか、チープトリックのバックとかあるかもしれない

そう期待を膨らませて向かう

.....

ああ、原稿落とさずに済んだ

そうほつとして、アニメイトにいるのは

鎮守府所属の艦娘、秋雲

同人活動をしている

戦いをしながら同人誌の執筆にあたっているので、なかなか大変だが、やはり

面白いので書き続けている

今日は、同人誌のネタになりそうなものを探しにやってきた

次の分の原稿が出来上がったのでバックにしまって持ってきている

それに私自身こういったサブカルチャーは大好きで、アニメ、漫画、小説はよく見る

おおー、今日はこんな品ぞろえなんだなー、と感心しながら歩いていると

なんかスケッチブックもった変な髪形の人がジヨジヨグッズを買いあさっている

ていうかアレ、コスプレ？

完成度高いなーなんて思いながら、こっそりスマフォで撮っておく
すごい幸せそうにジヨジヨのフィギアとか、店頭限定のカバー
バージョンの小説を抱えて去っていく

あんな人もいるもんなんだな、なんて思いながらショッピングを進
めていると

お店が揺れた

比喻でもなんでもなく、縦にドン、という衝撃を食らい、
震えるお店

突然の異常事態に慌てふためく人々
まさか、と思いつつ裏の方から出て海に向かう

すると、6体ほどの深海棲艦がこちらに砲撃し続けているのが遠目
にわかる

こんな街中で砲撃するなんて・・・

艦装は今手元にないが、何とかして止めるしかない
決死の覚悟を胸に抱き、奴らに向かっていく

.....

あの漫画家のコスプレをしながらアニメイトに来た俺

今日は大漁大漁

そう満足しながら戦利品を見直す

いやー、オリジナルサウンドトラックに、四部承太郎の帽子についている飾りが買えるなんて

あのOP曲を聴きながら、間田くんにやんにやんだンスとか再現するんだ・・・!!

胸に熱い想いを秘めて、さあ帰るぞ、と思った瞬間

爆撃された

ほわあああああ!?

と叫びながら吹っ飛ぶことで威力を軽減する

きりもみ回転を実行し、ダメージを少しでも減らす

幸い、うまく着地できた

すたん、と足から地面につき

グッズは!?

と、あたりを見回すと

真つ二つに割れたCDと粉々に砕けた帽子飾りが目に入る

ぷつん、と何かがぶちきれる嫌な音がする

髪形をけなされた仗助と同じくらい切れていた

.....

「コノキヨリカラウチツツロ。テキノカンタイガキタラテツタイ。イ
イワネ?」

「ハッ」

素晴らしいながら指揮をする飛行場姫

たった、六体だけとはいえ、街にかなりのダメージを与えることに
成功しつつあった

「シカシ、マエニワガカンタイガテツタイサセラタトキイタガ、ヤハリ
ウソジヤナイカ」

一向に敵が迎撃してくる様子など見えず、ただただ一方的に蹂躪し
続ける

「ヒメサマ!! テキデス!!」

「ナンデスツテ？カズハ？」

「ソレガ、タツタヒトツナノデス」

「テツタイスルマデモナイ。ゲキハシテコウゲキヲゾツコウシナサイ」

ハツと了解の意を挙げ、艦娘に向かっていく深海棲艦たち

「ハヤクコイ。『海を凍らせる男』……」

……

ピンチ

まずったー

世界大戦での戦いでもここまで厳しいことってなかったんじゃないかな

そんな風にふざけて目の前の現実から目をそらす

3体の深海棲艦に囲まれ、なすすべもなく、ボロボロに削られる艦娘のための装備がない今の状態ではどうあがいても勝ち目などなかった

それでも

大好きなアニメや、ゲーム

同人誌を愛するものとして

同じものを愛する人たちを死なせるわけにはいかなかった

彼らが避難するだけの時間はかせげたらしい

ああ、死ぬのか

そんなあきらめの気持ちを抱く

もう、漫画かけないな

なんて考えて、せめて最後に抵抗しようと思える

こちらから殴りかかろうとした瞬間

・・・・・・・・・・・・・・・・ああああ

声が聞こえてくる

・・・・・・・・・・・・・・・・ああああああ

どンドン音源がこちらに近寄ってきているのを感じる

・・・・ああああああああああ!!!

そして、さっきの怪しい格好をした男が

海の上をふつとんでこちらに向かってくる

かなり早く、気がついたときには敵の深海棲艦に接敵してしまう

なんで吹っ飛んできてるのか、とか、いやそもそもそんなことがあつたらそんな速度で飛べるの、なんて突っ込みより先に

逃げて!!

そう叫ぼうとした瞬間

彼がこちらをちらっとみて、

にやっと笑ったような気がした

ペンを取り出して、深海棲艦たちに向けてふるう

ヘブンズ・ドアー!!!

そう叫ぶ彼の横顔は、ずっと憧れていたヒーローになれた子供のようであった

10分ほど前のこと

.....

許さねえ

マジで許さん

ジヨジヨ好きな友達のためのお土産も買っておいたのに
それさえもぶっ飛んでいっちゃまった

荒ぶる漫画家のポーズをとりながら敵を見据える

すると、先日であった奴らと同じようなやつらが見える
まーたあいつらか、こりねえな

と思いつつ

さて、どうするかと、考える

今日のスタンドはヘブンズ・ドアー

当たれば瞬殺で敵を倒せるが

いかんせん距離が遠すぎるとスタンドの攻撃が届かない

そして、思いつく

原作で露伴先生がやっていたあの技を

海を泳げないんだったら

とべばいい

そして、自分の顔に書く

「時速300キロで吹っ飛ぶ」と

そして、失念していた

時速300キロとは新幹線と同じ速度であり

そんな速度で生身の人間がぶっ飛ぶとどうなるのか

あばあばばばばばばばばばばば

空気抵抗をもらに受けながら吹っ飛ぶ俺
TASのような動きで敵に近づいていく

やべえええええ、余裕がねええええ

よく見ると、近くになんか深海棲艦たちと対峙している女の子がい
ることに気が付く

今にもやられそうだ

そして、射程距離に入る

高速で敵に近づき、そしてペンを取り出して敵にお見舞いする

露伴先生

あなたの能力お借りします!!

ヘブンズ・ドアー!!!

その日、恋を知らなかった一人の漫画家志望の少女は、『憧れ』に出会う

その日から、同人誌の執筆に加え、妙な格好をした男の絵を顔を赤らめながら書くようになった秋雲を、周りの艦娘が怪訝な様子で訝しんだのは別の話

T o b e c o n t i n u e d

五話 神様。俺の知らないところで何が起きようとして
しているんですか（恐怖）

鎮守府内某日某時刻

二人の女性が食堂で食事をとっていた

それだけ聞くと何もおかしいことはない

しかし、いつもの彼女たちを知る者がみたら驚くだろう

量が少ないと

正規空母のなかでも特に食べる彼女たちは、普通の量じゃ満足できない
ない

だが、何かあったのか明らかに食事を管理して節制している

加賀と赤城

違う色の同じような装備を付けた二人が向き合って食べている

「赤城さん。例の人は見つけられましたか？」

「まだですね。加賀さんの想い人さんはどうですか？」

「空いた時間を使って街中を探しているんですが、なかなか見つからないです」

「そうですか・・・」

そういつて、ため息をつく彼女たち

二人は先日であった謎の男性に助けられている

実は同一人物なのだが、それを知る由もない

お互いの想い人がいることと、そのために協力しあうことしか知らない

「まったく、私の『旦那さん』は恥ずかしがり屋ですから」

「私の『ご主人さま』もそうです」

そういいながら、ふらふらとしていて、なかなか帰ってこない亭主を氣遣う妻の会話に聞こえる

その目が、二人とも同じようにぐるぐるとまわる、狂気を孕んだものでなければ正常だったのだが

絶対に逃がさない

逃げたら一緒に海にしずんでもらう

そう、二人は考えた

・・・・・・・・・・・・・・・・

そんなことをつゆ知らず

絵を描き続ける少女

秋雲

鎮守府から少し離れた場所にまでやってくる

以前、一人で深海棲艦に立ち向かった時にきた場所だ

あの時のことを思い出す

・・・・・・・・・・・・・・・・

男性がペンを構え、深海棲艦にむかつてふるうと

彼女たちの動きが止まる

わけもわからずに呆然とすると

じゃ、ほかのやつらも無力化してくるわ

とあって、また奇声を挙げながら飛んでいく彼

すぐに、敵の主力と思われる艦に近づき、次々に沈黙させていく

一体何が起こって、どうなっているかなんてわからない

けど

たった一つの真実は

描きたいものが今、私の目の前に広がっているということだ

顔が熱くなる

いや

いやいや

いやいやいや

そんな

まさか

私、もしかして

両手で顔を覆って真っ赤になった顔を隠す

頬が熱く、焼けそうになるくらい熱を帯びているのが分かる

ああ

私、こんなにちよろい女だったなんて・・・

もっていたスケッチブックを取り出し、彼を描く

瞬き一つせずに素早く写していく

その顔は、獲物を狙う雌豹のようにららんと輝いており

目はどこまでも濁っていた

あなたを描き続けるのは私だけ

そう、怨念じみた表情でスケッチし続ける

その日、彼からもらった絵は、私の一生の宝物となる

次に彼と会った時に、また驚かされることになるが、それはまた未来のお話

・・・・・・・・・・・・・・・・

ぬわあああああん、つかれたもおおおおおん

ふざけながら家まで帰省する俺

いや、露伴先生の能力はないっす

さすが原稿を数日でしあげてしまう男
この能力があれば、一生楽しく絵が描けるんだけどなー

残念、とつぶやいて
部屋の中にまで入る

そして、先ほどであった少女から渡された絵を見る

露伴先生の格好をした俺と少女が手をつないで仲良くしている絵
だ

おじちゃんいやされるわー

と考えながら、もらったスケッチのページをファイルに大切にしまっておく

男やもめで、女日照りだとかういった女の子からの何気ないプレゼントもうれしいなあ

と、思いつつ柵に戻す

あの後、名前を聞かれたので

岸辺露伴、と先生の名前を名乗り、

また、自分の体に今度は時速150キロで吹っ飛ぶ、と書いて陸ま
で戻ってきた

それにしても最近美人と会うことが多くてラッキーだな
と、ジョセフみたいな軽い思考で気分を浮かせる

スタンド目覚めてから、これ、俺の時代きちやったかな

と、調子に乗りながら、ものすごいハンドスピードでサイン色紙や、

ありつたけの紙にピンクダークの少年を描いていく

友達に、非売品の限定ジョジョグッズだといって一枚あげよう
そうのんきに考えていた

あと、ほんの何日かで、自身がまいた種が原因で修羅場に巻き込まれるとは知らずに

秋雲が描いた絵の二人の手の薬指には、同じような指輪が描かれているが

それに気づけない

彼女たちとの再会まであと『??』日

T o b e c o n t i n u e d

六話 神様。触手プレイをする側の女の子ってどう
思いますか（疑問）

有給休暇残り二日

だらだらと今日も一日を過ごす

あの秋雲ちゃんとおつてからさらに三日が立つ

その間に出たスタンドは

スタープラチナ、ザ・ワールド、キングクリムゾンだった

ちよつとまで

なんで平和な日に強いスタンドばつかでるん

と、思いつつもラツシユを壁に向かって仕掛けてみたり

時間を五秒間止めてみたり

キンクリを使って、落ちてきた石を時をふっ飛ばしてよけて遊んで
いたり

しょうもないことばかりに使っていた

思い出を振り返りつつ、濡らしたタオルを絞り

布団で横になっている触手のついた帽子をかぶっている女性に乗
せる

そう、一番最初にホワイト・アルバムが発現したときに触手プレイ
で襲ってきた彼女だ

拾ったその経緯を振り返る

.....

昨日のこと

家にこもってばかりだとマズイ、
と思い、海の近くをランニングしていた

スタンドがいくら強くても、自身の体力、精神力がそれに見合っ
ていなければ
とんだお笑い草だ

どんなスタンドが来ても使えるように体を鍛えて、また、本編を
読み返して能力を復習しておこう

そう考えながら走り込んでいると

海の上に浮かぶド座衛門を発見した

ダッシュで近くまで駆け寄る
そして海に飛び込み、陸地まで引き合げ、顔を見ると

先日襲ってきた帽子の触手つ子だった
思わず海にリリースし返してしまいそうになるが、キンクリさんに
がんばってもらい
何とか支える

呼吸はしているので死んではないようだが、このまま放置してい
たら死ぬのかもしれない

さすがにそれは寝覚めが悪いな、と思いつつ

背中に背負いながら家まで運んで帰った

.....

そのあと、昨日からずっと眠り続ける彼女を看病し続けて、今に至
るっていう話

ランニングが終わったら、ジョジョのOPと元ネタ集を歌おうと予
約しておいたお店にキャンセルの電話をかけて泣く俺

お風呂に入りたいが、さすがに女子相手にそれは無理、ということ
で大量の清潔なタオルを買ってきて、彼女を拭いて、乾かした

布団を温めて寝かし

今は消化にいい、滋養物を入れておいたおかゆと、免疫力を高める
葛根湯を作っている

でも、なんでこいつが海岸に？

あその後、ホワイトアルバムで瞬間冷凍をしておいた彼女は、こちら
の能力が消えたから溶けて、自由になって逃げられたはず

そう疑問に思いつつジョジョを見てみると

彼女の帽子が目を見ました

本体じゃないんかい
と思いつつ見守ると

一拍遅れて彼女本人も目を覚ました

ぱちり、と目をあげ身を起こし

あたりを見回す

するとじつと見ていたこちらと目が合う

顔がなぜ赤くなっていく

おい、どうした

と聴こうとすると

布団にもぐってしまった

えっ

戸惑う俺

もぞもぞと布団の中にもぐって出てこようとしないう彼女
そのままチクタクと時計の針が進む音が部屋に響いた

.....

落ち着いたか？

こくん、とうなずきながら、葛根湯を飲む彼女

そういえば深海棲艦に人間の食事って意味あるのかな
と思っていたがどうやら大丈夫だったようだ

ガスに火をつけ作っておいたおかゆを温めなおす
レトルトのおかゆだが、鰹節や梅とかを少し混ぜるだけでズドン、
とうまみが引き立つ

そして、彼女の顔を見る

先ほどまでの取り乱しように嘘のように落ち着いていた
何かつきものが落ちたような顔になっている

いやーそれにしても

最初会った時はどけ、ブス、なんていったけどめちやくちや美人だ
なあ

ちよつと失礼だったかななんて思いながら彼女の顔をもう一度見
る

目が合う

瞳には、もう嗜虐的な狂気の色は見えなかった

で、君はどうしてあそこにいたの？

そう聞く

「……オマエニコヲラサレテカラ、アノアトズツトミウゴキガト
レナカッタ。

シカシ、ソレカラナンジカンカタツトキュウニコオリガトケテウゴ

ケルヨウニナツタ」

やはり、能力がホワイト・アルバムからフーフアイターズに切り替わったタイミングだ

スタンドが消えたことで、スタンドの能力で凍っていた彼女も解放されたのだろう

「シカシ、ワタシガアワテテナカマノモトニカエロウトスルト、スデニナカマノスガタハミエナカツタ」

ああ、あいつらが凍った仲間を連れて帰ったのは俺の能力がなくなる数時間まえだったもんな

そんで、その数時間後にこいつがやってきたが、もうすでにみんな消えていたと

「ドウシヨウカマヨツテイタラ、イキナリクロイナミニノマレテ：：イシキハソコデトギレタ」

・・・うん？

黒い波？

まてよ

確かおれ、フーフアイターズを海に解き放って滅茶苦茶に増殖させまくって

それに乗っかって、サーフィンして陸地まで向かう途中何かを跳ね飛ばしたような・・・

気づく俺

冷や汗が止まらない

「メガサメタラヲマエガメノマエニイタ、トイウワケダ」

独白を終えて、再び横になる彼女

このことは墓までもつていこう

そう誓うのであった

.....

で、どうするの？

とりあえず彼女にこれからどうするんか聞いておく

「イクアテモナイ。ココニオイテホシイ」

同棲の提案をされる

いや、同棲といよりは同居だな

彼女の顔は群れからはぐれてしまった小象のようなおびえたもの
だった

彼女に向けて手を伸ばす

びくり、と体をこわばらせるが
頭に手を置き、撫でる

セラピー効果に、接触を繰り返すことにより、精神的に安定する
というデータを見たことがあったので試してみる

目を細めて撫でまわされる彼女
どうやら効果があつたみたいだ

そう思っていると、手を掴まれる

おおおっ?!

ぐい、と布団の中まで引きずり込まれる

そして、彼女の目を見ると
漆黒の意思を宿しているのが見えた

ナニを決意してるのかわからないがマズイ

と思つて出ようともがくが、触手に体をからめとられ身動きが取れ
なくなる

今日のスタンドを出して応戦しようと考えてるが、その性質からし
て、どうしてもけがをさせてしまう可能性が高く、彼女に向けて使う
ことがためらわれる

そうしていると彼女がこちらの顔をがしり、と掴んでくる
ああ、恨んでいたのか、ころされるかとも思い目をつむると

キスをされた

ズキュウウウウウウウウウ
という擬音が頭の中で再生される

・・・？

・・・?!

状況に気が付き、慌てる俺

しかし、頭をがちりと掴まれ逃げられない

舌を入れられ、口の中を蹂躪される

ぬちやり、ぬちやり、舌と舌が絡み合いもつれる

そして、下半身のズボンを下ろされる

「ヲマエハハタシヲオシ、ワタシノイバシヨヲウバツタ。ダカラオ
マエガワタシノイバシヨニナレ。キヨヒケンハナイ。」

深淵を思わせる暗い瞳、いわゆるレイプ目というものをこちらに向
けてそういつてくる彼女

ま、まって・・・

「デハイタダキマス」

その日、久しぶりに両親に電話し、彼女ができたことを伝えると大層喜んだそう（白目）

T o b e c o n t i n u e d

七話 神様。女性を拾ったと思ったら婚約者になっ
ていました。ポルポルくんってこんな気持ちだった
んですね（共感）

「ハジメマシテ、フォーと申します」

そう三つ指についてお辞儀をする彼女

どこからレンタルしてきたのか、振袖を着ていて、まるでこれから
あなたの息子さんをイタダキマス、みたいなそんな感じだ。

一日で流ちょうな日本語をしゃべり始めたときにはびっくりした
が

両親はあら、あら、と言って笑うばかり

おそらく、この二人が今考えていることは、「このお嬢さんを絶対息
子とくつつける」

とでも考えているのだろう

しかし、そもそも俺は彼女のことを両親に紹介とかする気はなかつ
た

最後の有給休暇を使って実家に帰省してきたが、まさかこんなこと
になるとは計算していなかった

式はどうするとか、指輪は三か月分とか言っているが全力で聞こえ
ないふりする

.....

彼女に昨日襲われ、それまでの彼女いない歴〃年齢と永遠のお別れ

をつげ、幸せそうに横で眠る彼女を見る

あれだけ激しく求めてきた肉食的な娘が、赤子のように眠っている

なんだか変な感じだな、と思い頭を撫でてやる

えへへ・・・と笑ってはにかむ

かわいい（断言）

素数を数えて落ち着く

1, 3, 10, 13, 8, 5, 9, 18

これ素数じゃねえただの数字の羅列だ

結局襲われ、何度も何度も求められもう許してほしい、と頼んだところ

実家に紹介してほしい、と言われて

胃がきゅつと締まる思いだったが、彼女にもてあそばされ、それまで童貞だった俺になすすべもなく抵抗もできずに一夜を明かした

そして今に至る

この年で人生の墓場に入ることになるとは思わなかった・・・

ジョジョグッズを買うことはもうできないのかな

と悲しみながら、横で両親と談笑している彼女を見て、ま、いいかと考える

湯呑に写る今日のスタンドが嬉しそうにしているのはきつと気のせい

.....

「これは一体どういうことだ？」

疑念の声を挙げる男

ブラック鎮守府のトップ、提督である

自身に充てられてきた、新聞の切り抜きを張り付けて作られた手紙
いや、告発的なものといえいいのか

「私は元深海棲艦の兵士であり、その内部情報を知っている、と」

この文書を見て驚いた点が大きく上げて二つ

元、という字と、こうしてかつての敵にわざわざ接触を求めてきた
点だ

「罨か？いや、しかし・・・」

そもそも罨だったらこんな明らかに怪しい書体で送ってくるのか
手紙も新しく開封されたばかりの新品の封筒であり、中の紙も同様
であった

何かDNA、もしくは指紋が検出されないか妖精に掛け合ってみた
が首を振られる

こちらにその正体がばれるような手がかりを残すようなマヌケで
はないということだ

元深海棲艦側の者だったという主張が正しければそれは、絶好の機
会がこちらにめぐってきたことになる

敵側の内部情報をすべていただき、戦力を丸裸にする

重要拠点を割り出し、集中攻撃を繰り返す

こちらに深海棲艦側の内通者がいると発覚するまでは有効打を与
えられ続けるだろう

そして、そこで挙げた手柄を基にこんな田舎の辺境からおさらばして大本営のトップの椅子に座るんだ

こぶしを固く握りしめ、一人で指定された場所まで行くことにする

しかし、彼は一つ大きく間違っていた

愛するものを持った女の強さを知らなかったことである

.....

実家への挨拶が終わった後、フツちゃん（こう呼んでくれないと毎日からからになるまで搾り取ると脅された）が用事があるとか何とかで、どこかに行ってしまった

夕方までには帰るようだから大丈夫だろうけど

別れる際に頬に軽くキスをされて慌てて取り乱してしまった

くそう

持っているコンパクト型の手鏡に映るそいつがにやにやとこちらをみて笑ってやがったので、鏡にガムテープを貼って出られなくしてやる

めっちゃ焦っているこえが聴こえるけど知らん

晩飯はどうすっかな。惣菜を買うか。いや、でもフツちゃんが帰ってきてからまた外食にするかどうか決めたほうがいいかな。

と、海の近くを歩きながら考えていると

遠くに見覚えのあるやつが視認できる

鏡に貼りつけてあったガムテをはがし、スタンドを向かわせて様子を調べる

間違いない

ヘブンズ・ドアーが発現したときに戦ったツインテールの露出狂だほかに連れている奴はいないようだが、それにしたってなぜ一人でここに？

スタンドを近づけ耳を傾ける

聴こえた情報を頼りに推測すると

誰かを探しているようだ

誰か？

あっ……(察し)

おととい拾った婚約者のことを思い出す
ヲツちゃん、むっちゃんお仲間が探していらっしやるよ

しかし、その様子は足手まといを始末しに来た、というよりは友人を気遣ってきたという感じだ
もしかして、ヲツちゃんの親友みたいな子？

試しにスタンドで話しかけてみる

今使っているスタンドは原作の三部でもしやべっていた超遠距離タイプのスタンドだったので意思の疎通は簡単だった

しかし、相手はスタンド使いではないようなので、声だけが聴こえるというはたからみたらホラーなテイスティングだが

おい

「!?」

真後ろから話しかけるといきなり振り向いて撃ってきた

あつぶねえ

実体型のスタンドだったらくらってたぞ

そう冷や汗を流し、会話を続ける

お前が探しているのは触手が付いた帽子をかぶった女の子か？
そう問いかける

びっくりする彼女

まあ、いきなり声がしてきたらびびるよな

「・・・あなたは誰かしら？」

そうだな、今使っているこの能力にちなんでつられた男（ハングドマン）

とでも名乗っておこうか

「姿を見せない相手と会話しなさいと？」

姿をみせないんじゃない、透明みたいなもので見えないだけだ

警戒を解かない彼女をみてそのまま続ける

お前が探しているであろうそいつは無事だ。安心しろ。

この辺りは鎮守府が近い。哨戒任務にあたる艦娘と接触したらただじゃすまないから

今日のうちは帰れ。

そう忠告して諭す

「・・・嘘は言っていない様子だけど。また来させてもらうわ」

また、会えたらよろしくな。何か彼女に伝えておくことはないか？

「元気ならいいわ。それじゃあね。ハングドマンさん」

そういつて身をひるがえし帰っていく彼女

実は結構焦っていた

ハングドマンは光の速さで自由電子をもつ物体から物体へと移動できる

それを駆使して会話の最中もあちこちに飛ばしていた

すると、ほんの数メートル先に艦娘たちの姿が見えたからこのままでは戦闘行為に発展すると考え、急いで彼女をひかせただ

もし、彼女が退かなかつたらやばかった

そうして、その場を後にする

.....

数分後、赤城率いる艦娘の部隊がその場に到着する
「……………」

「どうしたんですか、赤城さん」

吹雪に言われてはつとずる赤城

「いや、なんかもう数分早く来ればあの人に会えたんじゃないかな、と思つて」

赤城が最近よく話す、離れ離れになつてしまったという『旦那さん』
その人がどんな相手かは誰も詳しくは知らないが、赤城さんが入れ込むほどだから素晴らしい人なんだろう

そう思い

「会えるといいですね」

と返した

ちよつと離れた場所では艦載機を飛ばして必死に何かを探す加賀さん

目をくわつと見開き

「あの人の香りがする……………」

といつてしきりに何かを追い求めている

潮の香りぐらいしかしないけどなあ

周りを数分警戒し、敵影を探知したが結局確認できなかつたので
帰投する

最近鎮守府がピリピリしているけど何かあつたのかな

何も知らない吹雪はそう考え、帰ったら間宮さんのアイスを食べよ
う、と
胸を躍らせる

T o b e c o n t i n u e d

八話 神様。愛する人がいるって言うのはいいものですね。人生の墓場に入ってしまったが（憐憫

男がとある喫茶店で女を待っている

どこにでもある、チェーン店の一種だ

それだけ聴くとデートの待ち合わせのように感じるかもしれない人もたくさん入っており、にぎやかな喧騒があたりを包んでいる

ネイビーのジャケットに茶色のグラサンをつける男

提督がテーブル席で待っていた

先日呼び出され、指定されたこの場所までやってきたのだ

まさか、密会場所にこんな人が密集する場所を選ぶとは

機密保持の仕方が分からない相手ではないだろうな

と独りごちて、コーヒーを飲みながら待つ

そして、自分の前に誰かが座る

髪はロングで白銀の色合い

服装は白のワンピースに麦わら帽の美形の女性だ

しかし、その姿を今まで戦ってきた彼が見間違えるはずもなかった

深海棲艦の一人

ヲ級

その彼女が自分の元まで取引を持ち掛けてきた

「つけられていないだろうな」

「そんなミスをするのはよっぽどの馬鹿だけ。では商談に入りましよう」

そういつて、淡々と話を進める彼女

「私が知っている深海棲艦側の情報を渡す。その代り戸籍と、お金を用意してほしい」

要求してくるものがシンプルで驚く。しかし、戸籍？

「人間側で生きるには必須。もう深海棲艦としては活動しないから」

そういつてじつところちらを見つめてくる彼女

嘘は言っている様子は無いが・・

「金はわかる。しかし、なぜ戸籍なんかを？戸籍がなくても金があれば生活はできるだろう」

公共の交通機関を使うために必要な場合もあるが、たいていはお金で解決すればいい

すると、彼女の口から爆弾発言が飛び出す

「戸籍がないと結婚できないでしょう」

絶句

結婚？

こいつが？

誰と、と聴こうとして殺気を飛ばされる

「勘違いしないで。あくまで協力関係であって仲間ではない。そこははき違えないで」

教えるわけがないと一蹴される

まあ、いい

私にとって利用価値があるのなら利用しきってやる

そうして、交渉を進めていき、彼女と定期的に場所を変えて落ち合うようにした

彼は自分が彼女を利用していると思っている

しかし、彼女の狡猾さを知っている田中君がいたら「あの娘が利用される側？ ないない」

と手をふって否定していただろう。

自身が企てている計画を進めるために、彼女は今日も戦う

.....

あれからハングドマンで深海棲艦と接触してから帰ってもらい、戻ってきたヲツちゃんと一緒に外食に出掛ける

なんでもお仕事を見つけたからそれに行っていたのだという
なんだかんだいって生活費のために働いてくれるヲツちゃんマジ

天使

今日は寿司を食べたいのだとか

海にいるなら飽きるほどおさかなとか食べているんじゃないの？

と聞くと、人間の料理は別次元のうまさだという

彼女が読んでいた雑誌に寿司が載っていたからでは決してない

しかし

本当に回転寿司でいいの？

「前通りがかった時に来てみたかったんだ」

と笑う彼女

そっか、こういうのも海のそこじゃあ見かけないもんな
一心不乱にばくついでいく

元深海棲艦だけあって人間よりはたくさん食べるらしい
食べ終わって何が一番好きか聞いてみたら

「お茶」と言われ複雑な気持ちになった

渋い・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

はははははははははは
!!!!

不敵に執務室で笑う男

この戦い、我々の勝利だ!!とフラグを盛大におつたて
勝利宣言をかます

ヲ級から提供された情報をもとに作戦を立てていく
明日が奴らの最後の日だ

総攻撃だ

バケツ? いらぬ

大破した? かまわん、いけ

そんな命令をくだす気であつた彼だが

まさかヲ級に二つの意味でだまされているとは夢にも思っていな
かった

鎮守府内の別の場所で

「明日なんでも辺鄙な島に総攻撃をかけるんだってー」

そういつて足をばたつかせてベットでファッション雑誌を読みながら話す蒼龍

「いやー、前大破進軍したばっかだから、正直不安だよねーあの提督」
爪の手入れをしながら話す飛龍

二人は今の提督に対して不信任を抱いている

ブラックと呼ばれる過酷な労働環境を現代の社会でも指すが

この鎮守府もそれに該当する劣悪ぶりであった

「誰かほかの人が提督になってくれないかな」

「私もそう思う」

だよねー、と共感しあいながら提督がもつと優しくて頼りになる人に代わってってくれるのを願う

それがある形で叶い、二人がメロメロとなるのはすぐ先のこと

.....

寿司を食べおえて、帰ってきてフツちゃんと夜戦を繰り広げる

彼女のベッドテクのすごさに死にそうになるが、男の意地で乗り越える

つやつやした顔つきでようやく眠る彼女

トニオさんの料理を食べて体調を良くしたい

そんな切実な思いをよそに、12時を回ったので今日のスタンドを
確認しておく

出る、と念じて出す

すると、そいつはそこに現れた

ぶよぶよの太った体に、眼帯

頭には独特のデザインが施された、矢じりがてっぺんについた頭で
ある

こいつの名前は・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「いつてらっしやい♡♡あ・な・た♡♡」

いつからこんなに好感度を稼いってしまったんだ、と考えてもわから
ずに

フっちゃんに見送られて仕事に向かう

まさか有給休暇をとって嫁さんができるとは、このリハクの目をもつてしても見抜けなかった・・・

いってらっしゃいのちゅーを済ませて今日から職場に復帰する

ああ、こんなところ職場の人たちとか、同僚とかに見られたら問い詰められそう

特に女性陣はこういった話題が大好きだからな

絶対ばれないようにすることを誓って、今日も一日働く

今日がこの職場で働く最後の日になるとは、この時の俺にはわからなかった

『彼が提督になる運命の日』

T o b e c o n t i n u e d

九話 神様。妻に首輪をかけられてるような気がするんですが気のせいでしょうか（寒気

職場について仕事を進める。

プロジェクトの納期は普通に間に合っていたようでホツとする

お昼になったのでご飯を食べようと、ヲツちゃん特製の弁当を取り出す。

念のためにちらつと中身を確認しておく

ハートマークが桜でんぷんで書かれていた

なんつーベタな・

ヲツちゃんのいたずらに呆れながらもうれしいと思ってしまっている自分が

いることを認めつつ、さすがにここでは食べられないな、と思いつ場所を移す。

そうしてやってきたのは近くの隠れスポット。

人があまり来ないので自分一人でゆつくりたべたいときにはよく来ている

周りに人がいないことを確認してあいつを出す

じゃあトイレ行っている間にお昼の準備しておいて

「かしこまりました。旦那様……」

そういつて、ぎよろり、と気味の悪い目をこちらに向けてにらんでくる

ぶよぶよした体つきのスタンド

原作では遠距離型の自立行動型のスタンドだったが、こうして命令を下せば普通にいろいろと働いてくれる

手を洗ってヲっちゃんのアメ妻弁当を食べて、午後もがんばろう
そう考えてお手洗いに向かう

.....

ヲ級はあの人に拾われてずっと考えていた。
なぜあの人は私を助けてくれたのか、と。

戦いの中で殺しあつて、首を絞めて殺害しようとした私をあつさり
あのバカは許した。

不思議な能力で私を氷漬けにした時もそうだ。

そのまま砕いてしまえばよかったのに、知らんぷりしてすぐに離れ
て行ってしまった。

そうして、仲間とはぐれてあてのない私をあの人は看病までしてく
れた。

あたたかな気持ち胸の内を占めていることに気が付く。

彼と一緒にいる一分、一秒が楽しく、いとおいしい。

あの人との子供を産んだらどんなに女として幸せか考える。

顔が赤く色づき、頬は真っ赤に燃えて熱い。

ああ、何が決め手かわからないが、あの人に惹かれてしまったよう
だ。

そうして、あることを思いつく。

鎮守府側に接触して、元仲間の情報を売って戸籍とお金を手に入れ
よう。

毎月手取りが16万円だとさすがに二人で暮らしていくのは厳し
い。

あの人はさらに働いて稼いでくれると思うけど、そのたびに一緒に
いることのできる時間が減ってしまつては本末転倒だ。

そうして、お金を手に入れた。

税務署から逃れられるために提督という男のポケットマネーから譲渡された現金だ。

振り込みだと足がついて、最終的に国家権力につかまる恐れがあるので

現金を手渡させている。

向こうは私のことを利用している気の様だったが、あまりこういった政治的な

ことを経験したことはない甘ちゃんだとうかがえる。

やけに自身満々に私とたった一人きりで相對してきたのにはびつくりしたが、

それでも艦載機をかれの周りに数台常に展開させ、監視ヲ行っている。

旦那にはその数倍の数の監視を既につけておいてあるが。

そうして、今日も幸せな一日が始まる。

あの人が帰ってくるまでに、部屋を片して、ジヨジヨグッズをきれいに磨き上げて、

夕飯を作って待つ。

なんてすばらしい生活なのだろう。

おかえりなさい、と言って早く今日の仕事の疲れをいやしてあげたい。

そう飛ばした監視で彼を見つめながら今日も一日を過ごす。

.....

昨日寿司食べすぎたのかポンポンが痛い。

トイレの住人に危うくなるところだったが、バッグになぜか入っていた正露〇を飲んで事なきを得る。

くそう、ゴールド・エクスペリンスがあれば頑丈な胃をつくって交換するのに

そんなくだらないことを考えながら、先ほどの場所に戻る。

「もつとおおおお」とか震えだすのでもう攻撃は加えないことを誓った。

.....

「では作戦を開始する!!」

そう全軍に向けて通達する鎮守府の提督

先日リークされた情報をもとに今日の攻撃作戦を立案し、すぐに行に移した。

さすがに艦娘からは反発の声が多かったが、解体するぞ、という脅しをちらつかせ

無理やり働かせた。

その影響かさすがに士気は最悪だった。

(お前らはせいぜい私のために死ね!こんなところで終われないんだよ、私は.....)

どす黒い感情を胸に抱き、勝利のことしか考えない。

それが結果的に最悪の状況を招くことになる。

総攻撃があるとある島に仕掛けられる。

昼から始まり夜中の12時以降まで続いたその戦いは、不思議な現象が起きた戦いとして、のちに軍部でうわさされる。

すべてを『ゼロ』にする圧倒的な存在を感じたとは、その時その場所 にいた艦娘の談である。

『田中君が提督になるまであと10時間』

To be continued

十話 神様。月までぶっ飛ぶ衝撃を食らったんです
が私が何かしましたか（悲しみ）

仕事帰り

家で家事にいそしんでいるであろう彼女のためにしやれたスイー
ツを買うために並ぶ。

周りに並んでいるのは女性ばかりで少々気恥ずかしいが、さすがに
何か返してあげたい、という気持ちが出てきたので近所の有名なお
菓子屋さんまでやってきた。

▪ あたりまえだがヨーヨツマツはしまつてある

こんな奴が人の目にさらされたら騒ぎになってしまう。

そういえば財布にお金が入っていたっけな、と財布をいじるって
いと

ここから見える島の方から何か音がしてくる。

エンジンの駆動音、爆撃音、日常にはおよそにつかわしくない音だ
ざわめく人々。▪ 逃げてゆく。

スイーツを買うのはあきらめ、島の方に行くことにする。

今日のスタンドでどこまでやれるかはわからないが、戦いらしきも
のが起こっていることはここからでもうかがえる。

万が一また、深海棲艦が襲ってきたのなら止めないとマズイ。

前は何とも思っていなかったがフっちゃんを知り合った今、さすが
に何もせずに入られない。

メールでちよつと遅れる旨を彼女に伝え、祈りながら歩を進める。
せめて、相手が弱い奴でありますようにと。

.....

笑いが止まらない

こうもうまくいくとは

あの女が漏らした情報は本当だったのか

深海棲艦のアジトがどこにあるのかは謎だった。

そして奴らがどこからすぐに来て、どこにすぐ消えてしまうのか謎だった。

簡単な話だった。

.....

島の中身をくりぬいていやがった。

少しずつ、少しずつ年月をかけ、それを行い、そこを隠れのみして今日まで生きていたのだろう。

本拠地は別だろうが、ここは敵の最重要拠点。

我々の鎮守府から一番近い場所だ。ここを失えば敵は攻撃の足掛かりをなくすこととなる。

反抗的だった奴らには例の薬を飲ませてある

感情と記憶を一時的に失うがすべては勝利のためだ

士気の低下もこれで防げるので一石二鳥だ

なあにいざとなったらどうとでもなる

艦娘の代わりはいくらでもいるのだから

.....

「ヤツラガキタカ」

「アア、ソノトオリダ」

アジトの中で敵の攻撃を受けながら話すレ級とタ級

「シカシホントウダツタトハオドロイタナ」

「アア、エタイノシレナイテガミガオクラレテキテ、チカヂカニンゲン
ドモガココヲオソウトハ」

「マユツバモノダトオモツテイタガシンジツダツタヨウダナ」

ヲ級が流した情報は確かに鎮守府にとっては正確な情報だった。

嘘は行ってもいないし、間違ってもいない。

.....

ただ深海棲艦側にも鎮守府側の情報が筒抜けだったただけだ

「バクヤクハドレクライシカケテアル」

「シマノハンブンガナイブカラフツトバセルクライハアルゾ」

そうにやりと獰猛に笑って答えるレ級

「マンガイチウソダツタパターンヲカンガエテイツデモスグニバクヤクラシマエルヨウニシテアルガ」

「ソノシンパイモナカツタ、ト」

獲物を狩るつもりで来た彼らは知らずのうちに追い込まれる

自分たちに利用されていると提督に信じ込ませたワ級は二重スパイをした

深海棲艦側に戻ることで嚴罰処分を食らい、最悪命を奪われるといった可能性を危惧した彼女は、深海側の者しか知りえない情報を手紙に書いておいて、信ぴょう性をつけ、

鎮守府側に居場所がばれていることを伝えた

「イツモノシカエシ」

「ト、イキマスカ」

島から離れていく深海棲艦たち

艦娘たちは何も知らずにアジトの内部に入っていく

.....

「何もいない、だど？」

「はいそうです」

無感情な言葉を述べる吹雪

そんなはずはない

現にこうして島の内部まで斥候が侵入することができたのだから

「馬鹿なことがあるか!!いないっていうことはまるで奴らがここを襲われることを知っていて放棄していったとでも……」

素晴らしいながら気づく

ワ級

奴は確かに戸籍を用意しろ、と、取引で持ち掛けてきていた。

しかしそれは一つではなく複数であった

まるであの数は、まとめて亡命を行うための・・・

そうして今更になって気づく

なぜ侵入したというのに、こうして私自らが敵地に入り込んで攻撃す
すられないのか

敵が単純に拠点を放棄したのはありうる

しかし、ならば深海棲艦がわの情報を残すような施設の破壊を行わ
ずに残すのか？

では、わざわざ破壊しなくてもいい状況とは？

「撤た・・・」

言い切る前に

閃光があたりを包む

それが爆発する前の発光現象だときづいた時にはもう遅く
意識が暗転した

・・・・・・・・・・・・・・・・

原作であつたようにヨーヨツマにボートを操縦させる

ぎーこ、ぎーここと必死に漕いでいく召使い

とても遅くてスロウリいいいなんだよおおおおとヨーヨツ
マつと小突く

もつと早くこげないん？

「私はこういった作業をすることはできますが、本領を發揮できるの
は

敵に自動追尾の能力を使った時ですから・・・」

ぐえつ、ぐえつと笑う

よだれが垂れるが慌ててよける

てめつ、そのよだれはものを溶かす溶解液だろ!!あぶねえな!!

「スイマセエン、何分おなかが空いてしまいました」

グルメぶった感じでそう言う

イラツと来たのでバッグに入っていたチョコレートをそいつの口の中に投げて入れてやる

「んんまあああああゝゝゝゝいいい」

舌でべろべろと溶かしながら咀嚼している

ほんとになんなのこいつ

「・・・あれ？」

なんだよ、御代わりはやらねーぞ

「いえいえ、いただけたら嬉しいですが、音が聞こえなくなったと思いますして」

え？

島の方に耳を傾けて音を拾おうとするが何も聞こえない

確かにおかしい。さつきまでは島に対して爆撃していたような音が聞こえていたはず。

嫌な予感がする

ちよ、ヨーヨツマツ、やっぱり沖の方に戻・・・

れとは言えなかった

なぜなら島の半分が突然吹っ飛んだからである

大きな波が立ち、ボートが転覆しそうになる

あばばばばばばばば

「大丈夫ですか?!旦那様!」

ガチモードに変わるヨーヨツマ

さつきまでのふざけた感じはどこにもない

「ボートからふつとばされないようにロープを自分の腰にしつかりと

巻き付けてください!!」

そういわれ慌ててボートと自分をロープでつないでシートベルトの代わりにする

何とか持ちこたえたと思った瞬間

シートベルトの意味がなくなる出来事が起きる

ボートごとぶっ飛んだ

それも思いつきり

うおおおおおおおお!?と叫ぶ暇もなく吹き飛ばされるヨーヨツ
マと俺

かろうじて海面に顔を出した俺が最後に見たものは

高さ7メートルを超える大津波だった

波に飲み込まれながら、こんな時ジョセフだったこういうだろうと
考える

OH MY GOD!!!

そこで俺の意識は途切れた

T o b e c o n t i n u e d

十一話 神様。目が覚めたら幼女が私のスタンドに馬乗りになっていたんですがどういう状況なのか（困惑）

なんだか不思議な感覚だ

ふわふわとしていておぼつかない

自分の前に誰かが座っているのが分かる

『おや、君は私たちと同じかと思っていたが、まだ“こちら側”じゃないね』

目を開けると、警官服を着た男性がこちらを見ていた

しかし、顔がはつきりとよく見えない

あたりを見回すと二階建てのバスや、遠くでパスタを食べているらしき長髪の人物が見える

『どこから来たのか思い出せるかい？』

頭を回転させ考えるが、なぜ自分がこのような場所にいるのかわからなかった

『思い出せないのなら、“違う”ということだ』

そういわれるがなんのことだかわからない

『今はまだわからなくてもいい。君が本当に“こちら側”に来たらゆっくりと話そう』

そういうと目の前の景色がぼやけていく

『いいかい。大切なことは真実に向かおうとする意思だ。それだけ覚えて入ればいい』

あつたばかりの人間にアドバイスされるなんて変だと思ったが

なぜか胸の中にすっと入ってきた

『じゃあ、またな』

そういうと意識が薄くなっていき

最後に見たのは

輝かしい光をもつ眼の警官の顔であった

．．．．．とおおお

．．せえ

．．．．．つとおおおおおお

．．るせえ

もつとおおおおおお！！

うるせえええええ！！

叫び声のあまりのうるささに顔をがばつと上げて起き上がる
すると隣で

ヨーヨツマが白い幼女に乗っかられて馬になっていた
なにやってんの？

「お目覚めになりましたか。あつも．．．」

また叫びそうになったので先に顔面にグーパンして黙らせる
顔から突っ伏して倒れる

するとそれに乗っていた幼女が

「オキタ!!ニンゲンガオキタ!!」

とってはしゃいでどこかに去っていった

よく見ると俺たちがいるのは牢屋らしい

手には手錠がはめられている

あのあと、最後に津波に飲まれたはずだがそこからの記憶がはつき
りしない

「いやあ、旦那様も悪運が強い方でございますね。あなた様が死んで
しまったらわたくしめも死んでしまうのではとはらはらしております
した」

にたり、とカエルを思わせる笑みを浮かべる

ここはどこだ

「なんでも先ほどのお嬢さんがわたくしたちを拾ってここまで運んで

くれたそうですよ」

マジか。じゃああの娘は命の恩人？

「でしょうねえ。これからどうされますか？」

まずは状況確認だ

バックが流されたのか、なくなっちゃまっている

スーツはドロドロのビショビショ

クリーニングに出してももう治らないだろうな

新しく買い替えた防水仕様の時計で時間を見る

時刻は22時を指していた

まだ次の日になるまで2時間ある

「わたくしめが消えるまであと二時間ですか・・・寂しいですねえ」

といいながら近くに生えているペンペン草を食べるヨーヨツマ

つまり、このつかまつているであろう状況を乗り切るために

あと2時間はこいつで何とかしなければならぬということだ

そして、さっきのこどもの格好、最近よく見かけたような・・・

.....

ヲかしい

メールでちよつと遅れるという旨のメッセージを受け取ってから

もう20時を回っている

さすがにいくら何でも遅い

夕飯はカレーだから温めなおせばいいだけだが、かれと一緒に食べ

たいのだ

なんか召使とかいうかれの近くにいる奴に伝言は伝えておいたか

ら

私が夕飯を作って待つていることは伝わっているはずだ

彼を監視していた艦載機を近くの空き地に休憩させて置いたら、い

つの間にかいなくなっていた。慌てて探しても、この街のどこにも見

当たらない

あと探していないところといえば・・・

「あの島くらいだけど・・・」

まさか・・・ね

彼女は彼がかえってくるまでの間未亡人のきもちを味わうことになり

今煮込んでいるカレーのように彼女の『愛』が深くなるが、ここにいない彼には知る由もない

・・・・・・・・・・・・・・・・

あのホッポ?とかいう子供が出て言って数分ほどたち

ぞろぞろと何人かがやってきた

「オー、イキテイタカ」

そういつてシシシと笑うしっぽに蛇のようなものが付いたフード付きのパーカーを着ている女性と、セーラー服の上にきわどいほとんど紐の水着を履いている女性

「アタシハレ級ツテンダ」

「ワタシハタ級、ヨロシクネ」

深海棲艦だつていうから、恐ろしい相手ばかりだと思つていたけど案外いい人そうだ

なぜここに自分がいて、しかも人間の俺が殺されも拷問もされないのか聴いてみる

「ナンデツテ・・・イヤ、ワタシタチニンゲンガキライナワケジヤナイシ」

「タガイニタガイノシユゾクガイキノコルタメニコロシアツテイルダケダシナ」

そうあつげらかんといい彼女たちに思わず二の句が継げなくなる

生物としての価値観が根本から違う

そう感じずにはいられなかった

すると、さっきまでここにいた幼女の背中に乗っかられる

見た目のわりに結構重くてビビる

「カタグルマ!!カタグルマシロ!!ニンゲン!!」

そうゆっさゆっさと揺らしながらねだってくる

「アラ、ソノコガスグニナツクナンテメズラシイ」

「オマエキニイラレタヨウダナ」

なんでや、ヨーヨツマにのればええやんけ

「ソイツブヨブヨシテノリゴゴチガヨクナカッタ!!」

ええ・・・(困惑)

すでに肩車した後かよ

仕方がないので肩車してやる

「ワイ!!」と無邪気にはしゃぐ子供

「ジャア、目ヲサマシテオナカモスイタデシヨウカラゴハンデモタベ
ニイキマシヨウカ」

「メシダメシダー」

そういつて先に歩いていく彼女たち

えっ、俺このまま？

とは思いつつもなんとか彼女を背中におぶさりながらついていく

ここは一体どこで、俺はどうなるのだろう

ようやく危機感を抱きつつ、まずは腹を膨らませるために進むので
あった

子供が髪を面白がってプチプチと抜いてきて痛い
ていうか誰かとめろや!!

T o b e c o n t i n u e d

十二話 神様。なんかスカウトっていうのを受けているんですが美人局ではないですよね（恐怖

暗いくらい闇の中

自分がどんな状態になっているのかもわからず目を覚ます

最後に見た風景は光

それから爆風で吹き飛ばされて・・・

周りを見渡す

真つ暗で何も見えない

持っているケータイで明かりを照らす

しかし、周りはがれきの山ばかりだ

自分が吹き飛ばされてまだ数時間しかたっていないが

それでも今の状況はマズイ

洞窟の中に閉じ込められた

ケータイの光が唯一の光源なのですぐに電源を切っておいて温存する

ちきしょう

なんで私がこんな目に

敵の戦力を知って、アジトを責めて、一網打尽にする

そんな簡単なものだと思っただのに

喉が渇く

何か、飲みものはないのか

ぴちゃん、ぴちゃんという水滴が滴る音が聞こえてくる

手探りで探し、手がその水たまりに触れる

上から落ちてきているしずくを一滴一滴大切に飲む

このままでは酸素も持たないかもしれない

いや、それ以前にこの場所が崩壊して、生き埋めになってしまうかもしれない

一度悪い方向へ働いた思考は止まらず次から次へと考えが収まら

ない

い……

いや……だ……

しにた……く……ない……

ずりずりと体を引きずり

壁にもたれかかる

ケータイの電源を入れてまた光をともす

死にたくない、死にたくない。まだ、生きていたい。

私をこんな場所に追いやった奴らを見返してやるまでは

力が体から抜け、手からケータイを落としてしまう

奥の方まで転がって行ってしまい、自分の周りの景色が暗くなり

何も見えなくなる

ひ……ひ……ひ……!!

暗闇におびえ、うずくまる。

こんなの……こんなの現実じゃない……!!

這ってケータイを取りに行く

そして、前をむいた瞬間見えたのは

一本の矢が真っ直ぐにこちらに向かってくるところだった

……

ごはんうめええええええええええ

フっちゃんの飯と同じかそれくらいのおまさの料理に舌鼓を打ち、
堪能する

杜王町でシェフやって生きていけるレベルの食べ物に感動し涙が
出てくる

「ソナニオイシイ?」

うん、うん、とうなずきながらがつつく

ホッポも俺の膝の上に座りながらお子様ランチを食べている

ああ、いきててよかったつす

億安のトニオさんの料理を食べたときのリアクションを取りながら身振りでぶりでそのうれしさを伝える

「ヨカッタ。フフフ」

「アタシたちガツクツタンダゼー！カンシヤシロヨ!!」

にしし、と笑いそういうレ級

まじか、すごい家庭的なんだな

深海棲艦って家事料理スキルが高い娘が多そうだな
なんて思っている

「ジャ、オハナシシマシヨウカ」と、目の前にいる彼女の雰囲気が変わる

どうやらマジ話みたいだな

「タントウチヨクニユウニイウワ、ワタシたちニキョウリヨクシテホシイ」

どうということだ、と聞き返す

「テイトクツテイウノハシツテイル？」

名前だけは

「ソレニナツテホシイノ」

.....

つまり、深海棲艦側の提督になれってか？

「ソウイウコト」

ナンデサ

「ワタシたちハジブンたちノミヲマモルタメニ、イキルタメニタタカツテイル。」

ニンゲンヤカンスメたちモソウナノダロウケド」

「ソシテ、センソウイガイデユウコウヘノミチヲサグツテイルノ」

「ソノタメニニンゲンヲコチラノジンエイニヒトリオイテオイテ、ニンゲンガガワトシンカイガワノカケハシニシタイ」

さすがにガチの殺し合いばつかするのもきついよなあ

「ドウ？ヤツテクレナイ？」

やるとしたら、職場に退職届出してからね
すっかりサラリーマン根性丸出しでそういう

この厳しいご時世ちゃん和円満に退職しておかないと次の転職先
が見つからない可能性があるし

「ソノタイシヨクトドケツテイウノヲダシテクレバイイノネ？」

え、うん

そう聞かれ思わず答える

「マカセテ」

何をどう任せるのか知らないが、その鋭い顔つきを見てノーとは言
えず

はい、と短く返した

笑顔で恐怖を感じるとかそらおそろしい・

.....

なんだこれはあああああ!?

矢が自分のからだに食い込む

奥の方まで刺さり、血が止まらない

うおおおおおおお!!!

体が焼けるように熱い

なぜこんなことが起きるのだ

矢がひとりでに向かってくるなんて

このままでは死ぬ

それだけはイヤダ

オレハイキテヤツラニフクシユウスルンダ

ソウダ

スベテアイツラガワルインダ

コロシテヤル

コロシテヤル

しばらく倒れ伏していたが
ゆらり、と幽鬼のように立ち上がり、自分の帽子を拾いかぶりなおす

ケータイの光でかすかに見えた横顔は白く、目は赤く変色していた
矢に選ばれ、天候を意のままに操るスタンドが、最悪の形でその産
声を挙げる

『田中のスタンド能力交代まであと80分』

T o b e c o n t i n u e d

十三話 神様。俺のスタンドと相手のスタンドを取り換えっこプリーズしたいんですがオーダーはうけつけているのでしょうか（懇願）

.....

「どこにも見当たりません」

そう報告する吹雪

私の名前は赤城

今まで変な薬を打たれて感情を消されていた

そうして参加した今日の戦い

深海棲艦側の施設は確かにあり、侵入もできた

薬の効果は切れて、感情も戻ってきた

しかし・・・

「やられたわね」

確かに入れたが罠だった。

もぬけのからの敵地に踏み込んだ私たちを待っていたのは爆発。

幸いそこまで威力は大きくなく、艦娘である私たちは吹き飛ばされ

ながらも

無事に地上まで脱出できた

けども

「提督がいない」

そう、彼がいない

加賀さんがそういう

いくらブラック鎮守府のトップとはいえ死んでいいまでとは思わない。

だが

「このまま見つからなければ、もう私たちも苦しい思いをしなくてすむん

じゃない?」

そういつてぶらぶらと手を振る瑞鶴

「瑞鶴!!」

「翔鶴姉だつてわかつているでしょう?このままあの男に使われ続けたらあたしたち死ぬよ?」

誰もがうすうす感じていたことをはつきりと言われ押し黙る

そうだ、はつきり言つて彼のことは嫌いだし、もうこんなことはやめてほしい

不満を漏らした瑞鶴を皮切りにどんどん洪水のように艦娘のみんなから剣呑な言葉が漏れる

「そうだよ。もう探さなくてもいいんじゃない」

「さすがに私ももうこんなやだよ・・・」

「見つからなければ、次に新しく提督が来る。そうすればみんな解放される」

口々に騒ぐ娘たち

気持ちはわかる

けど、今は敵地の中だ

一喝して気を引き締めさせようとしたとき

「キイタヅ・・・チキ・・・シヨオオオ・・・!!」

そう呟く声が聴こえ

瓦礫が吹き飛び、真下から風をまとつて人が上ってくる

吹き飛ばされて気絶する前に、私が見たのは

顔を白く変色させ、目を真っ赤に充血させた提督の姿であり

その後ろには幽霊みたいなモノが立っていた

・・・

夕級にいい笑顔で誘われ、お誘いにイエス、と答えそうになったところだ

食堂全体が大きく揺れた

ガゴオオン、と地響きのような大きな破碎音が鳴り響き、電球がいくつかが割れる

座っていられないほどのその衝撃に思わず椅子につかまり

ひざの上から落っこちそうになったホツポをしっかりと片手で抱きかかえる

泣きそうになっているホツポを高い高いしてあやしなから二人に聴く

今のは？

「ワカラナイ……。ココハウミノナカノアジトノヒトツ。コンナニユレルナンテアリエナイ」

信じられない様子で述べる夕級

「コノホウガクハワタシタチガサキホドバクハシテ、ホウキシタバシヨネ」

そういい、タブレットのようなものを取り出しこちらに見せてくる

「シセツノカメラカラエイゾウヲオクレルヨウネ。サイワイ、ホンノスウダイコワレテイナカツタノネ」

タッチ操作し、島の全体図を映す

そこには

とてつもなく大きな竜巻がいくつも発生していた
すさまじさで何も聞こえないほどの風速だ

「ナニ……。コレ……。」

愕然とする夕級とレ級

この地域はこんな嵐が吹き荒れるような場所か？

「イエエ、ワタシタチハナンネンモココニイルケド、コンナコトガオコツタノハハジメテヨ」

つまり、これは明らかに異常事態だということだ

島全体を囲うように竜巻が島の周りをぐるぐると回っている
その規模がどんどん大きくなっていくのが分かる
カメラがその映像をとらえ続け、島の奥の方に、一人の軍服を着た
男がいるのが見えた

その後ろに、自分が見慣れたものを発見して呆然とする
ありえない

なんで

そんな思いが湧き上がり

ぶつくとカメラが途切れる

「・・・ダメ。モウエイゾウヲオクルノハムリミタイ」

そういつて、タブレットの操作をやめる夕級

「ナンドヨ・・・アレ」

「アキラカニヒト・・・ノヨウニミエタケド」

まさかあいつがこの嵐を？

二人はそう考えるが答えは出ない

「トニカクマズイ。ココモイズレハアラシニノミコレルカモシレ
ネエ」

「イツタンヒナンシマシヨウ」

避難指示を出し始める二人

深海棲艦の面々があちらこちらをとびまわって物資を詰め始める

数分もすると最低限のものを確保しておいたので移動するのだと
告げた

手が震える

それに気が付いたホッポが手をぎゅつと握りしめてくれる

「ニンゲン!!ホッポガツイテイルカラアンシンシロ!!」

そういつてこちらを気遣ってくれる彼女

しかし、この手の震えは恐怖によるものでなかった

歡喜

感動

感謝

そういった類の感情によるものであった
スタンドを持ってるのは自分だけかと思っていた
でも、さっきの映像で見えたあいつを俺は知っている
見間違えようもない

6部で最後の最後まで活躍し続けたあのスタンド

・・・頼みがある

「ナニ？」

俺をあの嵐の中まで連れて行ってくれ

・・・

力を手に入れた

今日はなんてすばらしい日だ

矢に体を貫かれて死にたくない、呪詛のようにつぶやいていたら
突然視界が開けて、気分が最高に晴れやかになった

今では指先一つで天候を操ることさえできる

私を馬鹿にしていた艦娘たちは吹き飛ばしてやったし、

私を止められる奴などいない

このまま大本営に乗り込んで

私を左遷しやがったクソ共をくたばらせやる

どす黒い感情を胸に、本土の方へ向かおうとした

その時

何か名状しがたき眼帯をつけたぶよぶよした物体が空から降って
きた

「ガードしろ!!」

大好きなスタンドの名前を呼ぶ

それに答えるかのように一陣の風が吹いた

『スタンド能力交代まであと??分』

T o b e c o n t i n u e d

十四話 神様。これハードモードどころかルナ
ティツクだと思っんですけど（助命嘆願

.....

...う...

ここは.....

意識が飛んでいたようだ

周りを見渡して状況を確認する

目をつむって気絶しているみんな

姉妹である蒼龍はかろうじて目をあけて起きてはいるが

ほかの娘たちは幸い失神しているだけの様だ

しかし、ダメージを負ったのか体がうまく動かない

体がずきずきと痛む

こんなことになるなんて...

あの人の悪口をみんなが口々に言い始めたら突然地面が盛り上
がって...

そこから提督が出てきて変なお化けみたいのを出して風を起こし
てみんなを吹き飛ばした

今思い出しても体が震える

そういえば提督は!?

自分たちに攻撃をしてきた相手を探す

いた

でも様子がおかしい

彼の前にだれかが立ちはだかっている

誰なの

あの背中

私どこかで

このとき、唯一起きていた蒼龍と飛龍が見たものは
他人に話しても決して信じてもらえないようなことであつた

.....

「.....で？君はなんだい？」

そうこちらを見下して聞いてくるスカシ野郎

「俺の名前は田中。てめえの横にいる幽霊みたいなやつを同じく持つ人間だ。」

相手にそう名乗る

「これはこれは。これから死ぬんだから自己紹介とか律儀にしなくてもいいのに」

自分の能力の強さに酔っている男があざ笑う

「一ついいことを教えてやる」

「？」

「てめえの持っているその能力はスタンドつつーもんだ。そしてそれにはウエザー・リポートって名前がある。ちゃんとその名前で呼べ、ボケ」

そういつて中指を立てて挑発する

「ぶ丁寧にどうも。さて、私はこれからこの力で日本本土のごみ虫どもを一掃しなければならぬんだ。死にたくなければ見逃してやるからさっさと消えることだ」

明らかにこちらをなめ腐った態度。無理もない。

さつき奴のウエザー・リポートのパンチでこちらのヨーヨツマがタコ殴りにされているからだ。

「.....スタンドの能力を知らないっていうのは悲しいな」
「？」

何のことだ、と聴こうとした瞬間

いつの間にか背中にとりついていたぶよぶよが左腕を噛んでくる
「なあああああ!？」

空いている右腕で雷をまとったパンチを繰り出す
「俺がそいつを最初にお前に降らせたのは注意をひかせるためだった
つたが

、それは蹴りをお前に叩き込むためじゃあない。一度ふっ飛ばして
油断したところを再びそいつに襲わせるためだ」

ウエザーリポートのパンチをはらに食らうヨーヨツマ

「そして、さつきそいつが顔面でパンチをくらい、今無傷でたっている
ということとは

顔にはダメージがないからお前が考え、次に狙うのは腹であるこ
とくらい読んでいたさ」

顔へのダメージがない、と踏んで別の場所を攻撃すると頭で考えた
うえで

無意識に、反射的に人間が思わず殴り掛かる場所など一つしかない
一番面積が大きく、攻撃を当てやすい胴体である。

「ちよつと近くて俺もあぶねえが、これくらいしかてめえにダメージ
が通る方法がない。

腹の中にはソイツ特製のよだれがたっぷり詰まっている。あじわ
いな・・・!!」

ウエザーのパンチがヨーヨツマを貫通すると

ドパンツつと中から大量の液体があふれ出し、二人にかかる

うぐおおおおおおおお

体が溶けていき、のたうちまわる二人

「・・・つきしよー、せめてビーチボーイぐらいが来ればもつと楽にた

たかえるんだけどなー」

そうぶつくさ文句を言いながらたち上がる

.....

一瞬だが風が吹いた。能力を使っていくらか体液を吹き飛ばしてガードしたのだろう

お互いに体のあちこちに穴ぼこが空いている

奴が立ち上がってくる

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

雄たけびを上げて立ち上がる

その瞳には先ほどまでの油断は一切感じられず

こちらを絶対にコロシテヤル、という殺意が感じ取れた

マジで死ぬかもしれない

もう、相手に油断はないだろう

同じ手は通用しないと考えたほうがいい

「認めよう・・・私は。私は!!!いい気になって貴様を下に見ていた!!

だが!!もうそんなことはしない!!左腕が溶けかけているが、右腕一

本でも貴様一人くらいコロシテヤル!!」

人間らしさが完全に消え、怪物となつてこちらの眼前に立ちはだかる

さて、どうしよう

ヲツちゃん、ごめんな

.....

嫌な予感がする

ヲ級はそう考える

あの人が帰ってこないのもそうだし、いくら何でもこの天候はおかしい

ちらり、と外を見るとごうごうと風が吹き荒れ
ここから見える元深海棲艦の島では竜巻が周りを囲んでいる

あの島にあの人がいるような気がする
なぜかそう直感で感じるヲ級

そして、決意する

彼がいるであろう場所まで向かう

艦装をつけて夫がいるであろう場所まで向かいに行く

無事を祈りながら急ぎ続けるのであった

T o b e c o n t i n u e d

十五話 神様。勘違いって実はなくて、思い違いならあるって最近気づきました（誇らしげ）

はっ、はっ、はっ

急いであのひともとへ向かう

何かわからない

勘でしかないがあの人の存在を感じる場所まで急ぐ

ハヤク はやく 早く

いつもよりも素早く動き、艦装がきしむくらいのスピードを出す

それでもまだまだ遅く感じてもどかしい

島にどンドン近づく

あの人の背中がみえた

声を張り上げてこちらの存在を知らせようとして、ヲ級が見たもの

は

雲をまとった人型の怪物に腹を右腕で貫かれるところだった

.....

!?

ナニ、イマノカンジ・・・

島から500メートル離れた場所で見守っていた私にゾワリと嫌な予感が頭をよぎる

隣にいたホツポとレ級も感じたようだ

「オネーチャン・・・」

心配そうな瞳でこちらを除きあげてくるホツポ

ダイジヨウブ、ダイジヨウブと抱っこしてあやして、落ち着かせてあげる

「アイツ、ナニカアツタンジヤナイノカ」

そう、腕を組んで見守るレ級

そんなはずはない

だって、さつき約束してくれたのだから

.....

今から数十分前

「つーわけでこいつを竜巻の近くまで吹っ飛ばしてくれ、あ、そいつは俺が死なない限りは消滅しないから多少ぞんざいにあつかってもいいぞ」

ヨーヨツマをペしつペしつとたたく彼

ものすごく悦んでいるみたいだけど生理的に受け付けず、気持ちが悪いのでスルーする

そうして彼に尋ねる

「.....ドウシテモイクノ?」

今日あったばかりの人間のことを心配する自分に驚きつつも

不安の声を挙げる

頭を振ってこたえる彼

.....

「俺がやらなくちゃいけない。あいつの姿を見たときに直感だけどころか感じたんだ」

お茶らけた様子がなりをひそめ、神妙な顔もちでそういう彼

「俺さ。実はさつきの映像に映っていた奴のこととしてんだ。あ、あ

の雲をまとった人影のことね」

「俺の好きな作品でジョジョってというのがあって、もう8年以上も見ている」

「その作品に出てくるキャラの一体なんだ」

「俺はそのキャラが好きだ。でも・・・」

その笑顔が陰る

「あんな邪悪な顔をしたやつに使われるのはジョジョラーとして許せない」

ジョジョラーというのがなんのことだかわからないけど一つ言えることがある

彼はそのジョジョとかいうものを愛しているようだ

その作品について話す彼の横顔は自分の宝物を見せびらかす子供の様だった

「だから、俺があいつをぶっ飛ばす。今の能力だときびしいだろうけど」

うつむかしていた顔をきつと上げこちらを見据える

「無事に倒せて戻ってきたら一緒に（仲間に）なろう」

.....!?

彼の言葉を受けて思考が数十秒停止する

プロポーズ？

プロポーズ!!

頭がぼふんつと爆発し、顔がゆでだこになる

き、きもちはうれしいけど、私たちがまだ今日あったばかりだし・・・

「ソ、ソレハソウイウ・・・（生涯の伴侶的）？」

「ああ（お友達的な）」

恥ずかしさのあまり彼の顔を直視できず、ホッポの後ろに隠れる

「オネーチャ、ドウシタノ？」

今は顔を見られたくない

「どうしたんだ？」

「キニスンナ。スグニナオルダロウ。」

そういつてニヤニヤしながら笑ってくるレ級

・・・もう！・・・もう！

「ア、ソウダ。アタシモイツシヨニナツテイイカ（伴侶的な意味で）」
「いいぞ（お友達的な意味で）」

レ級が彼にそういう

「じゃ、いくぜ!!」

そういつてホツポを抱っこして先に進む彼

「・・・レ級」

「ナンダヨ？」

「サツキノハドウイウイミ？」

「・・・オマエトオナジデソウイウノモイイカナートオモツテイルダケ
ダ」

「ソウイウカンケイニナルヒツヨウハナインジヤナイノ？」

「ソレライウナラオマエモソウジヤネーカ？」

ピリピリとした空気があたりに漂う

周りにいた深海棲艦たちは一斉に出口まで逃げる

おかしいなあ

普通に、にこやかに話しているだけなのに

ナンデミンナソナアオビエタカオヲシテニゲルノカシラ

先に前に進んでいる彼にはわからない

気づきようもない

彼女たちが今浮かべている笑みが、ヲ級が夜戦するときによくする
笑顔と同じ種類だと

のんきにホツポを抱っこしながら一緒に歩いている

「ホツポもーイツシヨニナル!!（友達的な意味で）」

「おお、ほっぽもかあ！うれしいなあ！（友達的な意味で）」
・・・実の妹と男を取り合うようになるかもしれない
戦争だ（断言）
どす黒い感情を抱きながら、そう思う

T o b e c o n t i n u e d

十六話 神様。カカア天下つてどうやったら生き残れますか（平服）

子供のころに両親に聴いたことがある
しあわせつてなーに

そう聞かれた両親は微笑んで
あなたが幸福を感じられる時間のことよ
といった

その時はふーん、と流して終わったが
その言葉を思い出す時がきた

中学二年生の時

漫画やで本を買って帰ろうとした帰り
一冊の本が目に入る

ジョジョの奇妙な冒険

店頭のポップでは店員さんが手書きでつくった販売促進用の
紹介文が載っていた

あまり目に留まらなかったが一文がどうしてもひっかかった
この作品は『人間賛歌』だと

何の事だろうと思いい冊手に取ってみる

第一巻、侵略者デイオの巻！と書かれたその本の表紙には
大きな体躯の少年と、犬と、ナイフと奇妙な仮面をもった金髪の少
年が写っていた

絵柄はパツと見た感じ好きではなかったが、買ってみた

その日の自分をよーしよしよしよしよしよしよーしよしよしよし、
とほめてやりたい

のめり込んでいき、80巻近くまで出ていた6部まで一週間で読み

終えてしまった

すべてを読了したときにむねの中に占める思いはたった一つだった

人間万歳

これほど、善人も悪人もそうでないひととも肯定的に書いた作品はないだろうな、と思う

学校ではクラスにうまくなじめず、退屈な日々だったがジヨジヨが俺の人生を変えてくれた

それからは、ジヨジヨの特集を見たり、ゲームを買ってやったり、タロットカードしてみたり、とにかくジヨジヨ関連のものに手を出しまくった

そして、ヲっちゃんと出会ったあの日

俺は、ジヨジヨたちと同じスタンド使いとなった

そして、誓った。

黄金の意思をもって戦うと。

俺は今、間違いなく幸福だった

.....

意識が遠のいていく

口からは赤い液体が、血があふれて止まらない

すくなくとも、生きてはいるが、手足がしびれて動かない

腹部が熱く燃えるようだ

結局奴を倒し切ることはできなかった

乾燥した血で固められ身動きが取れなくなったヨーヨツマを見る
ピクリとも動かない

死んではないだろうが、もう戦うのは無理だろう

自動追尾型のスタンドなのによくここまで戦ってくれた。ありがとう

そういうと、にこっと笑った気がした
やつの姿を見る

右腕がお腹を貫通してきている
ひでえことしやがる

ヨーヨツマの本体と同じセリフを吐いて自嘲する

「この・・タンカスがアあああああああああ——」
そうして腕を引き抜かれ投げ捨てられる

くっそ、人をごみみたいに扱うんじゃねーよ

そういつてやりたがったが口に血がたまりうまくしゃべれない

右手に何か能力で溜めている

おそらく、手からサイクロンでも発生させて、俺のことを空に打ち
上げてたたきつけるつもりなのだろう

時速280キロになることもあるという暴風現象を引き起こされ
てはもうどうしようもない

スタンドは貼りつけにされ、体は満身創痍

動くのはあごくらいか

「お前を・お前だけは殺す!!どれだけ弱つていようがもう、私はおま
えに近づかん!!

私のウエザー・リポートは無敵なんだああああ!!」

そういつて、右手に溜めた風を発射してくる

直撃してこの世から消えそうになった瞬間

抱きかかえられる

「ナニっ!!?」

そのまま通り抜けていく直線状の風のレーザー
着弾した地面に大穴が空いている

今にも閉じそうな目を何とか開けて助けてくれた人物を見る

俺のことをお姫様抱っこしながら走る人物
にこやかに笑うその顔は

いつもベッドの上で拝見している姿だ
ヲツちゃん

ごぼつと血を吐きながら彼女の名前を呼ぶ

「無理しないでいいのに」

いや、死ぬ前にヲツちゃんに会えてよかったなーと思って
そういうと、さっきまでの笑顔とは別の種類の笑顔になる
滅茶苦茶怒っている・・・？

「あなた」

ハイ

そう呼ばれ小声で返事する
顔をがちり抑えられる
瞳孔が開いていて怖い
そして、

ぶちゅうううううううううと唇を奪われる

あつ、二度目。なんて間抜けな感想を抱きながらもなすが儘にされ
る

口の中を吸われ、血を全部飲まれる

ごきゅ、ごきゅと一通り飲み終えると

語り掛けてくる

「ゴチソサマデシタ」

戻ってる戻ってる

「問題です。なんで私は怒っていたでしょう?」

えーと

「10、9、3、210」

はやっ!!

「正解はあなたはわたしのもので、私はあなたのものなのに勝手に一人で死のうとしたことです」

・・・ああ

「じゃあ、どうすればいいかわかりますよね?」

スーッと息を吐き、簡潔に一言いう

ごめん

「うん、許す」

そういつておっぱいを顔に押し付けてくる彼女

きもちいい・・・

幼児退行しそうなのを必死にこらえる

「赤ちゃんになっちゃったらいろいろとお世話してあげるのに・・・」

ちえーつと本気で残念がる彼女

こえええ・・・

コントはここまでにして、あいつを倒す方法を考えなきや

「逃げるっていうのはだめなの?」

あいつの能力のやばさは俺が知っている

ここで仕留めないと『次の段階』になる可能性がある

そうしたらこの星全体が終わる

だから最悪相打ちになっても倒そうとした

それにもう逃げ場なんてない

へ?

とヲっちゃんがつぶやくと

俺たちがいる島の周りを逃げ場がなくなるほどの竜巻が発生して

いた

じりじりと包囲網を狭めながら近寄ってくる

あいつ、えぐいことしやがる

島全体を囲んで吹き飛ばすつもりだ

俺たちが逃げられないように竜巻のバリケードを作って、それをそのまま前進させて押しつぶす

島のどこにしようが関係ない

単純だがいい手だ

真っ青になるヲっちゃん

「ど、どうしよう!?!」

あわあわと慌てるその姿はとてもかわいらしい

手を握って落ち着かせて話す

なあ

「えっ?」

俺と一緒に戦ってくれるか?

そう頼んだ

「・・・喜んで!!」

さあ、こっから反撃タイムだ

覚悟しろよ、あの野郎

『田中君の能力が入れ替わるまであと?分』

To be continued

十七話 神様。こういった時に強いスタンドがくるって死亡フラグじゃないですよね（疑心暗鬼）

「つち、逃げやがったか」

そう吐き捨てて、深海棲艦とあの変な田中とかいう男が逃げていった先を見つめる

提督

「だが奴のスタンドはこうしてここにある。何もできまい」

地面から生えた氷で串刺しになっているぶよぶよを見る

すると何がおかしいのかぐえっ、ぐえっ、と笑いだす

「………何がおかしい」

「いえいえ、あなた様がもし彼らが逃げるために、ここから離れていったと考えているのならとんだ間違いである、と申しあげたくて」

「……なんだと？」

そうほざくデブ。

………

「あなたを倒すためにここから一時的に離れているだけなんです。ええ」

ぴくり、と瞼がひくつく

その一言一言が私をイラつかせる

「私はもうすぐ消えて、あなた様があの方にぶっ飛ばされるところを見られないのが残念ですが」

右のこぶしに力がこもる

………

「あなたぶっときでは絶対に彼らに勝てません。ぐえっ、ぐえっ、ぐええええええええ」

顔をウエザーで殴りつける

何度も何度も何度も何度も執拗に殴る

やがて、ドロドロと液体に変わっていき、消えた

「くそっ………なんだこの敗北感は………。私の方が有利な状況だと

いうのに

ぬぐえないこの屈辱は・・・」

訳も分からずただただいらだつ

「・・・どいつもこいつも私をコケにしやがって・・・!!」

全員殺してやる

・・・

すごい

あの天気を操っている提督に真っ向からむかって左腕を一本持つて行った

そう驚く蒼龍と飛龍

提督にばれないように死んだふりをしている

そして、とある感情がわいてくる

あの人の横にいたい

そんな気持ちを抱き始める

それは、二人とも同じだったようで

目が合うと

(右隣は私)

(じゃあ、私は左隣)

と協力体制を結び始める

本人のあずかり知らぬところばかりで不穩の芽が育ちつつある

望んでいたモチ期を望まない形で享受することになる彼の未来はどっちだ

・・・

おおおおお

最近よく感じる寒気がまた襲ってくる

フツちゃんに「ぼんぼん痛いのか？大丈夫？ちゅーする？」

と言われ、血の味のキスはもう勘弁、と思いつつ状況を確認する

ヨーヨツマはもう戦えない

俺の腹には風穴があいていてこれ以上激しく動くと最悪失血死し

ちまう

絶望的な状態に頭を抱える

そして、気づく

時計の針がすでに12時を回っていることを

そして、自身の性質を思い出す

念じる。出る、と祈る。

この最悪のクソツタレの状況を生き残れるスタンド……
スター・プラチナ、ザ・ワールドなんて贅沢はいわねえ!!

ヲツちゃんを、深海棲艦のあいづらを守るだけの力を持ったやつ

!!!!

こい
!!!!!!

その叫びに呼応して

今日のスタンドが彼らの前に現れる

それは

.....

「どこだああああああああ!!でてこいこのビチグソどもおおお
おおお!!」

冷静さを失い、風で空を飛びながら島を回る提督

島の周りには竜巻を配置させてあり、逃げられはしない

しかし、いかんせん隠れられると面倒だ

(クソツ、クソツ、クソオオオオオオオオ!!)

先ほどヨーヨツマに挑発され、完全に激昂している提督

(私があんな虫けらに勝てない?!負けるだど?!負け惜しみが……!!!)

そうは思いつつも怒りが収まらない

この怒りをやつらにたたきつけてやる

そして、もう一つ嫌な感覚がよぎる

(なんだ・・・この、すべてが消えるような予感?)

自分は最強無敵の力を手に入れたはずだ

その私が今更どんな力におびえるというのだ

もういい、島ごとすべてふきとばしてやる

スツと手のひらを地上に向けて竜巻を放とうとした瞬間

ハチの群れが襲い掛かってくる

「ウエザアアアアリポーン!!」

スタンドで応戦し、風で大半は吹き飛ばしたが一匹がこちらに針を

向けて真っ直ぐに飛んでくる

ちよこぎいな、と思いつつこぶしで叩き落とす

背中に衝撃が走る

そ!?!?!

そのまま地上まで落下し、地面に衝突する寸前に風を出して、着地の衝撃を軽減する

一体何が・・・

どうやら島の森林地帯に落ちてしまったようだ

再び上がろうとすると

今度は蛇に左足を噛まれる

この蛇は・・・っ!!

「うおおおおおおおっ!!」

ためらわずに左足をスタンドの手刀で切り、毒が回る前に肉をそぎ落とす

おかしい。競争心が強い生物とはいえ、先ほどからこうも立て続けに狙われるとは

十八話 神様。なんかシリアスっぽくなってきましたが結局これギャグってどういうことなんですか（異論

.....

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおお」

「無駄アアアアアアアアアアアアアアアア」

ラッシュを繰り返し続ける私とアイツ

馬鹿な。奴のスタンドは私の目の前でドロドロになって消えたはず

それに体に穴が空いて致命傷だったのに

そう混乱するが、風でふきとばし、体制を崩したところにボディブローを叩き込む

ごぶつと口から血を吐き、こちらの体に吹きかかる

「あばらをもらったぞおおおおおおお!!」

そして、遠くまで殴り飛ばす

「わかってたよ……どう考えてもスタンドのパワー自体はそっちが上だからこうなるのはな。だから」

.....

「お前の顔面にごぶしを叩き込むのはあきらめるよ」

全身に痛みが回る

何かに体中を噛まれている

こ。これは……!?!

「さつきお前が俺を殴ったからそうなったんだぜ……」

口から吐き出した血は物質だ。そうなりや俺のゴールドエクスペリンスの本領発揮さ」

上着をまくると

大量のヒルが体中にくっついていてるのが分かる

「なにいいいいいいいい!!」

「選びな。そのまま失血死するか。スタンドを解いて俺に降伏してヒルを消してもらうか」

ふざけるな・・・!!

私は無敵になったんだ!!

もう誰の指図も受けん!!!

ウエザーの腕を地面にたたきつけあるものをほる

その掘った黒いものを自分の体にかけてヒルがはがれていく

「精油か」

「はははははははははは!!ここが深海棲艦どものねぐらでよかったよ!!

ヒルは精油に嫌悪感をもち、虫よけスプレーなどをかけられるとはがれるんだよ!!ここには大量の精油が残っている!!深海棲艦どもが使った爆弾にはその成分がはいっている!!そう当たりをつけたが、運はこの私に味方してくれている!!」

そう、勝ち誇ると

ぐらり、と視界が揺れる

な・・・に・・・?

膝をついてしまう

体を見ると大量の血が噴き出ているのが分かる

「マヌケ。ヒルの粘液は血を固めさせない成分が含有している。もともとヨーヨツマの体液で穴が空いているところにそんなもの塗りこまれたらこうなるにきまつてんだろ」

奴がゆっくりと近づいてくる

ふらついてうまくたちあがれない

まずい、マズイ、マズイ

「ウエ、ウエザーリ・・・」

オラアアアツとこぶしを叩き込む

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アアアツ!!」

「ぐぼぼおおおおおおおおおお!!」

吹き飛んでいく提督

地面に激突し、そして失神する

「運がよかったな。気絶していなかったらそんな痛みじやすまなかつたぜ」

失神してゴールド・エクスペリエンスの神経過剰から逃れたやつに
そう吐き捨てる

しかし

「強かったああああああああ!!」

まじでゴールド・エクスペリエンスじゃなかったら死んでいたかも
そう思っていると

おっぱいが目の前まで迫ってきていた

顔にやわらかなマシユマロが降ってきて気持ちいい

ぎゅうううううううと抱きしめられる

いだあだああああだああ

ゴールド・エクスペリエンスで部品を作ったとはいえ、痛みが残っ
ているから

さらに痛い

「生きてる?生きてる!!?」

そう涙ぐみながら顔を抱きかかえてきて胸で挟んでくるヲつちや
ん

ちよ、幸せすぎて死んじゃう

「かったの?」

ああ

立ち上がって

奴をみる

ピクリとも動かない

フっちゃん

「？」

帰るよ

「……うんー！」

手をつないで歩きだす

……

「アラシガヤンダワ」

今まで島から離れて見守っていた深海棲艦たちがそう呟く

「アイツガカッタンダ!!」

「ワイイ!!」

そういつてハイタッチしてはしやぐ二人

今まで最悪の天気だったのに、雲が晴れ、雨がやみ

日差しがさす

まったく……この二人は

あの人もあの人だし

……

あれ？

← 勝った

← 生きて帰ってくる

← 一緒になるという約束を守る

← 結婚式

←

ハネムーン

←

初夜

←

出産

←

育児

←

幸せな家庭

.....?!

ぼふんつと顔から火が出る

にやつくれ級

「コレデアタシモオヨメニモラツテモラエルナー」

ぴきイ、と空気が張り切れる

「・・ナニネゴトツテイルノ、ヒンニユウチビ」

「ナニカイツタカチジヨルツク」

空気が凍り、二人の近くから他の深海棲艦が離れていく

訳が分からないといった様子で二人を見るホツポ

「オンナトシテオトコヲマンゾクサセルタメニハソレナリノプロポー

ションガナイトオハナシニナラナイワヨネー」

「ソナモノブラサゲテ、ショウライチチガタレテカタコリニイツ

ショウナヤマサレルヨウニナルオンナトカロンガイダロー」

「ア?」

「オ?」

メンチを切りあうれ級と夕級

きれいな空を見ているホツポ

そして気づく

晴れた雲の隙間から

“虹”がさしていることを
きれいだな、と思った

.....

手をつなぎながらゆつくり歩く二人
その二人を祝福するように手と手の間に “虹” がかかり

二人の腕をカタツムリに変えた

.....

この能力はっ!!!

まさか!!!

フっちゃん!!!

無事ではあるがお互いにカタツムリに変わりかけている

奴の方を見る

.....

いない

後ろをふりむくと

ウエザーリポートのこぶしがすぐそこまで近づいていた
遅すぎるカタツムリの動きではよけられず

体に直撃した

『田中の能力が???
???まであと
???????』

T o b e c o n t i n u e d

十九話 神様。もし俺が死んじやったとしても彼女が許してくれるでしようか

屋内ににげろおおおおおおお!!

子供や老人は優先的に逃がせ!!

逃げ惑う人たち

虹に触れ、どんどんカタツムリになっていく

じゆるじゆると音をたてて地をはう

日本のあちこちでは混乱が起きていた

突如出てきた虹によって生物がカタツムリに変わっていく怪奇現象が進む

田中の元上司の課長はそのニュースをみて、職場からの自宅待機を受けて

家族と共に避難していた

幸いまだ、彼と彼の家族に被害はない

(一体なにが……)

今まで40年以上生きてきたがこんなことに出くわしたのは初めてだ

窓の外を見ると次々に人々がカタツムリになっていく

それを窓のカーテンを閉めて、家族に見えないようにする

「ばば……」

不安そうな顔でこちらを見上げる息子を抱きかかえる

「大丈夫。パパが付いてるからな」

頭をなでて落ち着かせてやる

そうして、この異常事態が収まるのを待ち続ける

この日

“虹”が出たこの日はのちに、『悪夢の虹の日』と呼ばれるようになる

.....

大本営

窓から虹がかかっているのが見える

椅子に座っている精悍な人物。軍部総司令官『元帥』

実質的なこの国の支配者である

そして、彼の手には

.....

直径10センチメートルほどの小さなディスクが握られている

部下からの報告を受けて、『虹』から逃れるためにそうしたのだ

(誰かが・・・とんでもない能力を出しやがったか)

そう楽しそうに笑う男

そしてその横には

横にシマシマが入った人型の異人が立っていた

(この俺と同じものを持っている奴が少なくともこの国にいる)

そう考えると気持ちが高ぶってくる

(ま、この騒ぎが収まらないようだったら俺が直々に殺しに行くか)

瞳に黒い意思を秘め

愉しそうに待つ

.....

「うおおおおおおおおおー！」

体を殴られ、べちゃり、とカタツムリに変わりかけているからだ

地面にたたきつけられる

「ゴールド・・・」

「遅い!!」

蹴りを叩き込まれ、さらにぐずぐずになる肉体

「はあーっ、はーっ、・・・ふふ・・・。ははははは!!どうやらこの『虹』に

触れたものはカタツムリになっていくようだな!!」

まずい。まさかもう能力が進化するなんて

ということとは少なくともこの国全体が虹に覆われている

早く奴を倒さねーととんでもないことになる・・!!

しかし、体が思うように動かない

少し離れた場所ではヲっちゃんもがいている

ヲっちゃん!!

そう叫ぶ俺

「うるさいぞ!!ウスノロ!!」

頭を踏みつけられ、

地面にぐりぐりと抑えられる

「お前の能力がわかったぞ・・。その両手で触れたものを生物に変える能力だな!!

—

さてどうかね、と返すが内心冷や汗が出る

ばれた

くそ・・

右手を地面に置いてある石に向けてふりおろし

新しい命を生み出そうとした瞬間

右手を切られる

うおおおおおおおおおおおお

大量の血が噴き出し、あまりの痛さに絶叫する

「はははははは!!かたほうだけ失っていたらバランスがよくないよ
なあああああ。

もう一本も切つてととのえてやるよ!!!」

左腕も切り落とされる

これで、今の状況ではゴールド・エクスペリエンスの能力は使えなくなつた

「貴様の負けだ!!ごみ虫!!」

勝ち誇る奴

見下ろして笑ってくる

それにつられて今までこらえていた笑いが耐えきれず、一緒に笑ってしまおう

「・・・なぜ笑う」

いやいや、こうも考えている通りにうまくいくとは

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

なんで俺が最初右手で大きくスローモーションで石をたたいたと思う?

「・・・・・・・・?」

訳が分からないといった顔でこちらを見てくる

こういうことさ!!ゴールドエクスペリエンス!!

すると

右手をわざと奴の目の前で振りかぶっていた時に

腹の下でかくしながら左手で殴り、生命に変えた小石を

サソリを奴めがけて放つ

しっぽが奴の目に突き刺さる

ぎゃああああああ

目を押さえ悶絶する

「きいいいさあつまあああああ!!」

両腕がもうないと知って腕を振りかぶってくる

そうだ。

これは最後のあがきさ

さつき左手で小石をたたいたといったが一つじゃない

・

俺がたたいたのは砂利だ

大量のモグラを生み出して、ヲっちゃんを安全な場所まで掘って埋めてもらった

ヘヴィーウエザーは目が見える生物にしか効かない

モグラは視力そのものがほとんどないからカタツムリにはならない

普通の人間だったら生き埋めで死んでしまうが

深海棲艦の彼女だったら我々人間より丈夫だから平気だろう

彼女には親友の深海棲艦がいる

きっと助け出してくれるだろう

俺が最後にみた景色は

鬼のような形相でこちらにラッシュを仕掛けてくる奴の姿だった

T o b e c o n t i n u e d

最終話前半 鎮魂歌は誰のために

おとつと

買い物でジョジョグッズを買い、ほくほく顔でおいちいハンバーガーにかぶりつく俺

なんかやたら暗くて、周りの人の顔も見えないけど
いやー

まさか安売りしていたなんて

昔一番くじであったハーヴェスト人形が一体250円とお買い得
だったので

10体も買っちゃった

あのコインを入れる機能も使えるし

あ、そうだ。原作みたいに切手を入れてもいいかもしれない
胸が膨らむ

ああ、楽しい

こんなに楽しいのは久しぶりだ

ジョジョに出会った時もそうだったけど

子供のころのようなワクワクに目覚めたときつつーか
でも、なんだろう

大切な何かと、誰かを忘れているような

首をひねっても思い出せず

ま、いつか、と片付けハンバーガーを食べていると

誰かに後頭部を殴打される

いてええええええええええ

のたうちまわる俺

誰だ、と思ってみると

顔がこれまたぼやけて見えない20代くらいの
兄ちゃんがいた

何すんだ

と抗議の声を挙げる

.....

「オマエ・・・本当にそれでいいのか？」

なんのことだかわからない

「お前にはまだやるべき仕事があるんじゃないのか」

何のことだか思い出せない

「ここでチンタラやっている場合じゃないんじゃないか」

頭が、痛む

そうだ

何かを

忘れている

誰かを

忘れている

「運命とは眠れる奴隷だ。お前ならそれを解き放てるはずだ」

思い出してくる

「『あいつら』が真実に到達して勝利したように」

彼女の顔が浮かんでくる

「お前も『選ばれた』人間だ」

みんなの顔が浮かんでくる

「お前にはまだやるべき仕事が残っている!!!!」

そう、一喝され

今まで大切に握っていたジヨジョグッズが

大切な人たちとの写真が変わる

職場の同僚、課長、両親、親友、深海棲艦のレ級

々級、ホッポ、そして・

「ヲっちゃん」

「そうだ。それでいい。お前はまだまだ生きるべき人間だ」

彼の顔を見る

だんだんとその顔がはつきり見えてくる

「お前ならやれるさ。なんたって、俺の故郷で出会った『あいつ』と同じものをもっているからな」

ジッパーのついた奇抜な服装

おかつぱにまとめられた奇妙な髪形

そして

「行ってこい。また会えたら話を聴かせろよ」

彼の横に存在するジツパーのついた人影のビジョン

そうだ、あれは……

……

「オネーチャンダイジヨブ？」

虹に触れてしまいカタツムリに少なくなった私をホツポが気遣う

「ダイジヨウブヨ、ソレヨリワタシニフレナイヨウニシナサイ。アナ
タニモウツツチャウカラ」

瞳に涙を浮かべて、私を抱きしめようとしていた体を止めるホツ
ポ。

きつと本当は私のことを抱きしめて安心させたいのだろうけど
理性でそれを抑えて、移らないようにしている

ホントによくできた妹だわ

ちらり、と横で同じくカタツムリになりかけているレ級を見る

「イキテイル？」

「ナントカ。ソツチコソイキテイルカ？」

「ダイジヨウブヨ、ヨウジタイケイ」

「コロスゾ、ヒモパン」

こうして憎まれ口でもたたいていないと気を失ってしまいそうだ
突然現れた虹

先ほどまでの嵐がかわいく思えるほどの残酷な現象が起こってい
る

みんなで何とか洞窟の奥の方まで来たからもう、虹が体に触れるこ
とはないけど

このままじゃ変化するのも時間の問題だ

あの人は、無事だろうか

そんなことを考えつつ、レ級とホッポを安心させるために話かけるのであった

.....

「はははははは!!」

やっと・・・やっとくたばりやがった!!

血の海に沈む奴をみて高笑いする私

これで完璧に私を邪魔するものはいなくなった

スタンドのパワーを解放し、虹を世界中に照射する

すべての生物をカタツムリに変えて踏みつぶしてやる

私に、俺にかなうものはもうこの世に存在しない!!

そして、天気を意のまま操り、私の好きなように生きてやる

ああ、そういえばまだ日本にいるごみどもと、私に傷を負わせた深海棲艦どもがいたな

ウエザーの能力を使い、強風をあたりに巻き起こす

土が吹き飛び、先ほど奴が埋めて隠したヲ級が出てくる

埋められいたヲ級をウエザーで掘り出す

今にも死にそうだが

だが

「とどめは私がさしてやるよ。何か言い残すことはあるか」

そういうと、ぼそっと何かをつぶやく

「~~~~~」

「あ？」

小さい声で聞こえなかったが口をパクパクさせていたので何を言ってるのかわかった

く・た・ば・れ

ぶちん

「死ねよこのビッチがああああああああ!!!」
そうして、頭を砕こうとすると

アマが消えた

「.....!!!!」

なんだ？

何が起こっている

そして空を見て絶句する

.....

虹がすべて消えている

馬鹿な

私は能力の解除などしてない

そうして気づく

・ ・ ・ ・ ・
奴がいない

消えたくそアマ
消失した虹

そして

上をみると

アマを抱きかかえていた奴が浮かんでいた

雷を落として撃ち落とそうとする

出ない

風を吹かせてとばそうとする

吹かない

・ ・ ・ ・ ・
いや、そもそもスタンドが出せない

『お前はもう』

奴が口を開く

『真実に到達することは決してない』

何かを言っている

奴の横にスタンドがでる

頭には、私にささったあの矢と同じものが埋め込まれており

そして、奴のスタンドがパンチを繰り出してくる

無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ああああああああ

あ

殴られながら思う

どうして私ばかり

こんな目に

私は認められたかった

私は愛されたかった

馬鹿にされ続けて

艦娘には嫌われて

大本営からは左遷されて

神様

なぜ私を産んだのですか

最期に浮かべたのは

幸せだったころの

子供ときの、亡くなった両親とのひと時だった

最終話後半 虹は晴れて

……きなさい

まだ眠い

……きなさい

誰だ？

「起きなさい!!」

うわあ!!

慌ててベッドから落ちる僕

「まったく、夏休みは昨日で終わったでしょ」

ぷりぷり起こりながら怒る母さん

「お父さんも待っているんだから早くリビングにきなさいね」

と言ってドアを閉めて去っていく

周りを見渡す

僕の部屋だ

机の上には僕のランドセルと、本がおいてある

そうだ、昨日今日の準備をしておいて、机の上にセットしてあったんだった

ベッドから抜けて、起き上がる

なんだか変な感じだ

今まで、永い夢を見ていたような気がする

でも、こうして覚めたからいいか、と考え、服に着替えて名札をつける

下に降りる

「おはよう、かあさん、とうさん」

おう、おはようと言いながら椅子に座っている

そうして三人で食卓を囲む

いただきます

手を合わせて食べる

「今日から学校とは〇〇も大変だな」

はっ、はっ、はっと笑ってそういう父さん

「ちゃんと宿題は持った？」

かあさんにそう聞かれればっちり！と答える

ああ、なぜか懐かしい気持ちになる

なんでだろう

食べ終え、歯を磨いて、

玄関からでる

行ってきまーす

「いってらっしゃい」

ランドセルを背負って、友達が待つところまで行く

おはよーと声をかける

おはよーと声が帰ってくる

そして私の名前が呼ばれる

「おはよう!!提督」

.....

なぜか知らないが、血の海に沈んで死にかけていて、

何か手はないか体を動かしていたら

あの『矢』が体にくっついてた

なぜ、どうしてそこにあったかは分からない

けども

可能性に賭けた

ゴールド・エクスペリエンスのもう一つ先に。

そうして、奴を倒して15分くらい頭を抱きかかえられ、豊満な二つのお山で窒息させられそうになった

実はさつきまで絶賛号泣中だった彼女であった

今は、勝手に自分を置いて死にかけて俺を糾弾している

裁判長、弁護士を呼んでください

「ソンナモノハナイ。シネ」

もどってるもどってる

すると

ぼすつと頭を胸に預けて飛び込んでくる

「・・・心配した」

ごめん

こういった時はとにかく謝っておいた方がいい

「・・・ばか」

ごめん

「おたんこなす」

ごめん

「包茎」

「・・・ちよつと待てこら

それは男に言っているいい言葉じゃねえ!!

どこでそんな言葉覚えた!! 言え!!

「あなたが隠し持っていたエロ本」

ごめんなさい

五体投地で謝る

「・・・今夜がんばってくれたらゆるす」

あの、俺ボロボロなんですけど

「さつきその能力で治していたのが見えた」

ゴールド・エクスペリエンスを手をくつつけていたのがばれている
逃げ場がねえ!!

・・・？

ふと違和感に気づく

なあ、ヲっちゃん

「なあに」

くびをかしげながらあどけなく聞いてくる

かわいい

じゃなくて

俺のこの能力が見えるのか？

「うん、その黄金色の人影でしょ」

どういふことだ

彼女はスタンド使いではないはず

・・・

なのにスタンドが見えている

今までもほかの人には見えていたのか？

思い出す

今まで自分が使ってきたスタンドを

超低温スーツを実体化させるホワイト・アルバム

プランクトンが知性をもった生物型のフリー・ファイターズ

実体化しているヨーヨツマ

そして、

・・・

今日のスタンドは実体化型じゃない

だから今まで気が付かなかったのか

そう考えていると

「オーイー」

とこちらを呼ぶ声が聞こえてくる

「うん」

姉妹艦の蒼龍と一緒に最後まで見ていた

何か、こうすごい存在が提督を思いつきり連続で殴りつけたと思っ
たら

提督が消えちやった。

あんなの見たことがない

そうして浮かんでくる考えが一つ

「……蒼龍」

「きつと私も同じことを考えている」

あの人に、みんなの提督になってもらおう

拒否なんかさせない

私たちの提督にふさわしいのはあんなかつこいい人だけだ

そう思い、策を考える

ハメるための

その目は、赤城と加賀が見たら

「ようこそ……こちら側の世界へ……」

というような、危ない目つきだった

……

虹がはれた、とラジオで聞こえた

どうやら俺の知らないところで一つの戦いが終わったらしい

ディスクを頭の中に戻し、視力を取り戻す

『これからどうされますか?』

そう聞かれる

「決まっているだろう。」

殺しにいくんだよ」

そういうと、にやりと縞々の人影が笑う

その後ろには

大量の「ディスク」が入った箱がおかれていた

彼らの戦いはまだ終われない

第一章完

第二章へ

二章海外留学（隠語）編

一話 神様。転職活動用のESの書き方を教えてください
ださい（亡命

「オニーチャー！ミテ！東京タワー!!」

あやとりで東京タワーを作るといふ妙技を実践するホツポ

俺の膝の上でキャツキャと騒ぐその姿はかわいい

うん、うんすごいなー

さすが俺の嫁

と自分で言っていて、胃が痛くなってきた

幼女と結婚している男って・・・

「ダイジョーブ?!」

俺と結婚してしまったホツポが心配そうに見てくる

モーマンタイ、モーマンタイと頭を撫でる

そうしてひとしきりホツポと遊んで癒された後現実を見る

周りには陸地が全く見えないどこまでも地平線の海

どこどこ??

今日のスタンドに乗りながらホツポと見知らぬ海道を進む
時はさかのぼる

.....

新しいアジト？

「うん、そう」

日本語を勉強して流ちょうな言葉使いになった深海棲艦たち
そしてタ級がそんなことをいう

「いい加減人間と戦い続けるのも飽きてきたし、もう私たちが独立しよかなーって思っていたの」

軽い調子でそんなことをいう

いや、それ戦国大名が家臣からいきなり国のトップになるくらいの難行じゃん

「それでもないわ。お金ならたつぷりあるわよ」

どこに？

「海洋を巡行しているとね、こんなものを見つかることもあるの」
そうしてとりだしたのは……

レアメタル？

「あたり。海洋資源といえば、石油と天然ガスなんかが国が戦争起こすくらい求めているけど、こういうった貴金属くらいなら結構もっているわよ」

いくらくらいあるの？

「日本円で500億円くらい」

ブツと噴き出す

「いや、戦っていない時間って暇だから、みんなが集めていたらこんなにたまっちゃって」

軽く言うことじゃねえ

「だから、もうお仕事はやめてもいいのよ？」

ちらりとこちらを挑発的に見てくる彼女

そのお誘いはキャバ嬢に「アタシ……ホテル……予約してあるんだ……♡♡」

って言われるくらいの破壊力があるが、一度了承したら、

毎日一日中彼女たちと夜戦することになることが分かっているの
で、丁重にお断りさせていただく

っち、という声が聞こえたが気のせい

気のせい（震え声）

仕事場に行けば夜戦ばかりの毎日から逃げられるからな

.....

あの戦いの跡、深海棲艦全員と結婚することになった俺
ホツポが唯一の癒しだーと思つて抱きしめていたら

顔が赤くなっている

え

と思つたその瞬間

押し倒された

そのあとは思い出したくない

ない（強弁

ヲっちゃんに相談してみたら

「女の子は生まれたときから女なのよ」と言われ

いつもより多くお代わりを要求されて、腰が痛くなつた

そして.....

「オニーチャ!!コレナニ?!」

そう巨大な船を指さして興奮したように言うホツポ

これはね、俺の今日のスタンドさ

目をキラキラと輝かせてこちらを見るホツポにそういう

「ノレル?!」

もちろん

ものすごく乗りたがつていたので一緒に乗る

中は思つて居たより快適で、とても気持ちがいい

夏の暑い日差しも気にならないほど涼しい

操舵室まで行く

なんかいろいろと機械があるがよくわからないのでいじらないで
おく

そうだ、せっかくだからアイスでももってきて一緒に食べよう
新アジトまで戻ってアイスを取りに向かう

一人になったホツポ

目を輝かせ、周りの機械のところまで行き

ボタンを押す

押す

押す

押す

そうして俺が戻ってきたときに

、違和感を感じたが、気のせいだと片付けて操舵室まで戻ると

レバーをガチャガチャといじっているほっぽの姿が見えた

ダツシュで駆け寄り腕を掴んで止めようとする

ボギンつと鈍い音とともにレバーが折れる

さあああああつと血の気が引いていく

なんかむつちや船が揺れ始めている

「ステンバーイ・ステンバーイ・」とか聴こえてくる

ホツポを抱えて降りようとしたとき

ものすごい勢いで船が進みだす

あまりの速さに後ろに吹っ飛ばされ、

ホツポが前から降ってきてぐえつ、とつぶされる

「ハイハイ！！」と喜ぶホツポ

止めようにも止め方なんてわかるわけもなく

そのまま自然に止まるまでまるまる二時間近く水上を爆走し続け

た

神様

あなたは俺を苦笑いさせるのが好きなのですか（諦観

.....

某国某鎮守府

「えっ？ 国籍不明の貨物船が近づいてくる？」

そう仲間に聞き返す

「そうみたいなの。なんか無線で連絡とって停止勧告と国外退去命令出そうとしてもつながらないから、第一種警戒態勢で迎え撃つんだって」

ああ、だから私たちはその場所まで向かっているのか

と、一人の女性が思う

「でも、このぐい時世に一体どんな馬鹿がこんなことをするのかしらねー」

確かに、と思う。

深海棲艦が表れてからは表立った人間同士での戦争はほとんど消えた

それをこの時機にやって、批判材料を他国に渡し、国際的な立場を弱めるのは得策ではないだろう。個人レベルの犯罪か、それとも

「深海棲艦関係か、ね」

そう続ける彼女

「そろそろ見えてくるはずよ」

前を見ると

とてつもなく大きい貨物船がこちらに向かって進んでいるのが見える

大きなあ

「念のためここで止まって警告を出しておきしよう。こっちから砲撃したら後で政治的に面倒なことになるでしょうから」

そういつてみんなが装備を構えだす
警告を行う

しかし反応はない

もう一度警告を行う

依然沈黙した状態だ

さすがにおかしいと思い、スコープで貨物船の中をのぞいてみる
すると見えたのは

20代くらいのアジア系の男が白い肌の少女に襲われて、夜戦して
いるところだった

思わずスコープを握りつぶしてしまう

一体何があったらこんな状況になるのだろう

近寄りたくない、と思いつつも近寄らなければならぬ事実
にため息がでて、

重い足取りで貨物船の方まで向かうのであった

T o b e c o n t i n u e d

二話 神様。司法取引って何のことですか（寝耳にウオーター）

おっす、おら田中!!

職業はサラリーマン（あのあと結局転職した）

嫁さんが数十人いることとスタンドっていう超能力が使えることをのぞいたら

普通の人間カナ

なんでこんなことを言っているのかというと

目の前に砲塔を構えて、いまにも砲撃を加えてきそうな女子たちがいるからだ

なんで？

すると一番前にいるなんかツインテールの白い服を着たたぶん艦娘っぽい娘が話しかけてくる

「貴様らはどこの者だ」

俺が知りたいよ

「何が目的だ」

おうちに帰ることです

そう心の中で返す

貨物船の甲板に手を挙げて白旗を振りながらホールドアップする

近寄ってきた姉妹らしき金髪の娘たちに手錠をかけられ、そのまま船ごと連れていかれる

どうしてこうなった

.....

日本某鎮守府

かつてブラック鎮守府として知られていたここは、提督だった男性の失踪によって

提督不在の鎮守府となっている

大本営が代わりの提督を派遣しようとしたところ、
今までの提督の着服、犯罪、横領のトリプルパンチの証拠を大本営
に突き出し、

「私たちのお願い聞いてくれないとインターネットにアップロードし
て拡散してしまうかもー」と言ったらあつさりこちらの要求を呑んだ
それは

「まだ提督は見つからないの?」

そういう飛龍

「うん。あの悪夢の虹の日からずっと探しているんだけどやっぱり見
つからないや」

答え返す蒼龍

あの日、化け物と化した提督に真正面から立ち向かい、
“虹”から
世界を救った男、名前も居場所も不明だが、彼を探して提督になつて
もらおうとしていた

「あーあ。それにしてもひどいよねー。目撃者が私たちしかいないか
ら誰信じようとしなないし」

あの時、カタツムリになりかけながらも二人の意識ははつきりとし
ていた

提督にやられ、血の海に沈んだと思ったら

突然体が光り出して、奇妙な人影が彼の横に現れて

提督を殴り飛ばして消しちゃった

そんなことをほかの艦娘に聴いても誰も信じてはくれない

「それに加賀さんと、赤城さん、そして秋雲さんなんて違う人を提督に
するよう推薦しているしね」

この三人は、提督を艦娘たち選んだ相手ならだれでもいい、と大本
営から許可をもらった日に、その推薦者を押し続けている。

そして、私たち含むこの4陣営のそれぞれに問題なのは

「まさか誰も自分が擁立しようとしている相手の名前どころか居場所
も知らないとは」

そうなのである

この四つともがある男性を提督に推している
しかしどこにいるのかがわからず、連れてくることもできないと
いう笑えない状況だ

まだまだあの人を着任させるには障害が多い
でも絶対にあきらめない
そう決意する二人の横顔は、家庭を持っている男性を誘惑するOL
のようであった。

.....

「まず年齢を教えてくださいるかな？」

これカメラまわってんの？

「質問を質問で返すなあーっ!!

がしやんと頭をビール瓶で殴られる

いったああああああ

「ぶざけている場合じゃないぞ。吐け」

ちよつとまって、指を喉につっこむから

「物理的な問題じゃねーよ」

と、目の前の艦娘とコントをする

「貴様らの所属は？」

しがないサラリーマンです

頭を殴られる

「目的は？」

おうちにかえることです

スープレックスを決められる

あ、胸が気持ちいい、と思ったが遠くにいるヲっちゃんから殺意の
波動を感じたので思考をキャンセルする

はあ、と目の前の艦娘がため息をつく

「何もしゃべる気は、ないと」

俺が日本人だってわかるんじゃないの？

「アジア系のスパイが日本語をしゃべって日本人に擬態しているだけの可能性もあるだろう」

そういわれ納得する

あ、俺が日本人だって証明する方法がある

ねえねえ

「なんだ？」

納豆持ってきて

.....

「え？あの人ですか？いや、見ていませんけど」

そう、返してほかの場所に行く

ヲかしい

いつもならばぐはぐの時間。わたしの希望を叶えて、胸に飛び込んできてくれるはずだ。部屋で待っても来ないなんて変だ。

そう考えながら道を進んでいると

ぼったりと、レ級と、夕級の三人がでくわす

あ、と声がハモる

「よう、抜け駆け幼児プレイ好き変態女」

「やあ、紐パン変態水着女」

「あら、貧乳需要皆無フード女」

戦争が始まった

.....

日本国大本営

「何？貨物船に乗っていた日本人を確保した？」

電話でそういわれる元帥

「知らねーよ。俺は今大事な用事があるんだ。好きにしていーぞ」

ガチャンと電話を切る

『よろしいのですか？』

「ほっとけ。それよりこっちが先だ」

そういって、元深海棲艦のアジトの写真を見る

「これ、明らかにおかしいよな」

すつと写真の一部をさす

.....

「爆破のさせ方に戸惑いが無い。きれいに爆薬が仕掛けられすぎている」

侵入してきた敵を迎撃するために使ったというよりは・・・

『あらかじめわれわれが来るのをわかっていた、ということですか』

意味することは一つ

「内通者がいる。深海側とのな」

それは、ほかの部下が聞いたら卒倒しそうな内容の話であったが、幸いにも、

今の元帥の部屋には二人しかいなかった

「そして悪夢の虹が突然世界から消えた。」

あの日、世界は恐怖のどん底に落とされていたが、突然虹が消え、カタツムリになっていた人たちがみなよみがえった

.....

「虹を出していた奴はおそらく死んだ可能性が高い。じゃあ、そいつを倒したのは誰だ？」

わからないことばかりだ。しかし

「やっと俺の能力とまともにやりあえそうな奴がでてきたのかねえ」

目をギラギラと輝かせ好戦的なオーラを出す元帥

「まっ、戦うにしろ、仲間にするにしろ情報は必要だ。『白蛇』」

そう呼ばれ、はっ、と返事をする縞々の怪人

「内通者と、この悪夢の虹を倒した奴の情報を集めてこい」

そういった直後

窓から出ていく人影

.....

ここは地上15メートルの7階である

『悪夢』はまだ終わらない

T o b e c o n t i n u e d

三話 神様。酔っぱらいのあしらい方って同じく酔っぱらいになるしかないってほんとですか（落胆）

あーのひーとのそばにいたーいのー
陽気な声が聞こえる

なーにとーひーきかーえてーもー
愉しそうな歌声が響いている

だーかーらー

部屋の中で銀髪の女性が何かをしている

こーろーしーていーいーのー？

暗い瞳を輝かせながら包丁を研いでいる

「まったくー。あの人つたらまたどこかにふらふらしちゃってー」

鬼ごっこが好きねー、とつぶやく

「もし、次逃げたら、本当に」

死んでもらおうかしら

.....

ああああああああああ!!!

「うるせえええええええ!!!」

目が覚めて、絶叫しながら起きると隣の人に壁ドンされる

あつ、夢かあ。

怖いヲつちゃん？

そんなものはウチ（の家庭）にはないよ・・・

よかつたなりい

しかし、その考えはすぐに吹き飛ばすことになる

.....

「えっ、あいつを解放しろ、ですか？」

先輩の艦娘に聞き返すプリンツ

「そうだ。例の貨物船も消えてしまい、これ以上確保していてもしょうがない。秘密裏に私たちが日本まで強制送還する手はずになっている」

そうグラーフが答える

「まだ日本人と決まったわけじゃ・・・」

「アイツハニホンジン」

急に無感情になってきたえる先輩

「せ、先輩?」

「ああ、すまん。ちよつとダークサイドに落ちていた。で、その護衛は私たち3人だ」

遠くの日本に送るにはまあ、妥当?かもしれない

「で、時刻だが早速奴を留置所まで迎えにいくぞ」

「え」

「ビスマルクを呼んでこい。どこかに出かけているようだからな」

そういつて、留置所でまっているぞ、といい、先に言ってしまう先輩

「・・・お姉さまどこにいるのかなー」

・・・

なんとということでしょう

あれだけ時間がたっているというのに

はこばれてくる食事は

どいつの固いパンばかり

こんなものばかり食べていたら

胃がバームクーヘンみたいに穴だらけになってしまおうでしょう

だから、私がこうして脱獄するのも仕方のないことなのです

へなのです!

誰だ今の

今日のスタンドを使つてシルバニアファミリー、プリズンブレイクセツト、みたいな感じで売られてそうな退屈な部屋を抜け出してきた。

しかし、そこで気づく
ホツポちゃんどこ、と

何か普通に艦娘として保護されちゃったらさがそうにもどこ行つたかわからんし。

きつと今頃どこかで、「オレガウエ!!オマエガシタダー!!!」

と、仕込んでおいたポルポル君の物まねをして路上でお金を稼いでたくましく生きているに違いない

このまま帰つちやおうかな、と考えていたその時

ドン、と金髪の美女と肩がぶつかる
つち、うっせーな

反省してまーす

と言いたくなつたが、ぐつところえ

吉良喜彰の同僚みたいになにこやかに話しかける

酒臭いですね、と

メローネが悦びそうなビンタをもらった

.....

気持ち悪ううう・・・

私はドイツの艦娘の一人ビスマルク

昨日の友達との合コン失敗やけ酒パーティーで胃の中がシエイク
され、

リバーズしそうだ

私も合コンに参加させられたが、結果は失敗

仲良く慰め酒としゃれこみ、このありさまだ

それにしても、こいつてむつかしいわねー

あーあ。

なんかシンプルな運命の出会いとかないのかしら
ふらふらと歩いていると

ドン、と肩がぶつかってしまう

謝ろうと顔を見ると

酒臭いといわれ

ビンタしてしまった

.....

ぷりぷり起こって去っていく女性

なぜ起こっているのだろう

顧客のニーズと提供側のミスマッチだな

と、考え立ち上がると

「ぞげんじゃねえぞごらああ!!」

怒号が聴こえた

え？

.....

あーほとんどむかつく!!

さっきの男に酒臭いですね、と言われてむかつ腹立つ

ホントのことでも言っちゃいけないデリケートなことがあるのよ

!!

そう頭を沸騰させる

だから気が付かなかった

前からくる柄の悪そうな3人組にぶつかりそうになっていただ
なんて

「ごらあああああっ!!!」

ああ、二日酔いで気持ち悪くて力が出ない

ピンチかも・・・

.....
え？

三人組とそれに絡まれているさっきの女性を見る

え？

周りを見る

みんな見て見ぬふりをしている

俺がやれと？

今日のスタンドで？

えー

とためらうが今にも喧嘩に発展しそうだ

よし腹くくった

いけ』

.....

今にも掴みかかってきそうな男たち

ふらふらして倒れそうでこっちはやばい

男の手が伸びる

あ、とあきらめた瞬間

ものすごいスピードで何かが駆けていった

男たちの顔を見ると

歯がボロボロになっていた

「あああああ!?! なんじゃこりゃあああああ!?!」

痛みでのたうちまわる三人

誰？誰かが助けてくれたの？

そう、あたりを見回すと

さっきぶつかった男の人と目が合う

もしかして、あの人が？

たしかめようと声をかけようとする

ダッシュで逃げてしまった

・・・

へえええええ

ぶつかっておいて謝らない

女性に向かって酒臭いという

そして、

助けてくれたのに、お礼の言葉さえ受け取ってくれない

そうなんだー

何かが心の中で大きくなっていく

すると

「お姉さま!!」

妹のプリンツがやってくる

どうしたの?と聞く

「はあ、はあ、はあ、・・・大変なんです!!」

何がたいへんなの?

「実は私たち三人にある日本人男性の送還の任務が出されていたのですが」

「その人が逃げ出しました!!」

写真は?と尋ねる

「こちらです!!」

そういつて渡されたのを受け取ると

そこには

先ほどの男性が写っていた

運命

そんな言葉が頭をよぎる

「プリンツ」

「はい!!」

「ちよつとシャワー浴びてくる。あと90分したら合流するから先に
行っていて」

「ええええええええ?!?! グラーフさんにおこられちゃいますよ!!」

「適当にウルジャン買いに行ったとかごまかしておいて」

「そんなー、と言って離れていくプリンツ」

さて、

もう二度と酒臭いなんて言わせないわよ

私の本気を

女の怖さを教えてあげる

ターゲツトさん♡

To be continued

四話 神様。国に喧嘩売っちゃったけど、菓子折りです許してもらえますか（死に顔）

マンモーニがっ!!

と言われそうな今の風景

公園でスタンド能力の練習アンドお小遣い稼ぎ道端に落ちている石とかを空中に投げて、能力でピタッと静止させる

ナウなボーイ&ガールズたちにバカ受けだったおひねりにユーロとマルクをいただいて、お菓子を買って帰った

帰りに公園で遊んでいるホップを発見したので子供たちと一緒にサツカーで

バイエルン対ドルトムントごっこして遊んだ

夕暮れになってきたのでばいばい、とお別れしておうちに帰る

あれ、ストレンジス消えちゃったからどうやって帰ろうかな

.....

「コロス」

そういうヲ級、そしてその言葉に同意するレ級

「もう、あの人はふらふらしたり、死にかけてりするから冷凍保存して手元に置いておいた方がいいとヲもう」

そう断言するヲ級

危うくうなずきそうになったのは内緒

ヲ級

「・・・なに？」

不機嫌そうに返してくる

一生チューしてもらえなくなるけどいいの？

「やだ」(即答)

.....

今どこかで俺の未来がいい方向に変わった気がする

そんな思いを胸にホッポと道を歩く

帰りの手段を考えていて思った

この能力を使えば行ける、と

そのためにフっちゃんたちが使っているような飛行機が必要だ

よし

ぱくるか

.....

「何？深海棲艦が侵入してきている？」

そう聞き返す司令官

「はっ、我が国の領海に侵入したのを確認したそうです。

別々の二方角から集団ほどこで進んできております」

別々の方角から

このうちの片方がデコイか、もしくは両方共がおとりで

ほかの集団がメインか

なんにせよ

「艦娘たちをよべ」

「しかし、特殊任務中の者も・・・」

「国防優先だ、連れ戻して迎撃に向かわせろ」

「はっ」

敬礼して出ていく部下

「こんな時にこんなことが起こるとは……」

苦労性な司令はため息をつきながら部下に次々と支持を出す

本土に上陸させないために

……

「もう、次から次へと違う指令がきて困っちゃいます」

そう愚痴るプリンツ

「まあ、本来私たちはこういったことのために開発されたのだがな」

ツインテールが特徴の金髪碧眼の女性、グラフが答える

「ところでビスマルクはどうした？呼んだんだろう？」

「先に行っちゃったみたいです」

でかい暁ともいわれる彼女はとにかく子供っぽく、素直で、直情的な面が強い

おおよそ功績を挙げてみんなに褒めてもらおうという魂胆なのだろう

「レーベとマックスは？」

「ここにいます」

そういつて現れる二人のショートカットの女性

「じゃあ、今いける奴らは全員そろったようだし行くぞ」

長い戦いが始まる

……

うひよおおおおおおおお

空を飛ぶという経験にわくわくし、叫ぶ俺

まさか本当に乗って飛べるとは

「タカーイタカーイ!!」

歓喜の声を挙げるホツポ

いやー、このスタンドってこういう使い方もできるんだなあ
さすがリキエルニキのスタンドや
そう思っていると

目の前にミニチュアみたいな飛行機が飛んでくる
うおおおおお!?

船体をひねって衝突しそうになるのを何とか回避し、事なきを得る
今は……

「カンサイキ!!」
だよなあ……

つまり、戦闘機を盗んできたのに気が付いて追ってきたわけだ
「ゲキツイシヨウ!!オニーチャ!!」

しゃあない、撃ち落とさねーとマジでやられそうだからな
恨むなよ、とつぶやきこちらも機銃を掃射して攻撃する

口径の大きさがよかったのか、艦載機に命中していく
おーしこのまま……

「オニーチャ!!」

なんだよホッポ

「……トイレ行きたい」
……マジで?」

……

なんだ、あの飛行機は
人が乗っているようだ

ドイツを攻めて居たらなぜか敵の戦闘機が一台だけ突っ込んでき
たのでそれを艦載機で迎撃しようとする

しかし、急停止や、ありえない角度に旋回して、なかなか攻撃が命
中しない

くそ……

いらだつ私たち

「ナニアノウゴキ、キモチワル」

そういうワ級

なんか虫みたいにびたつ、て止まったり、急に動いたりを繰り返して見て見たくなくなってくる

でも、こちらの本体への攻撃はない

このまま数で押しつぶしてやる

と、思ったその時

ミサイルが飛んできた

熱に焼かれ、私たちは気を失った

.....

あ、なんか間違つてボタン押したらバシユウウってミサイルが飛んじやった

なんかどつか行っちゃったし

ミサイルって一発数億円するって聞いたんだけど・・・

深海棲艦のせいにしておこう（使命感

結局ホッポは俺が持っていた空のペットボトルでトイレ問題を解決したようだ

きつと一週間ぐらいは話しかけてもらえないだろう（泣き

そう悲しみつつ、仲間の深海棲艦たちの新アジトのある程度まで近くまで行ったら

ロープを使ってハンドルを固定し、誰が操縦していなくてもまっすぐ飛び続けるようにして、戦闘機の脱出装置を作動させ、ホッポ一緒に離脱する

そのまま真っ直ぐ飛び続ける戦闘機

このままいけば日本の空軍に撃墜されて、パイロットは生死不明扱いになるだろう

俺がドイツから戦闘機盗んだのがばれませんように
パラシュートでふわふわ落ちるホツポを能力でコントロールして
手元まで寄せてキャッチする

そして、運よく突き出ていた平らな岩の上に着地する
さて、この後どうやって帰ろう

T o b e c o n t i n u e d

五話 神様。女性の方から襲ってきてても有罪にならないってどういうことですか（控訴）

「あの人はどこにいるのかしら。」

かつて太郎に命を救われ、身を焦がされる思いを抱き始めた加賀いつものように艦載機を飛ばして街中を見回す

もういないのか

そう思っていたら

かつて見たことのある後ろ姿を発見する

みつけました

.....

「いなかったじゃない」

「いなかったな」

「いなかったわね」

そういう深海棲艦トリオ

田中がドイツにいるらしい、という情報を得て、すぐに向かったところいなかったという

どうやら入れ違いになってしまったようだ

今頃はホッポと日本に買い物しに上陸しているはずだから帰ってくるまでまとう

そう考える

「帰ったらお姫様だっこしてもらおう」

「あたしは横になって抱き枕になってもらおう」と

「じゃあ、私は膝枕してあげましょう」

そう、各々の欲望を述べる

「オネーチャ!!」

慌てた様子で戻ってくるホツポ

彼はどうしたの、と聴くと

「オネーチャが、オネーチャが」

さらわれた

.....

ねええええええ、じゃんけんしようよおおおおお

とじゃんけん小僧がやってくる、の巻を見ながらマネをする

あのあと、ペットボトルトイレ事件で機嫌を損ねたホツポのご機嫌取りをして、背中に乗っけてもらい、なんとかアジトまで帰ったら

みんないなくなっていた

いや、正確にはヲ級、レ級、夕級がないという

どこいったねーん、と突っ込みつつ、部屋でジヨジヨを読む

ああ、露伴先生のこのじゃんけん小僧戦での名言いいわー

と、堪能していて、おながが空いたのでポテチを食おうとキッチンを探すと

コンソメのポテチがなくなっていた

あるのはうす塩だけだった

今の気分はコンソメポテチの気分だったので買いに行くことにする

ホツポに日本本土まで連れて行ってもらいスーパーで業務用を買

いだめしておく

フっちゃんがどうやったかは知らないがここにいる深海棲艦の戸籍はつくついたらしいので

街で職質受けてもだいじよぶだという

スーパーにより、買いたいものを買ったので帰ろうとすると

フックをつけた艦載機に拉致された

あつけにとられるホツポ

おお、タカに襲われるミーアキャットってこういう視点なんだな、とのんきに構えていると

どんどんホツポと距離が離れていく

あれ、なんで俺さらわれてるの

と思った時には遅く

ある建物まで連れていかれた

.....

「全滅？」

「はい」

緊張した面持ちでそう答えるプリンツ

「何があつたかは確認できませんでしたが、私たちが深海棲艦がいるであろう場所まで行ったときにはもう・・・」

退却していた、か

夕方ごろに盗まれた一台の戦闘機

そして、戦闘が行われたと思しき場所で確認されたミサイルの着弾あと

これから結び付けられることは・・・

「同一人物がやったっていいのか。それもたった一人で」
信じられない様子でそういう上官

「おそらくは」

「戦闘機が盗まれた上に、その操縦者が深海棲艦を撃退した、なんてマスコミや国民に知られたら大騒ぎになる。」

関係者たちに嚴重に注意させろ、といい部屋から出る上官
しかし・・・

「一体誰が戦闘機を盗むなんて・・・」

おうちに帰りたいばかりに戦闘機を盗むようなあほがいるなんて
考えが浮かぶはずもなく、

神妙な顔つきで考え続けるプリンツ

姉のビスマルクに聴こうとして、部屋を訪ねてみる
ノックをする

返事はない

声をかけつつドアをさつきより強めにたたいてみる

返事はない

レバーに手をかけ、押してみると

カギはかかっておらず、中に入れた

「お姉さま?」

机の上に一枚の紙がおかれていた

読んでみると

『「運命の人に出会いました。あいに行ってください」
と書かれていた

ピシ、っと凍るプリンツ

再起動したのは、同じくビスマルクを訪ねてきたグラーフに部屋の
真ん中で凍っているのを発見されて、体を揺さぶれてからだだったとい
う

.....

「提督になってください」

急に拉致られて状況もわからないんですが、それは

目の前にいるサイドテールの白い弓道着に青い袴をはいた美人さんを

正面に見据えて話す

あ、このお茶オイシイ

「うれしいです」

ぽつと顔を赤く赤らめる女性

君はだれなん？

「艦娘の一人、加賀と申します。あなたにいのちを救っていただいた者です」

.....

記憶を必死に探り、彼女のことを思い出そうとする

フっちゃんとお会った日

スタンドが目覚めた日

そして・・・

君もしかして、俺が海を凍らせたときに助けた娘？

「はい」

そういいながらこちらの手を取って、自分の手と絡め合わせてくる加賀

恋人つなぎはやめて

「この鎮守府にはかつて提督がおりましたが、戦いの中で行方不明となってしまうので代わりに私たちと一緒に戦ってくれる人を探しているのです」

へえー

田中は知らない

その原因が自分であると

「そして、私はあなたと一緒に戦ってほしくてここまで招待しました」
あれを招待というなら、世の中の誘拐事件はすべて合法になるわ
そう突っ込む

「……そろそろですね」

え？と聞き返そうとすると

体から力が抜けてぐらつく

彼女の胸にぽすんと収まる

「お茶おいしかったでしょう。喜んでもらえてよかったです」

そしてポケットから白い粉が入っている袋を取り出す

く……す……り……。

たまにヲっちゃんに入れられて、普段は警戒していたがぬかった

「じゃあ、ちよつとおとなしくしててくださいね」

そういつてシユルシユルと着物を脱ぎ始める彼女

こちらの服も脱がされていく

「さすがに気分が高揚します」

さすがに気分が動揺します（絶望

そのまま、彼女にいただかれた

ヲっちゃん、ゆるして（懺悔

To be continued

六話 神様。 裁判って弁護士がつくものではない
のですか（おびえ

「やりました」

やられました（血涙

くっそう、あのあと五回もやっちゃったよ

最近深海棲艦のみんなとたくさんいたしていたからだいぶ体力が
ついてきて

ハッスルしちゃった

これ、殺されるな（あきらめ

そう、落ち込んでいると

グイツと顔を加賀の方に向けさせられる

目がいわゆるレイプ目になっていて病みを感じる

「いま、ほかの女のことを考えていませんでしたか」

山岸由香子に好かれていてもそれを受け入れる康一くんマジ聖人
とリスペクトしつつごまかしておく

ま、いいでしょう、と追及の手をやめる彼女にホッとする

「では行きましょうか」

ど、どこにですか（震え声

「みんなに旦那さんを紹介しないといけませんからね」

窓から飛び降りようとしたら先回りされる

クレイジーDのラッシュより早い（驚愕

首を掴まれ引きずられていく

ケツが大根おろしみたいになっちゃうと思いつつながら

今日のスタンドがましな奴でありますように、と願った。

.....

時は変わって、同じく鎮守府の近く

深海棲艦の四人組がやってきた

「ホッポ、ここなの？」

「ウン、この方角の方にとんでいった!!」

「艦載機ついたら私たち深海棲艦か、」

「艦娘よねえ」

田中が艦載機に誘拐されたと聞いて即座に救出にきた

四人

えーと、と鎮守府の外から望遠鏡で遠くをのぞき込んで様子をうかがう

「どう？」

「電気はついていて、門番はいない。一番大きく、主機能があるであろうところは人がいる気配がある」

そう答えるレ級

「忍び込むしかないかな」

「だな」

そして、もう一人はどうしているのかというと

「はーい、今ミルクをあげますからねー」

と、暗い瞳でたなか、とひらがなで書かれた人形に自分の胸を押し当てて、

ミルクを飲ませようとしている

残りの三人はそんなヲ級が怖くてスルーしていた

ここに第一次正妻戦争がはじまる

レ級が何か見つけたんか「あつ」と声を漏らす

「どうしたの？」

「いた」

「何か裁判みたいなのやってて被告人になっている」

.....

「では開廷いたします」

閉廷してください（嘆願）

なぜか5人の艦娘に囲まれ、裁判が始まる

この被告人席って死刑台に似ているな、と考えていると、裁判長の秋雲から

前にでろ、とメンチを切られる

おしっこもれそう

「被告人、田中太郎、あなたは私のハートを奪っておいて、ほかの艦娘からも恋慕されていた。間違いありませんか？」

おかしいなあ。こんなことが起こるなんておかしいなあ

「裁判長。おそらくですが彼は加賀さんと今までチヨメっていたはずです」

なんでばれたし

「さいてー」と小声で言われ傷つく

それにつけているように腕を胸に押し付けてくる加賀

やっぱナイスバディですわ

赤城さんが無表情で語り掛けてくる

「わたしの旦那様なのにほかの艦娘とねんごろになったんですか……？」

感情を感じさせない分よけいに怖い

怖い（恐怖）

最近身に覚えのない婚約者が多すぎる

「被告人田中に判決を言い渡します」

死刑かな？

「私たちの提督となって、一生そばにいたいこと」
その判決が下された瞬間

窓から金髪の美女がガラスを突き破って入ってきた

.....

大本営元帥室

「なるほどねえ.....」

白蛇が集めてきた情報を読み取り、納得する元帥

「こりや確かに面白い」

そこには

へヴィー・ウエザーの使い手であったであろう男の情報が乗っていた

「今までスタンド使いじゃなかった奴がいきなりスタンド使いになる、か」

不思議そうにさういふ

スタンド使いには二つのパターンがある

一つは生まれつきスタンド能力を持っているパターン

そして、もう一つは

「この矢に射抜かれて、死なずに生き残ればスタンド能力に目覚めるわけだ」

手に収まつてる矢じりをもてあそんで愉しそうに笑う

『あの戦闘があつた島に向かつたところその矢を発見しました』

「あぶなかつたなあ。お前でもこの矢が刺さっていたら死んでいたかもよ」

けらけらとそのシーンを見てみたかつたと感じさせる無邪気さでのたまう

そして、表情を変える

「そして、だ。なんでドイツのあの艦娘が脱走して日本に向かつたつてんだ？」

ドイツには6種類の艦娘が現在確認されている

グラーフ・ツェッペリン

プリンツ・オイゲン

レーベレヒト・マース

マックス・シユルツ

U—511

そして

.....

「ビスマルク?!?!なんでここに?!?!」

驚く艦娘たち

あれこの人ドイツであつた酒臭い美女さんじゃん
そう考えていたら彼女が近寄ってくる

ヤバイまたぶたれる

目をつぶる

顔を掴まれ

抱きしめられる

は？

「もう酒臭いなんていわせないわよ」

ああ、気にしていたのね

と納得

すると腕を掴まれる

え？

「一名様ごあんなーい」

お姫様抱っこをされ

突き破ってきた窓から飛び出す

ぽかんとあつけにとられるほかの艦娘たち

しばらくそうして放心していて

ようやく彼がさらわれたことに気が付いた

全員の気持ちに代弁するように

「頭に来ました」

加賀がつぶやいた

T o b e c o n t i n u e d

七話 神様。 おうちに帰れたと思ったらすぐにあ
いしやるりたーんしました（謎）

「おかえり」

ただいま

グラフという前にあったツイントールの艦娘にそういう
ビスマルクに連れられて、ドイツの留置所にまた戻ってきた
恐るべきことに艦娘と、途中参戦した深海棲艦のみんなから逃げ
きった

ビス子恐るべし（こう呼べって言われた

「で、なんで脱走した？」

むしやむしやしてやった。今は最高にハイツてやつだあああああ
あはあああああはあ
ガチキツクされた

「まあ、いい。こっちはそれどころじゃなかったからな」
どつたの？

「深海棲艦が攻めてきてな。なぜか途中で撤退していったが」

へー。？諸悪の根源

「ところで聞きたいんだが」
なに？

「なんでビスマルクは猫みたいに私を威嚇しているんだ？」
留置所のガラスの壁の向こうでは、俺を連れてきたビス子がふ
しゃーつと

グラフに威嚇している

俺が視線を送ると途端に、猫みたいにうにゃんうにゃん言いながら
アピールしてくる

どうしてこうなった

.....

彼を連れてきたときには大騒ぎだった

留置所を脱獄してきた彼を連れて言ったらよくやったってほめられた

でも、あんまりうれしくない

彼と一緒にいてお話ししているほうがなぜかたのしい

あんなにひどいことを言われたのにそう思うのはおかしいかもしれないが

そう心が感じているのだ

プリンツに聴いたらほろりと「お姉さまに・・・春が・・・」と泣いていた

お酔をかけたスツパムーチョを口の中に入れてやった悶絶していた

でも、留置所にいるんじや彼とお話できないつまんない

胸を揺らしてみる

あ、こっちにくぎ付けになっている

おもしろーい

そのあと、ガラス越しに彼を持って遊び続けた

.....

「覚悟はいいか？あたしはできている」

そうどつかのギャングみたいにキメるレ級

「はやくはやくはやくはやくはやく」

ぶつぶつと言いながら彼を模した人形の首を絞めているヲ級

「オニーチャに会いに行く!!」

相変わずで安心するホツポ

じゃ、殴り込みに行きましよう

行きさきは

ジャーマン

.....

日本から出発した軍艦が進んでいる

船の中に何人もの艦娘が乗っている

鎮守府には何人かの娘を置いてきたが、五人は即座にドイツまで行くことに決めた

加賀、赤城、秋雲、蒼龍、飛龍の五名である

それぞれが、それぞれの思いを持ちつつ、ドイツを倒すまではひとまず停戦協定を締結した。

しかし、雰囲気は最悪だ

船を操縦している妖精さんは

危険手当ももらえるかな、と考えていた

.....

あのあと、留置所から解放されて、正式に自由となった俺

しかし、宿無しだった

ちよい、ちよいと肩をたたかかれる

にまーつとした笑みを浮かべてビス子がいう

「私のこゝ（部屋）、あいてますよ」

懐かしいな。それ

しかし、なんだか嫌な予感がするので丁重にお断りする

それでもあきらめずに腕をグイグイ引っ張って来るビス子

駄々っ子みたいだ

らちが明かないので能力を使ってその場から脱出する

スカイハアアアアアアイ

宿までダツシュで駆け抜けた

.....

あの人の腕をグイグイ引っ張って私の部屋まで連れて行くこうとし

たら

突然、掴んでいた腕がするりとほどけてしまい

え、と驚く暇もなく遠ざかっていく彼の後ろ姿を見つめる

すると、なんだか寂しくなって、悲しくなって

泣いてしまった

恥も外聞もなく号泣する

その声によつてきたのかプリンツが

「何事ですか!？」とやってきてくれた

ことの経緯を話す

「それは何とも信じられない話ですが、知り合つて間もない彼の中にぐいぐいはいりすぎたのでは?」

男性つて結構そういうところデリケートですし、というプリンツ

そういうものか

なんか、最初は最低!つて気持ちばかりが募っていたけど

どうやったか知らないけど助けられてからずっとあの人のことを考えていた

いくらなんでも早すぎ、つて言われそうだけど気になるものは気になる

「ゆっくりどうすればいいか考えましょう」

やさしく言われ、うん、と返す

絶対にあきらめないウーマンがここに誕生する

.....

.....いやー

実は逃げてから近くに隠れて様子をうかがっていたんだけど
まさかガチ泣きするとは

思わず出ていきそうになったわ
でも、そっか

決して悪い娘ではないんだな

そう知りえただけでも俺にとっては幸いだ

その露店で買ったホットドッグをむさぼりながら思う
さて、今日は久しぶりに夜戦もないしゆつくりできるな

そう思っていた時期がおれにもありました

.....

特殊作業員よろしく窓の一部をカッターで切る

切った部分を地面に置き、腕を穴から入れて窓のカギを開ける

そーつと音を出さずに開放し、忍び足で彼がいるであろうベットま
で近寄る

ベッドが膨らんでおり、そこに彼が寝ているであろうことがうかが
える

そのふくらみに

ナイフを突き立てた

しかし、手ごたえがおかしい

うまく刺さらない

布団を外すと

マネキン人形が横たわっていた

触るがやはり何の変哲もない

やっぱり俺ってなんかついているわ

!!?

後ろから声をかけられ、思わずナイフで刺そうとするが

腕が動かない

そして、気づく

マネキン人形が変化していき

私と同じ姿になる

くじの三等でマネキンもらった時にはいらねー、って思ってたけど
にやりと笑って言うてくる

最高についてたっ、っーわけだ

その夜、私は操られた

T o b e c o n t i n u e d

八話 神様。 女騎士のくっ、ころせ！つてリアルに
存在するんですね（わくわく）

あつぶねー

ふざけてマネキンをベットのの中に入れて置いたら偶然今日のスタ
ンドがサーフィスで助かった・・・

なんか襲ってきた奴を操れたし

ちゅーか美人さんね

そういつて襲ってきた金髪でグラマーなツインテールのグラーフ
とかいう艦娘にそっくりな彼女を見る

くっ、殺せ、と言わんばかりににらみつけてくる

アンタは誰で、なんで俺を襲ってきた？

「……………」

だんまりか

まっ、失敗したときに情報をすぐに漏らすような奴を暗殺なんか
よこすわけがないよな

あつ、そうだ

おいサーフィス

「なに？」

うわ、声とか雰囲気とか全く一緒に怖いわ

こいつの恥ずかしい秘密全部教えて

「……………!!!」

それだけはやめて、と言わんばかりに視線を送ってくる

ああ、どつかの誰かさんが素直になつて俺の知りたいたいを教え
てくれればなあ

俺もやめるかもしれないのに

ぶんぶん、と首を振る彼女

えっ、なにいくく？きこえんなああああ

よし、やれ、サーフィス

「??アイアイサー」

「!!!!!!」

堪能しました（意味深）

.....

某場所

「で、暗殺には成功した。そして、死体も処理してきたのだな？」

「はい、警察などの刑事機関にもわからないよう、証拠はすべて隠滅しておきました。」

「よし、下がっていいぞ」

そういつて下がる部下

それにしても・・・

「戦闘機を盗んだ奴が貨物船に乗ってきた奴と同じで、しかも

深海棲艦をたった一人で撃退したとは」

色々と面倒になる前に処理できてよかった

今夜も熟睡できる

そう思つて、部屋から出ようとしたら

さつき出て行つたはずの部下に首を絞められる

っぐ???

!!??

「き、きさま・・・何を!?!」

「ごめんなさいね。上官♡私あの人についていくから♡」

そういつて、私の首に力をこめる彼女の顔は恍惚としたものだった

それが、私が生きている間にみた最後の景色だった

.....

「うええええええええん!!!」

やりすぎた

サーフィスにいろいろこのナイスバディちゃんの秘密を暴露さ

せたらとんでもないことばかり出てきた

いわく、こんだけ美人なのに処女でまだ男と一度も付き合ったことがないとか

いわく、実はもうこんな仕事辞めて結婚して家庭を築いてお母さんになりたいとか

いわく、実はとても淫乱だったとか（本人の名誉のためにどう淫乱だったかは伏せておく

色々人間って見た目からじゃわからないものだなあ

「どうするの？マスター」

サーフィスに聴かれ思わず彼女をチラ見する

絶賛大号泣

雨あられと彼女の眼から涙がこぼれていく

………しやーない

フっちゃんたちにマジで殺されるかもしれんが、ジョナサンだったらきつとこうするだろう

泣いている彼女の前まで行き

そつと抱きしめた

「へっ？」と何が起きたかわからずに戸惑う彼女

よーしよしよしよしよしよー………し、とあやしてやる

よくホッポがぐずったときとかこうしてやったらすごいよろこんだからなあ

するとだんだんと涙が引っ込んでいき、落ち着いた顔になってきた頭をぽんぽんと撫でてやる

今までは童貞の彼女いない歴〃年齢だったが今では女つたらしみたいになっちゃったよ

深海棲艦の嫁さんたちの仕込みの半端なさぶりを改めて思う
しばらくそうして彼女を抱きしめ続けた

落ち着いたか？

「はい……」

人前で恥も外聞もなく泣いたことを思い出して恥ずかしかったのか、顔を赤らめてそういう彼女。しかし・・・

君、艦娘のグラーフって娘に似ているなあ
そういうと

「あつ、それって私ですよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ええー

昼間と雰囲気違うような・・・

「今はこうしてあなたに感情的な部分を見せてしまったので、敬語で話させていただいてますが、普段は凜とした感じでクールキャラをやってますから」

留置所での彼女とのコントを思い出し思わず吹き出す

笑うなんてひどいです!!、と言われごめんごめん、と返す

で、暗殺なんて汚れ仕事とかもう嫌だと

「私たち艦娘って立場が微妙で、軍から除籍されたらほぼほぼ社会では生きていけないんです。人間用の戸籍ももってはおりませんし・・・。だからこうして仕事をするしかないんです。」

でも、暗殺失敗しちゃったから戻ってもたぶん処分されるだけじゃない?

そういうとまた涙目になる彼女

あつ、やべ

「うわああああああん!!!今まで感情を押し殺してがんばってきたのにいいいい!!!」

また号泣し始める彼女

この涙の滝を止めるか

俺はブチャラテイみたいな男前でもないが、もう彼女を見過ごせない、と感じているのに気が付いているのである提案をする

抱きしめている彼女の肩を掴み真正面から見つめる

やられる前に上官をやっちゃえ

「!!そ、それはそういう?!(この世から抹殺するてきな意味で)」

そういう意味（殴って記憶をなくす的な意味で）

成功したらずっと俺がそばにいてやるよ（仲間になってほしいてきな

「……………!!!」（プロポーズと解釈）」

「だからー♡私はある人とずーっと一緒にいることにしたんだー♡♡」

行き場をなくした私を拾ってくれるだけじゃなくて、プ、プロポーズまで……………♡♡」

キヤーっといって恥ずかしがるグラーフ

「だから退職届○○におきまーす♡♡、っってもう聞いていないか」

首があらぬ方向にねじれ曲がって、死んでいる元上官に対してあつけらかんと言いつつ

「まずは手をつないでデート♡♡その次は観覧車で一緒に夜景をみてちゅー♡♡」

そうしたら素敵なホテルで初夜を……………♡♡」

そのまま部屋をでて愛しの彼のところまで帰る彼女

後日、ドイツでは二つの重大なニュースが取り上げられる

ドイツの艦娘グラーフ・ツェツペリンの失踪と、ドイツ将校の

殺害事件

しばらくはドイツの話題となった

To be continued

九話 神様。俺はあと何回天井ネタをやれば許されるのですか？（質問）

一仕事終えてやりました、という顔をしているグラーフ

青い袴、サイドテール、お薬・・・うつ、頭が・・・

グラ子って呼ぶことにしよう

しかし・・・距離が近くないか？

宿舎に戻ってきたグラ子を出迎えて一緒に夜更かしして語り合っているがソファアの隣に座ってくる

肩に頭をのせてくるし、ヲっちゃんたちと違う感じのいい匂いが鼻腔をくすぐってくる

あつ、やばい

耳をはむはむと口で啜えてくる

うおおおおおおお

これくらいならヲっちゃんたちにさせられているプレイの方が100倍恥ずかしいがやはり俺にも羞恥心はある

ベッドに移る

そして、布団をかぶって横になってしまう

やっと安心できる、と思っていたら

グラ子が入ってきた

さすがに意味が分からない

これから一緒の仲間になったとはいえこれはまずいんじゃないのか

グラ子にちよつと近くね？と聴いたら

「私のこときらい？」

と目を潤ませてお子ちゃまモードになったので嫌いではない、と言っておいた

あれ、なんだかデジャヴが

すると、抱き枕にされる

しかも俺が今使っている枕の上に頭をのせてくるので、必然的に顔と顔の距離がちかくなってしまう

お、俺は・・・妻帯者なんだ・・・

と自分に言い聞かせるが、めっちゃ体を擦りすりとさせてくる寝返りをうつと

グラ子に変身したままのサーフィスが入ってきて抱きしめてくるはあ?!

「いや、マスターが慌てているところをもっとみていたくてな」

そういつてニヤニヤと笑いながら言ってくるサーフィスくっそ、こいつ・・・

その夜、ダブルグラ子に責められ、寝付けるわけもなかった

・・・・・・・・・・・・・・・・

見えた

ドイツまでもう少し

そうみんなに告げる

やる気満々なところが頼もしい

特にヲ級は正妻を自称しているからかとても気合いが入っているドイツに拉致された彼を探してここまで来た

はやく連れ戻してイチャイチャしたい

みんなの気持ちは一つだった

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あれが本土ですね」

そういつてスコープでドイツの陸地を確認する加賀さん

私と同じ人が旦那さんだったとは知らなかったけど、その話は今は後にして

「艦載機を斥候として飛ばしておきましょう。カラーリングは黒に塗

り変えて、音もほとんど出ないように妖精さんに改造してもらっているので行けるでしょう」

「赤城さんは右から、私は左から、蒼龍は前、飛龍は後ろの警戒を。秋雲はそのまま操縦を続けていて」

はい、と声が重なる

さして

「に が し ま せ ん」

.....

ドイツの軍部

「一体なんでこいつは死んでるんだ？」

首があらぬ方向にねじれまがった将校を見て、そう疑問の声を漏らす男

「この男が死んでいる時間にある女が退職届を出しているのがわかっております」

そういつて机の上にある「たいしょくとどけ」と書かれた紙を手取る

内容は

「わたしたちけっこうんします。」と20代くらいの男性とツーショットでダブルピースしあっている写真が貼られていた

「ふざけてるな」

「ふざけていますね」

顔が分からないよう加工されており、解析が難しく処理されており、指紋も取れず、ワープロで打たれた手紙で筆跡鑑定もできない

「十中八九その消えた、という女子が怪しいがな」

そういつて煙草に火をつけてプハーっと吸い始める

「どうしますか？」

そう部下に聴かれ逡巡した後

「隠ぺい工作すつか。戦場での戦死ってことにしておくぞ」と画策する

・・・・・・・・・・・・・・・・

ドイツ某所

『ここに矢が反応している・・・』

そういつて矢を手を持つ縞々の男

『矢に選ばれる資格のある人間がいるのか？』

そう思つて歩き続ける

きつと、この矢が示す先に、悪夢の虹を終わらせた男がいる

そう考え身を引き締める

自身が命じられた役割を果たす

それが男の使命だった

・・・・・・・・・・

あのあと結局グラ子たちに挟まれ続けた

グラ子にはキスされちまった

仲間同士でキスはおかしい、と諭したら

「えっ・・・・・・・・」とこの世の終わりみたいになった

詳しく聞いたら、結婚を申し込まれたと勘違いしたと

おい、このパターン前もやったよな（確認

すると、また甘えん坊モードに入り、泣き始める彼女

それを全力であやす俺

ゲルマンな婚約者が増えました（白目

いま、グラ子がシャワーを浴びている

なんでも俺と一緒にこの国を出て、一生そばに居続けたいから、その準備のために

支度をしているのだという

追っ手が来る前に早く逃げたほうがよくね？

・・・・・・・・・・

だだだだつと、とある宿舎まで普通の一般人の格好をした体系の

がっちりした男たちが突入していく

部屋を一つ一つ開けて、銃を構えてホールドアップ、と言う

ここに逃げ出した艦娘のグラーフがいると聞いて確保しに来たのだ

貴重な戦力を低下させるわけにはいかない。

国のことを想う軍人の男はそう思いながら、最後の部屋のドアノブに手かける

部下の合図をまつ

GOサインが出されたのでドアを蹴っ飛ばして銃を構えてクリアリングを行う

ベッドにグラーフ・ツエツペリンが座っていた

銃を構えたまま腕を後ろに組み、地面に横になるように言う
すると、すつと手をこちらに向けてくる

動くな！と言いながら足をねらって一発撃ち、逃げられないようにする

そして、弾が当たると

バグンつと変な音が鳴る

.....

人間にあたつた音じゃない

血もでていない

「ああ、すまないな。マスターとグラーフは今頃愛の巣でイチヤイチャしているだろうよ。.....ワタシモラブドールトカニトリツケバアイシテモラエタノニ.....(ボソツ)」

そういうが何ことかわからない

「念のため死者が出ないように警告しろと言われているから言ってお

くぞ。

死にたくなければすぐに逃げろ」

意味が分からない、囲まれていてこのふてぶてしい態度はなんだ
「警告したからな」

そういつて枕の下にあるものを見せつけてくる

カッチ、カッチ、カッチと音を鳴らしている

．．．．．!!!

突然部屋が閃光に飲み込まれ

私たちは気を失った

T o b e c o n t i n u e d

十話 神様。なんで毎回相手のスタンドがチートなのですか（反抗

「さて、行くとするか」

その周りにはとてつもなく多くの数の深海棲艦

「俺もこの能力に目覚めてからはずっと退屈するようになってしまった」

「

悲しそうにそういう男

周りの深海棲艦たちの様子がおかしい

眼の焦点が合っておらず心ここにあらずといった感じだ

「俺が楽しめるパーティーが開かれてくれないのなら」

自分で開くしかないよな？

誰に言うでもなくそう言い切り。

ドイツを襲った

.....

ドイツ大本営

「馬鹿な?! 深海棲艦がここまで気づかれずに接近していただと?! 監視の者は何をしていた?!」

「それが、突然レーダー上に現れたと・・・」

そう怒鳴り、部下に状況報告をさせる指揮官と、答える部下

これはマズイ

奴らがレーダーをかいくぐって本土までやってきた

それはすなわち・・・

「何としても本土への上陸は防げ!! 民間人に避難命令を出せ!!」

警報ではなく、強制退去の避難命令を即座に出し、ドイツ国民の命を守ろうとする

ここまで接近されたら本土に上陸されるのも時間の問題だ。

我々の役目は本隊が到着するまで持ちこたえること

それは明らかに死を覚悟する場面であり、司令官をやっている男は走馬灯が頭の中に浮かびつつあった

(死ぬかもしれない・・・しかし!!)

その目の輝きは、恐怖を含んでいたが

(ここですべてが終わったとしても守って見せる・・・!)

同時に気高さを感じさせる眼だった

人間と化け物たちの戦いが始まる

.....

「ねえ、赤城さん」

そう聞いてくる同じく一航船の加賀さん

「何か、様子が変ではないですか」

確かにおかしい

何か戦闘を行っているようだ

しかし、誰と？

「深海棲艦ぐらいしかなないんじゃないんですか？」

蒼龍の言葉にうなづく

どうやった国の本土までやってこれたかはわからないが

襲われているのは確かかなようだ

これが奇襲によるものならば、避難が間に合っていない人たちがまだいるはずだ

「救出活動にあたりましょう。あの人も街にいるのかもしれないかもしれません」

その言葉に同意し、五人全員で向かう

命を救う戦いが始まった

.....

うおおおおおおおおおっ!!!

サーフィスを宿に残してグラ子と脱出したら

外がむっっちゃ燃えている

ちよ!!グラ子おおおお!!この国ってこんなお祭りやるって知らなかったよおお!!!

んなわけあるかー!!と頭をはたかれて突っ込まれる
デレモードは二人きりの時だけらしい

あちこちで避難し続ける人たち
とその時

子供が躓いてしまう

上からは瓦礫が崩れてきている

ちよっ、あぶね・・・!!!

ダツシユで駆け寄るが

距離が遠すぎて間に合いそうにない

ちくしよう・・・!!

すると、子どもが消えた

え?と思つて少し離れた場所を見ると

体がボロボロにすすけてるサーフィスが子供を抱えて救出して
た

サーーーーフィスウウウウウウ!!!

そう歓喜の声を挙げて悦ぶ俺

「まったく。私にせつかく敵の足止めをしてやったというのに、外が
こんなんだとはなあ」

呆れたようにいう彼女。まだグラ子に変身しっぱなしだ。

「あの爆弾を使ったが、死傷者はいないぞ。よかったな」

そういわれホツとする俺

子供を近くで様子を見守っていた大人にたくし

これからどうするか燃え盛る街の中を走りながら話し合う

っーかあちいいいいい

しゃべろうとすると喉がからからになって焼け死にそうなくらい
熱がある

どうすればいいんだよこんなん!!

「どうやら深海棲艦たちが襲ってきたらしい」

深海棲艦……? フっちゃんたちか?!?!

「いや、マスターの記憶によるとこういつた戦闘行為にはそれほど積極的な奴らではない。とすると別勢力だろうか」

そういわれ、絶句する

マジか

「さあ、どーするマスター?」

「私はあなたについていくぞ」

同じ顔、同じ声の二人に見つめられ緊張する

どうするか???

決まっている

ぶっ倒す

………

「やれやれ、お粗末な防衛だ……」

かつて自分が士官を務めていた故郷を見てそうため息をつく
つまらない退屈な国だった

滅んでどうぜんだ

陸地が上がって一人ごちる

終わらせるか

そう思い、能力を使って戦火をさらに広げようとしたところ

後ろから誰かが殴り掛かってきた

「……?!」

とっさによける

「っち、外したか」

20代くらいの東洋系の男だ

その手にはナイフを持っている

「てめえ、あの深海棲艦たちと何か関係があるな?」
さて、何のことだか

「とぼけんな!!!あいつらの眼に光がねえ!!!何かしやがったな!!!」
怒りで叫びをあげる男

つまらん

激情に身を任せるだけの男か

能力を発動させ、その姿を変えていく

口は割け、しっぽが生えてきて、鱗が体を覆いつくす

そして、その周りには恐竜たちが集まる

「いけ、恐竜たちよ」

ジュラ紀の王者が襲い掛かる

T o b e c o n t i n u e d

最終話 神様。たすけて ()

異形の姿になっていく奴のその姿は

「恐竜か」

「あたりだ。その動体視力は銃の弾丸さえ見てからよける!! 貴様に勝てるかな?」

そういつて小型の恐竜を向かわせてくる

背後からあるものをだしそれを上に投げる

「無駄だ!! 何をしようが恐竜どもには効かん!!」

そういつて上から降ってくるものから逃れようと体を動かすが
当たる

それもそのはず

ここは海の近くの港だ。漁業などに使われるネットが多くある
漁などで使われるネットをつなぎ合わせて大きくしたものを上に
高くほおり投げた

逃げられるのなら、逃げ場をなくしてしまえばいい

単純だがこの場面では効果的な発想であった

途中の民家からもってきた油をまき、ライターで火をつける

ネットを伝わって燃えていく恐竜たち

燃えて焦げ焦げになると、ネズミに戻る

「やはり、お前の能力はほかの生物を恐竜にして支配下に置く能力
だったか」

「わかったからどうしたのだというのだ? 私自身でお前をしとめれば
いいだけだ。」

お前は私にダメージを与えるために攻撃し続けなければならぬ
が、こちらはお前に一撃でも与えれば恐竜にして支配下における」

奴の言う通り

生物に傷を負わせれば問答無用で支配下における能力という恐ろ
しき

策も何もなく突っ込んでくる
顎を大きく開き頭ごと丸のみにせんと近づいてくる
バックステップで距離を取る
しかし

「無駄だああああ!!私は何を引き連れてきたのかわすれていたのかああああ!!」

近くの物陰から恐竜化しかけている深海棲艦がでてきて体を押さえつけられてしまう

その力は普通の人間では解けそうにもない

「そこで抑えているおお!!私だとどめを刺してやる!!」

そういつて、爪でひっかいてくる

腕を交差させガードするが食らってしまう

「これで終わりだああああ!!」

恐竜の雄たけびを上げて叫ぶやつ

しかし

俺は立ち上がった

.....

全く恐竜化せずに

「何?!」

驚く奴

それもそうだ

普通なら恐竜化しておしまいのはず

「貴様・・・一体?!」

そう居ながらしっぽで体を吹き飛ばしてくる

ガゴン、と鈍い音があたりに響く

その手ごたえにおかしさを感じたのかやつ顔がゆがむ

そして、服の切れ目からのぞかせているその体は

明らかに人間ではなかった

「人形だと?!?!」

「正解。でも、もうおせえ。」

そういうとその体が変わっていく

そのまま変化し続け

奴と瓜二つになった

「なっ．．?!」

その異常さに声を挙げて驚く

「それがどうした!!」

再び恐竜になって襲おうと真正面から突進してくるが

奴の負けが確定する

「俺と面面向かって接したらアウトなのさ」

体を操る

そう、俺は田中のコピーをしているサーフィスだ

港で恐竜を見かけた田中が俺をコピーしろ、と言ってネットと油を手に入れて渡してきた

奴の体を操る

「ぐ．．．!!」

体がピタリと止まり、恐竜の体から人間の体へと戻っていく

しかし

「奴を殺せえええええ!!」

恐竜化の能力が残っているのか後ろから恐竜たちが襲ってくる
しかし

さらに背後からの砲撃によって粉々になった

俺がなんで今まで一人で戦っていたかつて？

グラ子たちが艦装を取りに戻るまで時間を稼いでいた

艦娘の砲撃にはさすがに恐竜も耐えられない

そこで俺の出番だ

「動体視力がどれだけすごかろうと関係ない

動けなくして一撃で倒してしまえばいい

ただそれだけのことだ

「やれ、グラ子」

「ま、まで・・・」

グラ子の砲撃を食らう

そのまま数十メートル吹っ飛び

地面にダウンした

・・・・・・・・・・

勝った

やつと

マジで危なかった

ウエザー・リポートの方が強かったが、能力の凶悪さは同じくらいだった

今日のスタンド能力がサーフィスじゃなかったらたぶん恐竜化されてやられていた

そう思っただけだと、いつの間にかグラ子に変身しているサーフィスがぐらり、と体を崩す

ちよ、大丈夫か!?

そう慌てて支える俺

そんな様子を見て、馬鹿だな、と漏らすサーフィス

「スタンドのマスターがスタンドの心配をしてどうする」

そう自嘲している

あれからずっと戦い続けてもう夜だ

つまり

「お別れ、だな」

名残惜しそうに言う彼女

「消える前に最後にお願ひ聴いてくれるか？」

そう不安そうな顔で言う

「人間と変わらない性能の人形を飾っというてほしい。それをみていつでも私のことを思い出してもらえるとうれしい」

それくらいならお安いごようだ

深海棲艦のみんなに無理言っでもつくってやらあ

「そしてもう一つ」

すつとポケットから指輪と取り出す

「これを受け取ってくれるか？そして、こっちを私の左の薬指につけておいてくれるか？」

そういわれ即座につけてやる

時計の針がもうすぐ夜の十二時を指そうとしている

「じゃあな、マスター」

そういって、マネキンから何か魂の様なものが出てくる

それは天に向かって上っていき

やがて消えてしまった

「田中・・・」

今まで見守っていてくれたグラ子が話しかけてくる

彼女をぎゅっと抱きしめる

そうだ。

まだ終わっちゃいない

サーフィスの分までしつかりとやるんだ

.....

なんてそう思っていたい時期が俺にもありました

「お帰り、マスター」

あのあと、騒ぎを収めて、サーフィスに頼まれた通り超高性能な人形と同じ機能を持つ

ロボットを作ってもらったら

その日の夜にサーフィスがとりついた

しかもなぜかグラ子のまんまだ

こいつ・・・しれつと戻ってきやがった・・・!!

「ほらほら、マネキンの時とは違っておっぱいがやわらかいぞー」

そういつて胸を背中に押し付けてくるグラ子妹（サーフィスではなくそう呼べって言われた）

ふおおおおおお、やんわらけえええええ

そう思つて堪能していると

「ブスッ」

ツとした顔でグラ子がにらんでくる

「私と同じ体を使って誘惑とは」

「私はがんがん責めていくからな」

どうやらサーフィスは原作と違い、生まれつきスタンドマスターに強い好意を抱いているようだ

こうして、グラ子の妹として生活しながら積極的に誘ってくる

そして、もう一つ重大なことがある

嫁たちが怖い（）

たすけて

「あなた」

「」

嫁さんがさらに増えました

つてあれ？誰か忘れてね？

.....

「どこいったの田中あああああああ!!!」

起きたら焼け野原となっていたドイツの街で、一人叫ぶビス子であつた

第二章完
第三章へ
▪

幕間　　神様。　　サンドイツチ（意味深）　　っておいち
いですよ（確認）

「ぐ……はあっ、はあっ、はあっ」

息も絶え絶えに歩く男

先ほど田中にやられ、致命傷を負った男だ

深海棲艦たちをスケアリーモンスターズで支配下に置き、自分が
っつて所属していたドイツの街を襲った人物である

「はあーっ、はあーっ、ははは……ふふふふ」

愉快そうに笑う男

「こうしてやられたが、まだ生きている。俺にはこの能力がある。

何度だつて返り咲いてやる」

そう思い、角に差し掛かったところまでいくと

背後から腕が自分の腹を貫いていた

「は………?」

縞々模様の腕が自分の腹部を貫通している

手にはDISCのようなものが握られている

「な……なん……」

『貴様は』

後ろにいる縞々模様の怪人がしゃべる

『あのお方の邪魔となる』

だから死ね

そういつて腕を引っこ抜き

DISCを抜かれる

その瞬間自分の体の中から何かが消えたのを感じる

「お……ま……え……な……に……を……」

『君が知る必要はない』

そういつてどこかに消える男

「く・・・そ・・・が・・・」

そういつて男はぼたりと倒れる

それから二度とその男が目覚ますことはなかった

・・・

「あ・な・た♡」

そういつて俺の膝の上に乗っかってくるグラ子

いつものようなクールな様子はなりをひそめゴロゴロと喉を鳴らして甘えてくる

「もっとなでなでして♡♡ぎゅってして♡♡」

そういわれぎゅっと、抱きしめながら頭をやさしく撫でてやる

近くのソファアーではグラ子妹がうらやましそうに見ている

そんなにもほしそうにされても・・・

新アジトに戻って、一番最初にきつかったのがみんなに事情を説明することだった

じとーつとした目ににらまれながらも何とか彼女の不遇な今までの境遇を話したところ、「ここで彼女をかくまってみんなで守ろう」ということになった

基本はいい娘たちばかりなのでホツとする

そして今は、みんなが気を利かせてこうして二人つきり（グラ子妹が順番待ちだが）

にしている。

つらいことがあった分、その傷をいやしてあげてほしい、といわれたのだ

そして、彼女たちの薬指には指輪が収まっていた

結局無断で欠勤した俺はあのあと職場から首を突き付けられ、途方にくれ

皆の提督業一本でいくことになった

永久就職がきまつたよ

やったぜ（震え声）

そして、どさくさに紛れて逃げたのであの鎮守府にいた加賀や赤城たちからにげることにも成功した

二度と会うことはないだろう（天津飯なみのフラグ

ベッドに座って二人でイチャイチャしていると、後ろからグラ子妹が抱きしめてきた

前後を挟まれる

やわらかな包みが体中にあたり、気が気でない

そして、今、人間とほぼ変わらない超高性能な人形にとりついている元サーフィスのグラ子妹がなぜ12時を回ってもきえないかという

スタンドではなく、一つの生命体としてその存在が固定化されたからだという

最初に12時を回っても彼女が消えなかった時にはびっくりした

そして、グラ子、グラ子妹の3人でお酒を飲んでいたら

気が付いたらベッドで裸で寝ており

同じく、全裸の白濁まみれの二人が幸せそうに横で寝ていた

叫びそうになったが手で口を押えて何とか耐えた

それにしてもあの男は何者だったのか

なぜ七部のデイエゴ・ブランドーと同じ能力を持っていたのか

かつて戦ったあの提督はウエザー・リポートを持っていた

なぜか近くにあった矢のおかげでレクイエム化して倒せたが・・・

.....

その矢は実はあのあとどこかにいってしまった

まるで、役割を終えた、と言わんばかりに空を飛んで行ってしまった

次のスタンド使いになるであろう相手を探しに行ったのか

それとも・・・

考えてもわからない

しかし、今確実なのは

こちらの体をまさぐってきている二人に対処しなければならない
ということだ

ちよ、パンツの中に手を突っ込むな!!

そういおうとしたら唇を奪われる

俺、何回エリナみたいにズキュウウウウンされてんのかな

と思いつつもずごーむ、ずごむと吸われる

後ろからはもう一人が強い力で肩を押さえてきて逃げられないよ
うに拘束してくる

そうして彼女たちにかわるがわるなぶられ、いちやいちやした

あれ、最近俺襲われすぎじゃね? (今更感

.....

女が部屋の中で擦りすりとおなかを撫でている

愛おしそうに

大切そうに

何度も何度も撫でている

「やりました」

そう呟く彼女の顔は

母親のような母性に満ちた表情であった

.....

「間違いないのか?」

はい、と答える部下

白蛇の報告を聴いている元帥である

「この国を脅かすような奴だったら俺の能力で瞬殺してやろうと思っ
たが.....」

そういつてある男の資料を読み込む

「よし、決めた」

何をですか?と部下が尋ねる

「あいについてくるわ」

『へ』

と間抜けな声を漏らしたかと思うと

・ ・ ・ ・ ・

その場から消え去った

・ ・ ・ ・ ・

いつの間にかドアが開いている

自分の主人が得体のしれない相手に接触しに行ったことに気が付いた白蛇は

自分の忠実な下僕に命令を出す

あのお方を全力でお守りしろ

『もし、例の男が我々の障害になるのであれば』

殺せ

と言いつ

・ ・ ・

王の力を持つ男が、ランダム（確率）とヤンデレに愛される男と出会ったのはすぐ先の話となる

T o b e c o n t i n u e d

三章ハネムーン・・・できたらいいなあ
一話 神様。そうだ、京都行こう、つてなるの修学旅
行以来なんですけど（懐古）

ある人間が田中を追っている

彼にご執心だ

今も彼のことを考えながらどこにいるのか探し続け

こうして彼が今いるという場所までやってきた

そこは

・・・・・・・・・・・・・・・・

ハネムーンに行きたい？

そう聞き返すと「うん」というヲっちゃん

ちなみに数多くいる嫁たちからは正妻としては認められている（ただし女同士の暗闘は終わらない模様）

ああ、そういえば俺たち結婚はしたけどそういった旅行に行っていないかったな

そう考えどこに行きたいか聞いてみる

「あなたとならどこでも楽しいだろうけど・・・」

うーんと言つてく可愛くなやむ彼女

かわいい（主張）

あつ、と手のひらをポンとたたいていう

彼女が提案した場所は

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あの人はどこにいるのかわかりましたか？」

いいえ、と答える赤城

その顔はとても齒がゆい感じだ

「そうですか。私の方でも探してみますので」

では、と言って別れる加賀

「みんなに気づかれないうちに彼のもとに行きましようか」

すつと、リーダーのようなものを取り出す

以前彼と会った際に発信機をつけておいたのだ

幸いにまだ取れてはいないようだ

そこが示した場所は

.....

『京都、か』

自分の上司がある男を追って出かけて行ってしまい、必死にその足取りを追っていた

白蛇

「ハイ。元帥はそちらまで向かわれているようです」

ご苦労、と行って下がらせる

さして

新幹線の切符を買わなければな

そう庶民じみた風を考え、ネットでチケットの予約を取るのであつ

た

.....

秋は夕暮れ

紅葉の色と重なり合い

きれいな色の道に変わるこの季節

そして

「じゃーーーーーん!!」

着物に着替えて、かんざしをつける彼女たち

やつべ、超カワイイ

着物が一番似合うのは黒髪の日本人だと思っていたけど、服の色を

髪の色に合わせればここまで合うのか、と考え見とれる

いっけね。ちゃんとほめなきやな

「きれいだよ」と一人一人に面と向かって伝えていく

それに気を良くしてくれたのか、キヤーツといって喜ぶ彼女たち
しかし問題がある

それは周りの男たちの視線がものすごいことになっていることだ
嫉妬と怨嗟の意思が込められたそのにらみがやばくて体が震えだ
す

俺もかつてリア充爆破しろ、といった風に考えていたから気持ちは
わかる

けど・・

うおおおお・・寒気が・・

すると後ろからぎゅつと抱きしめてくるヲっちゃん

「大丈夫？震えてたけど寒いの？ちゅーする？」

さりげなくチツスをねだってくる彼女をあざといと思いつつも

俺がすっかりしなくてどうする

と背をきちんと伸ばししやんとする

京都には数日前から予約を取っておけば着物のレンタルができる
お店が存在する

今回の一緒に来たのはヲっちゃん、レ級、夕級、ホッポ、グラ子姉
妹の六人だ

あらかじめ目立たないように東京の渋谷と池袋の服やで

服一式を購入しておいて、人間のいる場所でも生活できるように
なった

お金は持っていたのでみんなの分を買った

お返しに夜にたつぷり返された（死にかけ

そして、今日のスタンドは・・

・・・・・

ふーい

飯がうめえな

今俺は、あいつがこの場所にいると聞いて新幹線に乗っている

途中の駅で駅弁を買いながらお茶をごくごくと飲み満喫中だ

危うく新幹線に乗り遅れそうになったが

能力を使つて乗車した
にしても

「なんで奴は京都にいるんだ？」

まさか嫁さんたちとハネムーンに行くためとは知らずに疑問の声を挙げる元帥

50代独身の彼が知つたその時、敵に回るのか味方に回るのか、それは神のみぞ知る

.....

彼を追い続ける

私の運命の人だからだ

プリントには「お姉さまコワイです、」と引かれたが

グラーフが彼と一緒にいる可能性があるると軍部の人から聞いて

いてもたつてもいられなくなり探しに来た

どこにいるのかなんてわからないけど、きつと会える

なぜなら彼と私は運命でつながっているからだ

直感に身を任せ京都へと向かう

まさかの正解であつた

.....

いやー、にしんそばうまかつたなー

「ねー」

とみんなで振り返る

京都で有名な食べ物を食べておきたいと聞いて、

だったら有名なにしんそばのお店があると聞いて食べに行つてきた

薄味だつたけどうまかつたよ

あつ、そうだ

銀行でお金下ろしてくるから先にみんなホテルに戻つていて

そういつて彼女たちに先に戻るよう伝えて、銀行に一人で向かう

アジトにいるみんなの分のお土産を買う分のお金を引き出そう
すぐ近くにある銀行支店まで足を運ぶ

まさか、あんなことになるとは思わなかったが

.....

新幹線からおおりて街並みを進み続ける

途中で買い食いしたりお土産を買ったりする

すると

「うっわ、やっべ」と途中でお土産にお金を使いすぎて財布の中が軽く
なっていることに気が付く

「カードは破産するのが怖くてつかえないんだよなあ」と、バブル世代
のカードローン破産におびえつつ、とある銀行支店まで向かう

王の力を持つ男と、ランダムマン（確率男）の会合は近い

To be continued

二話 神様。突然ラスボスとエンカウントしたんですが逃げてでもいいですか（必死）

銀行までお金をおろしに来た俺
そこで

覆面をかぶった銃を持っている手慣れた銀行強盗の集団に出くわした

ケータイをみんな出すように言われて、人が中央に集められている俺のケータイもとうぜん床の上に置かれている

少しでも不振な動きをしたら撃たれるだろう

今日の俺のスタンドは

ビーチボーイ

この世界のスタンドは相手の眼に見えるのでうかつに出して攻撃することもできない

釣り竿程度では動揺はしないだろうし、かくして出そうとしてもバレバレだ

救いは店内の明かりが暗めで何をしているのかわかりにくいことか

いや、相手は黒い服を着ていて保護色に近い

まずはこのフロアにいるときだけでも確認しないと

円の周りを囲むように二人が少しずつ回っている

正面はカギをかけられ、誰も出入りができないようにシャツターは閉じられている

そこであることに気が付いた

おい。

近くにいた男に話しかける

「・・・なんだ」

銃をこちらに向けながら警戒して聞いてくる

トイレに行かしてくれ
「だめだ。そこでもらせ」

くっそ、油断しないやつだ

トイレで後ろを向きながら、自分の体を貫通させて相手にリールを命中させ、ビーチボーイのリールを絡めて首を絞めて失神させようとしたがそれも無理なようだな

ゆつくりとした動作でその男の前に立つ

とうぜんもう一人の男やほかの奴らの注意が向けられる

釣り竿を出す

突然何もないところから釣り竿が出てきてほんの少し動揺しただけのようなだ

「動くな!!」

そう叫んでくる

その釣り竿を真上に振る

銃を撃つてくる

ほかの人質にされている客からは悲鳴が挙がる

しかし

.....

銃弾は真上に放たれた

後ろから床に転んでいる

何が起こったのかわからず混乱する覆面たち

俺は釣り竿を右手に出していた

奴らの注意をひくためにゆつくりと右手で

リールはその時に床に落としておいて、ばれない様に奴らの足元に忍ばせて、絡ませて転ばせた

こちらに銃を向けていれば自分の足元では何が起こっているかなどわかりようもない

ペッシは原作で亀の中にいるブチャラテイのチームに、自分事針を通して複数を一気に殺そうとした

その長さは少なく見積もっても20メートルはある

ワンフロアーにいる複数の人間の体に侵入させることはたやすい
起き上がろうとする近くにいた奴をまず一人をビーチボーイの竿で頭を殴って失神させる

敵のもう一人がナイフを取り出す

すぐそこまで迫りつつある

マズイ、ここまで近いとビーチボーイの真価が発揮できない
覚悟を決める

あえてナイフを左腕に受け止める

ぐっ・・・いてえええええ!!

釣り竿を上から振り下ろすが簡単によけられる
とうぜんだ

俺はこのスタンドをペッシほど扱い慣れているわけじゃない
だから

天井にある、パネルの裂け目にリールをひっかけてパネルを落とす
た

上に振ったのはパネルを狙ったからだ

相手の頭に直撃する

材質がそこそこの重さでできているようだが、まだ気絶には至らな
い

距離を取ろうと後ろに下がるが

俺の腕に刺さっているナイフを握りしめたままなので、それを上から抑えて抜けないようにする

死ぬほど痛く、腕が熱いが、武器を頼っている相手は、その武器を

離す確率は低い

右手で殴りつける

顔面にヒットしたが首を回されて威力を殺される

にやりと笑い、ナイフを握っていない右手で銃を撃とうとした瞬間

顔が何かに引っ張られ、天井まで上げられ激突する

「ぐげっ」

断末魔を挙げて倒れる男

ビーチボーイのリールだ

奴の顔をわざわざ握りこぶしを作って殴ったのは、リールをこぶしの中に隠し込んで直接奴の体内に入れるためだ

もし、奴が最初に俺にナイフを刺してきたときに、ナイフを握りしめ続けず、すぐに捨てて、距離を取って発砲して来たら俺は死んでいた

運がよかったとしか言いようがない

と安心した瞬間

右手を撃たれる

釣り竿を落としてしまう

「動くな」

三人目

くそ、銀行のカウンターの向こうにいる奴らがやってきたのか

おそらく現金回収係の人間だろう

さつき覆面の男が銃を使ったせいで銀行内に銃声が響いてしまっている

それを不審に思っって一人が様子を見に来たということか

このままでは奥の方にいる奴らも全員やってきてしまう

「どうやったかはしらんがその妙な釣り竿を取ろうと少しでも動いた瞬間殺す」

殺気

本気で殺しに来ている人間のそれに思わず気圧される

くそ、周りのひとだけでも逃がさねえと・・・!!

しかし、どう考えても俺が釣り竿を取る動きより、銃をこちらに構えていて引き金にかかっている指を動かすだけでいい奴のほうが早い

・・・・・・・・・・・・・・・・

この状況で勝つためにはそれこそ時でも止めないと勝てない

すると

何か違和感を感じたその時

・・・・・・・・・・・・・・・・

男がいつの間にか真つ二つになっていた

その顔は自身が死んだことに気が付いていないようだ

そして、冷や汗が流れる

この感じ

時が止まったようなこの感覚

いや、まさか

「お前は弱くはないが、大して強くもないな。本当にお前があの虹を出していた奴を倒したのか？つかまったふりをして、お前の能力を観察していたけども」

そういつてこちらを見据えてくる男と

その横にたたずむ、圧倒的な力のビジョン

それは

ザ・ワールド・・・!!!

「おつ。俺のこの能力知ってんのか。いやー、一目見た瞬間その名前がピタリ！とあてはまるような感じだったからな。ま、なんにせよ」

寝てな

そういわれ、ザ・ワールドの拳で吹き飛ばされる

「お前は後だ。今はあいつら馬鹿どもを皆殺しにする」

吹き飛ばされ、壁にぶつかりそうな瞬間、ビーチボーイを戻して、痛む右手でふるう

天井にある蛍光灯の固い横の部分に向けてリールを放ち、ひっかけて衝撃を少しでも抑えようとするが、腕が痛んで竿を途中で放してしまい、壁にぶつかってしまう

幸い、気絶するほどの痛みではなかったが、かなりのダメージを負ってしまったようだ

「へえ。なんだか強いのか弱いのかわからないやつだな。ま、ちよつと待ってる。すぐにあいつらを殺して戻ってくるから」

そういつて、忽然と消え去る男

奥の方から銃声と悲鳴が聞こえてくる

強盗達が殺されるのも時間の問題だ

奴が帰ってくるその数十秒までに策を考えなければならぬ
考えて出した結論は・・・

.....

「よし、ぐみ掃除終わり」

ようやく強盗達を全員片してあいつと戦える

ワクワクしながら一歩ずつ歩を進めるが

「.....あ？」

.....

いない

正面玄関は解放されており、そこから逃げたのがうかがえる

ほかの人質たちもそこからすぐに逃げ出したようだ

.....

集められていたケータイも俺の以外一つ残らずなくなっている

逃げやがった

三話 神様。これがわがハネムーンの途中だと思
出したのですが嫁さんたちはガチ切れしないでし
うか（失禁）

さてと

「この血の跡を追っていけば奴のどこまでは余裕でいけるな」

そう考え鼻歌交じりで奴を追う

気分はまるで一年ぶりに好物のナポリタンを

口にしたときみてーな感覚だ

どこまで行っても無駄無駄無駄

「時を止めながら距離を詰め続ける」

今では5秒間、時間を止められるようになった

さて、血の滴る跡を追跡していく

角まで差し掛かる

だんだんと近づいてきているのが分かる

そこにいる

そして、スタンドを出して、角を曲がった瞬間こぶしを

叩き込もうとラッシュを繰り出す

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄……?!」

……

はあっ、はあっ

マジかよ、ほんとかよ、とんでもねーよ

最初がウエザリーポート

次がスケアリー・モンスターズ

そして今回は

「ザ・ワールドかよ……」

相手のスタンド運のやばさに笑いも起きない

しかも

「ザ・ワールドは承太郎のスタープラチナとほぼ互角でしかも射程距
離が10M以上ある」

いや、数十秒は時間を稼ぐことぐらいはできるだろう
じゃあ

逃げるんだよおおおおおおお
ジョセフが究極生物に追われていた時の絶望感を味わいながらあ
る場所まで向かう

そこで、この状況を切り抜けるあることが起きるからだ

走る、走る、走る

途中、ビーチボーイでトラックの上に乗っかりながらある場所まで
向かい続ける

撃たれた右手と、ナイフの刺さった左腕をかばいながらどうにかこ
こまできた

海水浴場

港場近く

「そう、ここまで逃げてきた

ここなら……」

すると、突然殺気を感じた

今まで目の前に何も存在していなかったのに

黄色い巨大な人影が目の前までそのこぶしを突き出している
ビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!
叫びながら竿をふるう

とうぜんよけられる

しかし

糸を相手の腕に絡ませわずかだが軌道をそらすのに成功した

肩に強烈なパンチを食らい、吹き飛ぶ

「鬼ごっこはもうしまいか？俺のこのザ・ワールドは10M先まで移動させられ、その視力はアフリカのハンターの数十倍の視力。まっ、数百メートル先にいる人間くらい見分けられるのさ」

やはり、大した時間稼ぎにはならなかったようだ

「お前にはいろいろと聴きたいことがある。その能力はなんだ？俺と同じような能力なのか？お前以外にもそういった能力を持っている奴はどれくらいいるんだ？

矢継ぎ早に質問を浴びせて来る

まいった

こんな状況じゃ嫁たちに怒られちまうよ

「ああ、しゃべる気はねーのか。めんどくせえ。俺を追ってきている白蛇が到着するまで

眠ってる」

そういつて、ザ・ワールドがパンチを繰り出そうとしてきた瞬間に

ビーチ・ボーイを先に振る

「ザ・ワールド!!!」

.....

「無駄無駄無駄.....」

時を止められる俺にはどんな攻撃だって通じねえ

「そんな眠っちまいそんな釣り竿で俺を倒せると思っていたのか？」

奴の目の前で笑ってやる

「とりあえずぶっ飛べ」

パンチを数発、半殺しになる程度に当てておく

「そして、時は動き出す.....」

吹っ飛んでいく奴

しかし

釣り竿のリールが小さな灯台まで伸ばされ、そこまで飛んでいくちっ、まだそんな力が残っていやがったか

距離を数十メートル離されたが無駄だ

走って奴の近くまで向かう

そして、残り20メートルまで来た時にありえないものをみた笑っている

この絶望的な状況の中で

そして、灯台の近くに立つと

そのまま海へダイブしていった

泳いで逃げるつもりか？

あの出血量だと死ぬぞ

しかし、それは思い違いだと知らされる

奴が、深海棲艦に乗っている

馬鹿な

人間と深海棲艦が手をくむだと?!

50メートルほど先まで進んでいる

行かせるか・・・!!

「ザ・ワールド!!!」

再び時を止める

近くにあったモーターボートを使い、追おうとするが

.....

時が止まった弊害で動きださない

ならばと泳いで行こうとしても、スピードが違いすぎて勝負にならない

そして時が動き出す

ザ・ワールドの超視力で最後に見たのは

こちらに中指をたてて

口パクで

『ザマアミロ』と勝ち誇る奴の姿だった

.....

俺が負けた

初めてだ

いや、こんなにワクワクする気持ちは今まで抱いたことがなかった

そうか、銀行で俺以外のケータイがすべてなくなっていたが、奴は自分のケータイを回収して、深海棲艦を呼んだのか

港までやってきたのも、深海棲艦に乗っけてもらって俺から逃げるために

確か田中・・・とか言ったか

「覚えててやるよ・・・次に会うときに敵でも、味方でもな・・・」

そうして、奴の姿が見えなくなるまでその目に焼き続けた

白蛇が近くまでやってくる

『閣下、例の男と仲間と思わしき深海棲艦に、遊泳能力を持つスタンド使いを追跡させております』

「ご苦労」

『いかがされますか?』

よし

「飯、食いに行くぞ」

『.....は?』

「ホテルでうまいもんガツガツ食って、寝て、あとは部下の報告待つぞ。もう京都にいる意味もねえしな」

『.....かしこまりました』

まだ、お土産買っていないのに・・・

という気持ちを自分の主人のために抑える白蛇

「あ、そうだ」

『?』

「お土産買って帰ろーぜ」

『・・・・・・・・はい』

いつもより部下の機嫌がいいな、と思いつつも、また会うであろう骨のある男との再会を楽しみに待つのであった

▪ T o b e c o n t i n u e d

四話 神様。タマヒユンツて物理的にもなるんです
ね（新体験）

「正座」

はい

ヲっちゃんにそういわれて素直に正座する俺

あのと、逃げている最中に深海棲艦のみんなに電話して事情を話し、

助けに来てくれるよう援護要請をした

横ではホツポが包帯をぐるぐる巻いていてくれている

グラーフが後ろから抱き着いてきて涙目で心配してくれている

「銀行いってどうしてそんなボロボロになったの？」

銀行強盗と変なおっさんに襲われた

そういうと呆れた目をこちらに向けてくるヲっちゃん

「まあ、それはいいとして」

いいんだ

「ハネムーンの途中で帰ってきてしまいました」

うん

「私たちはまだまだイチャイチャしたりません」

うん

「そこで、今日一日中私たちの相手をしなさい」

うん・・・うん？

「返事は？」

あつ、これマジですねているパターンだ

と、熟年夫婦のように嫁たちの思考を読み取る

「じゃ、これ飲んで」

そうして渡されたものは

真っ赤なおドロドロしい色の怪しげなジュースだった

魔女がツボで「いっひっひっひっひっ」って言って作ってそうなあれ

に近い

これをですか(震え声)

「いーつき。いーつき。」

皆ではやし立ててくる

逃げられねえええええええ

覚悟を決めて飲み干す

少しでも苦しみを軽減させるために一気に喉を通し、胃まで落とす

おおくと言って感嘆する嫁たち

あつ、見た目はあれだけど結構おいしい

と思った瞬間

頭が割れそうになる

?!?!?!
?!!?!?!
なんだ・・・これ・・・

「さすが深海棲艦印のママシドリンク」

ま・・・む・・・し・・・?

「ほら、これから私たち全員の相手をしてもらうから、精力をつけたほうがいいかなーと思ひまして」

「ちなみにアタシが一月前から仕込んでおいたママシを使ったんだぞ」

うまいだろー

そういつてくるがこたえられるだけの余裕がない

腕を掴まれて、寝室まで連行される

おぼろげない意識の中で見たものは

こちらの上にまたがって嬉しそうに悦ぶ彼女たちの姿であった

ビーチ・ボーイを使って逃げようとしたら没収された

.....

「いーつきね」

一見何の変哲もない島

そこからあの田中という男性につけておいた発信機の反応がする
ここに彼が・・・

進んでいくと、洞窟に差し掛かった

中に入ると奥の方にうつすらと明かりが見える

どうやらここが拠点のようだ

「さすがに気分が高揚します」

彼との一夜を思い出し、顔を赤らめる加賀

もうすぐ、彼と会える

会えたらまずは婚姻届けを書かなければ

そう考え発信機が示す部屋の前まで来た

窓があるようなのでそつと中をうかがう

愛しの彼の姿を見るために

しかしそこで加賀が見たものは

深海棲艦と交わっている彼の姿だった

拳に力がこもる

恍惚とした表情で交わり続けている

思わず凝視し続ける

こちらに気づかず情事にいそしむ彼らの姿を、加賀は瞬き一つせ
ずに見つめ続けた

その瞳は怒りと、悲しみと

それでも消えぬ愛が混じっていた

.....

ぐおおおおお.....

こしがががががががが

あのあと、俺はみんなととりあえず4回戦ずつした

これ以上はもう限界、というところでみんな失神してくれたので

何とか命からがらで助かる

裸でベッドに寝ているみんなの上にシーツをかけて、冷蔵庫まで飲
み物を取ってくる

ああ、のどが渴いた

みんなの分の飲み物もすぐに飲めるように冷蔵庫に入れておくか
冷蔵庫に入っているお茶を出してコップに注ぐ
手に持ち、グイッとあおる
ぷはー

もう一度お茶を注ごうとすると

横から注がれる

おっ、ありがとう

そういつて振り返ってお礼を述べようとする

加賀さんが能面みたいな表情で立っていた

叫びそうになるが口をふさがれる

間接を決められ、身動きが取れない

すると、どこから取り出したのか、ベルトを使いこちらの腕と足を
縛ってくる

口はハンカチを突っ込まれしゃべることすらできない

「あたまにきました」

無感情な声でそう告げる加賀さん

「あなたは私の夫なんですからきちんと自覚を持ってください。でな
いと・・・」

一緒に心中しますよ

口に出していったわけではないが、彼女がそう述べたように聞こえ
て身を震わす

すると、前の方から別の人影が表れる

深海棲艦の誰かか?!?!?

そう希望を抱き、顔を見ると

赤城さんだった

また叫びそうになる

なんでこの場所がわかったの？

「加賀さん、独り占めはよくないですよ・・・」

穏やかな声だが明らかに怒りをにじませた声色でそういう彼女

「邪魔するのならあなたも沈んでもらいます」

「そつちこそ・・・と言いたいところですがここで戦ったら深海棲艦たちにばれてしまいますからとりあえず脱出しません？外でみんなも待っていますし」

みんな？

「ええ、秋雲、蒼龍、飛龍は一緒に来ておりますよ」

ファツ!?

「・・・本当は私一人で独占したいけどそうもいかないようね」

じゃあ、行きましょうか

そういつて担がれて運ばれる俺

芋虫みたいにじたばたして抵抗するが

がしつとあそこを掴まれる

ちよっ・・・

「おとなしくしなさい。じゃないと」

つぶすわよ

ヒュン

タマを掴まれたままタマヒュンするというおかしな現象を味わいながら

ドナドナされるのであった

スタンドは嫁たちに没収されており、使えない

詰んだ

To be continued

五話 神様。これって不倫に当たりますか？（相談

ここどこ）？

艦娘たちにどこかの閉所に連れてこられた俺こと田中

連れてこられる間は目隠しをされていて、何も見えなかったという恐怖

皆がペタペタ触ってきてビビったけど

「ここが今日からあなたのおうちです」

そういつてくる加賀さん

「私、実はあなたと一緒に料理を食べようと思って作ってきたんです……。」

食べてくださいますか？……」

瞳を潤わせながらそういつてくる赤城さん

単なる逆レイプだったら抗っていただろうが、こういう純粋な好意にはどうも

弱い

悪気がない分受け入れてしまいたくなるからだ

彼女たち全員美人、美少女ばかりだし

そうして、料理が運ばれてきてみんなからあーんされる

隣に座っている一航船の方々に腕を絡められ、一つ一つ食べさせられる

家庭を持っていなかったらこの時点で彼女たちに落ちていたと思う

決して、遠くのヲっちゃんから発せられる殺意の波動が怖かったからではない

ない（断言

「おいしいですか？」

不安そうに聴いてくる赤城さん

やっぱスタイルいいな、と腕に感じるやわらかな圧力受けながらそう考える

おいしいです、と返すとばあああああつととてもまぶしい笑顔で喜ぶ

時々病むこともあるけど深海棲艦のみんなに比べたらソフトだし
そうして、みんなに食べさせられながら食事を終える

あー、おなか一杯

「お風呂の方を用意してありますので、よかったら入ってください」
そういわれ、着替えの男性モノの服を渡される

どうして俺の服のサイズを知っていたのかはスルーして、案内してもらおう

浴場の扉の前まで来た

じゃ、はいつてきまーす

そういつてガラガラとドアを開けて入る
さて、着替えるか、と思いき全裸になって後ろを向くと

艦娘のみなさんが同じく全裸になっていらっしやっただけ

絶句する

そうしているうちに今度は二航船の飛龍さんと蒼龍さんに腕を取られて

お風呂場の方まで引かれる

逃げようとしたが後ろからは一航船の二人が

前には秋雲さんが配置されていて

にがさん……!!お前だけは……!!みたいなことになっていた

DI O様がいたら、お前はチエスや将棋でいう、チエックメイトにはまっつているのだ!!!

とさぞかしいい笑顔で言ったことだろう

「みんなで洗いっこしましょうね♡」

囲まれて、なすすべもなく、洗いっこしましたとき

.....

皆でお風呂に入った

今日は本当にめでたい日だ

今までずっと探していた男性が見つかって、こうして私たちのおう

ちに呼ぶことができたのだから

みんな本当にニコニコしていて嬉しそうだ

あの普段はクールな加賀さんでさえ感情を隠そうとせずに、笑顔を振りまいている

事情を知らない瑞鶴や、翔鶴がみたら「何事!!?」と驚いていたけど

お腹いっぱい食べて、身を清めて、そうしてすることといえばあと一つ

「ん………」

夜戦だ

みんなすでにベッドの上に横になっている彼にのしかかっただけぼっている

最初は彼は戸惑っている様子だったが、覚悟を決めたのか私たちにちゃんと向き合ってくれている

そうした気遣いをしてもらえてますますうれしくなる

下半身が熱くなり、彼を求めてしまう

加賀さんなんかは彼の顔をしっかりと抑えて、唇を合わせている

私以外の四人は彼に群がって彼のことをなぶっているが、みんなが満足した後に

最後に私が弱った彼を自分におぼれさせて身も心も溶かす算段だ

皆は大切な仲間で、一応協力体制は敷いているけども、すきあらば彼をモノにしようとは画策しているのはお互いにわかっている

息も絶え絶えに必死にみんなの責めに耐えている彼を見ると、自分の心と体で包んであげたくなってくる

願わくば、彼が私のことを少しでも愛してくれますように

.....

「ここか」

白蛇様に命令を受け、あの田中とかいう男が逃げていったところを探した

そうしてついに掴んだこの場所

深海棲艦たちのアジトだ

閣下も、白蛇様もお喜びになるに違いない

そう思っつて、スタンド能力を解除して島に上がったとたん

砲撃を受けた

吹き飛ばす私

?!?!

なんだ?!?!

何が起きた?!?!

気が付けば自分のすぐ近くに地面があるではないか

そして、気が付いた

自分は何者かに攻撃を受けて吹き飛んだのだと

まずい。立たねば

立ち上がって顔を挙げるとそこには

4人の悪魔がいた

ヲ級、レ級、タ級、北方棲姫

まずい、一体だけでも苦しいのにこれでは・・・

逃げようと身をひるがえして、スタンド能力を発動させて、海中に

逃げ込もうとした瞬間

足を引っ張られる

見ると、釣り竿のリールが自分の体に食い込んでいるのが分かる
しかし、血が出ていないのが異常だった

北方棲姫の手には異様なオーラを放つ釣り竿が握られていた
近づいてくる鬼たち

「夫がいなくなってしまうたの」

「あたしたちをおいてさ」

「あなた」

「なにかしらない？」

恥も外聞も捨てて、スタンドのパワーを全力に発揮し、

その島から逃げる

その鬼ごっこは私にとってトラウマとなりかけるのであった

.....

う・・・うああ・・・

眼の焦点があっていない彼

皆に限界まで求められ、男の意地なのか私以外の全員を満足させる
ことに成功したみたいだ

ほかの四人は眠ってしまったている

幸せそうな顔で滾々と眠り続けている

彼を自分の胸にうずめる

ぎゅううううと壊れ物を取り扱うようにやさしく、しかし、自分
の子供を甘えさせるように乳房を押しつける

ああ・・・あ・・・

しゃべれるほどの気力もなさそうだが、まだまだ彼の下半身は元気
そうだ

料理に精力が付くものを入れておいてよかった

「弱っているあなたをこうして甘えさせられるなんて私幸せです・・・
♡」

胸で彼の頭を抱えながら頭を撫でてあげる

時折うああ・・・とうめいて返事をする声が聞こえる

「いっぱい私におぼれてくださいね♡」

長い夜を彼と過ごした

それは、女として最高の一夜となった

.....

「部下からの定時連絡は？」

そう聞いてくる閣下

『……最後の連絡の時には、あ、悪魔がおってくるうううううう!!!
と叫んで無線が切れました』

「.....」

『.....』

「今日は一緒に寝ようか（提案）」

『はい（快諾）』

To be continued

六話 神様。先日殺しあつた人が上司つてなんでやねん（不敬

「じゃあ、行きましよう。提督」

そういつてにつこりと微笑んでくる赤城

さんをつけて呼ぼうとしたら「そんな他人行儀なんて私悲しいです・・・」

と上目遣いに悲しまれた

いや、演技だつていうのはわかるがどうにも女性の涙つていうのは・・・

彼女におぼれていた身としては強く出れない

結局みんなには深海棲艦の提督をやっていることを言い出せず、鎮守府の

提督にもなつてしまった

これがもしばれたら俺はフっちゃんたちに何をされるのだろうか

比較的まともな瑞鶴や翔鶴はむしろ、同情的な目線をこちらに送っている

今は、旗艦に乗り込み海を進んでいる

軍人としての仕事は、主に書類や人事、重要事項の決定が多く、

今回は現場に実際に足を運んで艦娘たちの仕事の実情を見させてもらっている

現場を知らずに司令塔として働けるわけもない、と考えた上の行動だった

皆には危ないです、と反対されたがそんな危ない場所にみんなが行っているんだから

自分もいかなくてどうするの

と言って説き伏せた

ヤンデレる娘が多いが基本はいい娘ばかりでうれしくなる

椅子に座っている今も、実は隣には赤城、加賀

横にもものほしそうに見ている蒼龍、飛龍

膝の上には秋雲が乗っかっている

いい匂いが鼻をくすぐってくる

くらくらと頭がし始めるが横の二人に手をぎゅっと握りしめられ
正気に戻る

なんかよくわからないうちに敵がどんどんせん滅されていく

俺の今日のスタンドを出して一緒に戦えないか考えたが
彼女たちを信頼して黙ってみていることにした

そうこうしているうちに戦闘が終わり

全員帰投する

みんなごくろうさん。かつこよかったよ

そういうと素直に喜んでくれる

先ほどまで沈め・・・!!、とか鬼気迫る顔で言っていた子たちと
は思えない

S勝利とかいうのをもぎとつたらしい

すげー

歴戦の強者が集う鎮守府と聴いていたがそんなにすごい子たちだ
とは知らなかった

すると、加賀さんから午後のスケジュールを伝えられる

「今日は特に大きな仕事はありません。仕事が全部終われば後は自由

となります」

なんとという超絶ホワイト企業

軍部つてもつとがつつり働く場所だと思っていたけど

「初期のころは精神論ばかりでしたが、今は大きく改善をされて余裕をもつて仕事ができるようになっております」

赤城がそう答える

「あ、あとは今日最後に向かっていただく場所があります」

?それは・・・

「大本営です」

それって一番大きな仕事じゃね?と思いつつ、鎮守府に帰ってから少数精鋭で行くのであった

・・・・・・

「新しい提督候補がくる?」

部下の白蛇からそう聞く

『例の脅迫してきた艦娘たちの鎮守府です』

「ああ、あのぶっ飛んだやつらか・・・」

そう思いだしげんなりする

「あとどれくらいだ?」

『もうすぐでつくかと。閣下には面接に立ち会っていただきたいと思っております』

「ブラックじゃないだけましなんだろうが・・・」

面接を行う部下の顔を見て渋い顔になる

「けっ、老害の権力にしがみついているクソじじいどもかよ」

『無能な輩どもではありませんが、寄生虫のようなしぶとさがありますので注意なされたほうがよろしいかと』

そうだな、と部下に返す

「どんな優秀でもこんなくそどもに落とされちゃったらせっかくの人材を取り逃しちまう。白蛇、やってこい」

はっ、と答えて部屋を出ていく

「しかし、こいつの顔どつかで見たような・・・」

先日京都で出会った例の男を思い出す
顔が血まみれでよくわからなかったが

「名前は田中太郎・・・平凡な名前で逆に珍しいな」

爺どもを矯正している白蛇が帰ってくるのを待ちながら
書類を眺める

・・・・・・・・・・・・・・・・

「では、あなたが提督に志願された動機をおっしゃってください」
そういわれたのであらかじめ考えておいた言葉を吐きだしていく
なんか部屋に入ったら面接やりまーす、と言われ、えらそうな雰囲気
の人たちに質問され続けている

就職活動のころの圧迫面接を思い出し、すこし懐かしくなる

そして、さつきからずっと叫びたいことがある

なんであの男がおるん？

軍服着て、めっちゃ多くの勲章をつけているけど
京都であったあの男がまさかの軍部のお偉いさんだと知って唾然
とする

向こうもこちらに気づいているのかにやにやと周りにはわからない
ように笑ってくる
くそう

きがついてやがるな

そもそも、俺は艦娘に提督になってくださいと頼まれたのであつ
て、自分から志望した動機なんぞきかれても困る

顔には出さずに毒気づきつつ、面接受けていくのであつた

・・・・・・・・・・・・・・・・

提督が無事に上層部のタヌキ達との会合を果たしたようだ
戻ってこられた際にはひどく疲れておられるような顔をされてお
られていたが

上官に呼ばれているとのこと、待機しているように命じられた
もし、彼が提督として大本営に認められなかったら砲撃をして
やる

狂気を孕んだ顔つきでそう考える艦娘たちは忠犬のごとく待ち続
ける

.....

「よう、先日はどうも」

よつと片手をあげて挨拶してくる男性

ザ・ワールドの使い手にして、王としてのオーラを持つ只者ではな
いと感じさせてくる

鋭い目つき

あなたが俺の上司になるなんて知らなかったですよ

「殺しあった仲だ。京都じゃ急に喧嘩を吹っかけて悪かったな」

がつつははは、と笑う彼

悪人ではないのかしれない、と豪快な笑いをみて直感的に感じ取る
「お前と会ったのは先日のことで、深海棲艦にのっけてもらっていた
ことを聞きたくてな」

すつ、と目を細める

たぶん今時を止められたらなすすべもなく殺されろう

下手なことは言えない

真実を話した

彼は興味深そうに話に聞き入っている

そして、納得したかと思うととんでもないことを言い始めた

そこから俺は“真の敵”を知ることになる

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

七話 災厄と最悪って似てねえか国語のせんせいよ
おおおおおおお（閃き）

実質的なこの軍部の支配者とご対面して、この国に暗躍していて、
過激派の深海勢力とつながっている真の黒幕がいると聞いた時には
度肝を抜かされた。

いや、そんな馬鹿な、と

「俺は軍部で最高の階級を持つ男ではあるが、その俺でも排しきれない
ほど大きな敵がこの国には潜んでいやがる」

苦々しそうな顔でこぶしを机にたたきつける元帥

彼の實力は、殺されかけた俺がよく知っている

時を止められる能力に加え、本体自身の冷静さ、

承太郎ほどでないにせよ、ほとんどの敵なら問題なく文字通り瞬殺
できてしまうだろう

「お前はこれを知っているはずだな？」

そういつて懐から見覚えのあるものを取り出す

それは・・・？!

「矢だ。ああ、ただの矢ではないことはわかっているよな？」

こくんとうなずく。

この矢で刺されたものは、矢に選ばれてスタンド使いに目覚める
か、死ぬかどっちかの現象が起こる

そして、スタンド使いがこの矢に刺され、矢に認められればスタン
ドが進化を遂げる

ただし、シルバー・チャリオッツとゴールド・エクスペリエンスし
か原作では進化形態が存在していなかった

「この矢っていうのがもし・・・」

何本もあつたらどうする？

時を止められたわけでもないのに、思考と頭が止まる

矢が何本もある？

「それも、一つの組織が所有していて、使おうとしていると聞けばそのやばさが理解できるはずだ。」

そつと懐にしまいなおす

彼もどうやら矢に選ばれてスタンド使いとなったようだ

「お前の力を借りたい。実際戦ってわかったが、お前みたいなタフな仲間が一人でも必要なんだ。」

こちらを真正面から見据えてきて、はつきりと告げてくる

あれほどの力をもった男でさえ倒せない敵

その強大さに驚きながらも尋ねる

そいつらは何をやるうとしているんですか？

「下手をすればマジでこの国が終わる。それは・・・」

.....

とあるビルの一角

何の変哲もなく、どこにでもあるような場所だ

しかし

その一室に明らかにおかしなものを引き連れている者たちがいるのを除けば

一人の男が言葉を述べる

「先月は302人中、3人が目覚めた」

にやり、と笑みを浮かべて語る男

その言葉を受けた対面にいた人物が言葉を返す

「たった1%のおおのおおのおお??ちゃんと仕事しているのおおお？

まさかたつたそれだけの成果でパチンコで777を一発あてした男

みたいなやりきつた顔してるんじゃないでしょうねえ」

明らかになめきつた態度をとって挑発をする

舌をだして軽く見下した表情を向けている

すると、挑発されていた男の横に人型のビジョンが現れる

「おつ??やる気・いっく?言つとくけど私の能力をくらったらマジで

死ぬよ？」

男をあおっていた人物の横にも大きな右手をもった下半身がない人型のビジョンが現れる

一触即発かと思われたその時

「やめろ」

絶対的な重圧を感じさせる声が凜と部屋に響く

先ほどまで争っていた二人が矛を収める

能面をつけ、顔を隠した男が場に現れた

「先日、ドイツで我々の仲間の一人だった男がやられた。」

「ああ、あの恐竜馬鹿か。あいつは俺らの中じゃダントツで弱かったからなー」

あの雑魚だったらしようがない、しようがない。そういつて手を横にプラプラと振る

「問題は例の『時を止める男』だ」

その言葉を聞かされた者たちの空気が一変する

「はつきり言うところちらが単独で勝てる可能性はほぼない。二人以上で同時にかかり、一気に決着をつける必要がある」

宿敵の顔を思い浮かべ、目に憎しみの炎を燃やして断言する能面

「レイラ。デレク。」

レイラとデレクと呼ばれた二人が立ち上がる

「『白蛇』はこちらで足止めしておく。その間に例の男を片付けろ」

「どれだけ暴れてもいいんだ？」

「無論、敵を滅ぼすまで、だ」

そういわれると片方のデレクと呼ばれた男が人型のビジョンをだして床をたたく

すると、そこからスウツ・・・と消えて行ってしまう

レイラと呼ばれた人物も同じところから出ていく

史実ではありえなかった組み合わせの能力をもつ二人が、襲い掛かってくる

.....

「——それは、日本国民全員に“矢”をぶっ刺して選別することだ」

元帥が、敵の目的を告げる

▪ T o b e c o n t i n u e d

八話 そろそろ死ぬかもしれない（悟り）

「提督、どうされたのですか？」

赤城さんにそう聞かれて思わずハツとなる。

夜伽以外では基本いい娘達ばかりなのでこちらのことを心配してくれているようだ。

ちよつと具合が悪い、と言っておいて艦内の個室にこもりに行く今、俺は大本営からの帰りの船に乗って鎮守府までやってきている元帥との話が終わってこうして鎮守府に帰るというのだ。

ベッドに倒れて、仰向けに転がる

元帥から聞かされた敵の目的

幸い相手の主力の数はたった5人だけだという

敵は矢でスタンド使いを増やしてはいるが、全員が全員仲間になるわけでもないという

それはそうだ。邪悪な奴や、日常を愛しているやつだっている。

吉良吉影のように平穏な生活を望んでいるサイコパスもいるかもしれない

そう考えながら、電話をかけて、みんなの協力を取り付けることを決めた

.....

「やつとついたらー」

そういつて歩く、デレクとレイラ

「まったく、そんなに買って大丈夫なのか？」

「へーき、へーきあんたがいるじゃん」

そのために俺を一緒につれてショッピングに来たのかよ・・・とつぶやくデレク

「ほらほら、今日はせっかくなので来たんだからもつと買っておくよー。あんたの能力はこういうときに便利なんだから」

へいへい、といやそうに答えるデレク

二人で並んで歩いていると、前からやってきていた3人組の男たちと肩がぶつかってしまふ

「つてえ」

そういつて肩を抑える男

それを無視して先に進むデレクとレイラ

ぶつかっておいて何の反応も示さない二人に苛立った男が、レイラの肩をつかもうとする

「おい!!てめえま」

その先の言葉を男が言うことはかなわなかった

肩をつかんだ男の手と腕が離れていたからだ

「・・・あつ?・・・え?」

訳が分からないといった様子で狼狽する男

「おい、まてやごらあ!!」

知り合いの異常に気が付いたもう一人が、二人の前まで行って道をふさぐと

突然男の体が崩れ落ちる

体がいつの間にかボロボロになっている

「ひっ・・・!?!」

知り合いがやられて逃げる3人目の男

それをつまらないものを見る目で見つめる二人

「違ったか、一応警戒はしておいたんだが」

「全く、気安く声かけないでよね。下手したら殺しちゃってたんだから!」

ぷりぷりと怒るレイラとなんでもないように身をひるがえすデレク

「でさー。どうする?」

「どうするつて?」

「件の敵さんは軍人何でしょ?えーっとすつごく平凡そうな名前の日本人。」

「田中か?」

「そうそう、そいつ!!いくら私たちの中で最弱だったとはいえ、スケーリーモンスターズに勝つならそこそこの実力はあるんだよね?」

まあ、そうだろうな、と考えるデレク

「なめてかかったらこちらがやられる。まずはおびき出すとしようか」

「それっていつも通りの?」

「そう、いつも通りだ。」

それを聞いたレイラがニヤア、と笑い

「じゃ、町みんなには浦島太郎になつてもらいましようかね」

と言い、スタンドを出して能力を拡散する

ここに、田中を追ってきたスタンド使いとの戦いが始まる

.....

はい、鎮守府に来ました。ただいまヲっちゃんたちと赤城たちとの絶賛修羅場中です。

たぶん俺のことを血眼で探しているから嫁さんたちに速攻で連絡いれて、事情を述べた

もちろん艦娘と深海凄艦は本来敵同士で、もともと仲が悪かったんだけど、

今回の修羅場はそれが問題ではなかった

それは

「私の夫から離れてもらえるかしら?泥棒猫さん。」

「あら、あなたこそそわたくしたちの旦那様から離れていただけませんか?」

俺の両隣に座って火花を散らすヲっちゃんと赤城

周りのいたるところでもあちこちでキャットファイトが起きそうな雰囲気だ

「あたし、お前が気に入らないんだよなー。何というか男に媚売ってそうで」

「はあ?あんたこそそんなガサツな態度で提督さんのそばにいような

そして、倒れていた子供の顔が表返しになると
しわしわの老人になっていた

「う、うわああああああ!!!?」

驚いて絶叫する

そして、その光景を見て思い出す

元帥が言っていた敵のスタンド使い

もし、それがあの能力だったら

ヲっちゃん、にげ

るよ、と言おうと思つたら真正面から二人組の男女がやってきた

一人は大きなバッグを背負つてそこから飲み物を取り出して飲んで
いる男

もう一人は白いドレスにハイヒールの背の高い女性

「みーっけ。あんたが田中でしょ?写真通りだね」

「隣にいるのは誰か知らんが・・・まあ、見られた以上始末しておく
か」

スタンドをだしてこちらに向かつてくる

ヲっちゃん敵だ!撃て!!

とは言えずに固まる

敵が市街地で襲い掛かってきた理由

もし、隣に艦娘がいた場合砲撃されるだけでも厄介だ

だから、やすやすと撃てないように街中で戦いを仕掛けてきたのだ

周りには老化してよぼよぼになっている人が大勢いる

もし、ここで逃げてしまえば彼らがどうなるかわからない

はめられたことに気が付き、今日のスタンドを出す

「そいつがお前のか。随分ちっこくて弱そうじゃねえか」

「私のスタンドと似たようなデザインしていて親近感がわくわ」

相手もスタンドを構えて近づいてくる

ヲっちゃんにもスタンドは見えているはずだから注意するよう促
す

きをつけて!!あの人型のビジョンに触れたらまずい!!

そうして、こちらに突っ込んでくる二人組

ヲっちゃんに声を掛けるが反応がないのでおかしいと感じ、顔を見ると

無表情になっていた

あ、まず、

「まずはてめーからだ!!クソアマアッ!!」

そういつてジッパーが付いている人型のビジョンでヲっちゃんに殴り掛かる

かなりの早さで迫ってくる。危ない!!と叫んだ

次の瞬間

男が吹き飛んだ

「は?」

目を点にして何が起こったのか理解できない女

だから危ないって言ったのに・・・

ヲっちゃんは数日ぶりに俺とあって、一日中こちらにしがみついていた

そして、今日久しぶりに二人つきりデートができると聞いて最高に喜んでいた

それをぶち壊した相手にどういう反応をするかといえは

「コロス」

スタンドを持っていないのに、人間を優に超える圧倒的な身体能力でヲラヲラとラツシユをするヲっちゃん

彼女は実はむちゃくちゃ強いのだ

スタンドを使っている俺でも勝てるかどうかわからない

「ヲラアアアアアアアッっっ!!!」

そういつて殴って相手の方まで吹き飛ばすヲっちゃん

それをスタンドで受け止め、地面にそつと優しくおく女

「あらら、デレクったらもうそんなに早くやられちゃうなんて。でも」

これで1対1ね

その言葉がわからず、考えていると

ヲっちゃんの手足がばらばらになる

ヲっちゃん!!!

「大丈夫よ。生きてはいるわ。デレクもその娘も。殴られているときにいくつかお返しに手足を能力でばらばらにしたのね。」

デレクと呼ばれている敵の方を見ると、まだ意識があるようだ

「・・・へ・・・へ・・・俺もやべえ・・・が・・・その女も・・・もうやばいな」

ヲっちゃんに近づいて手足をくっつけようとしても、目の前まで女が迫ってきている

助ける余裕もなさそうだ

「正直デレクがやられるなんで予想外だったけど、私はその男より強いわよ?」

そういつてガスをまき散らす

俺の今日のスタンドはアクアネットワークレス
さして、どうするか

最高に最悪なデートが始まった

To be continued

九話 えつ、誰? (困惑)

「ザ・グレイトフル・デッド!!!」

やつのスタンドは触れた人間を老化させてしまうガスを放出する、ザ・グレイトフルデッド

能力の射程距離は100m程度

体を冷やしておけば老化は防げるが、それを考慮しながら戦わなければならぬ

こちらのスタンドは遠距離射程のアクアネットワークレス

パワーはないが水と同化できるという強みがある

近くにあつたドリンクを手に取って、体を冷やしつつスタンドの強化をしようとしたが、先回りされて取られてしまう

けりを相手にお見舞いしようとするが、グレイトフルデッドの右手でつかまれてしまう

「直に触るとすぐに老化しちゃうわよ〜。早く老人ホームの予約した方がいいんじゃないの〜?」

右足が老化していき、老人のようなしわになっていく

ぐおおおおおおおお

「私にけりをぶち込もうなんて100年早いよこの包莖があああ あっっーっーっー!!」

けりをぶち込むのはあきらめた。だから当初のプラン通りにやらせてもらうとした

右足に引っ付いていた俺のアクアネットワークレスがやつの手に絡みつく

「なにっ?!このちびがああああ!!」

俺の足をつかんでいた右腕を離し、グレイトフルデッドに叩き落されてしまい、本体の俺もフィードバックを食らい、地面に転がる

持っていたドリンクを叩き落せたが飲むことはかなわならしい

ガスで体が少しづつ老化していく

アクアネットク・

「逃がすか!!」

踏みつぶされてしまい、身動きが全く取れなくなる
くそっ……

「ああ、最悪。私の腕に変な手の跡がついちやっただじゃない。」

自分の腕をみてそういう女

「とりあえず、憂さ晴らしのために痛めつけてあげるわ……。お化粧も崩れちゃったし」

そういつて、靴で俺の老化によってボロボロになった部分をぐりぐりと踏みつけてくる

ぐあああああつ!!!

「アレクシー。そろそろ起きなさいよー。」

そういわれて血まみれの体を起こして立ち上がってくるもう一人の男

これで二対一になってしまった

「はあつ、はあつ、はあつ、とんでもない女だ。マジで死にかけてぞ……」

「あんたあの元帥とかいう男にも前戦ったときにはごられていなかったっけ?」

うるせえ!!と叫ぶ男

「あの女は俺のスティッキー・フィンガーズでばらばらになっている。手足はくつつけない限りばらばらのまんまさ。」

「そう、じゃあ、こいつを殺してから、次にあの女も殺しましょうか」

その言葉を聴いて何か切れる

殺す……?

「ええ、あなたの仲間なんでしょう? だったら寂しくないように同じくあの世に送ってあげなきゃ」

フっちゃんの方を見る

老化していて、しわしわになってしまっている
くっそ、俺もだいぶヤバイ。

だがあと少しで
少しずつアクアネックレスを動かして、踏まれている靴から逃れよ
うともがく

しかし、それも見透かされてしまっていたようだ

逃れたところを今度はステイツキーフィンガーズにとらえられて
しまう

「逃げようなんて考えがあめえんだよなあ〜」
ぐえつと首を絞められる

「じゃあ、本当に逃げられても面倒だし、死ねや」

そういつてこぶしを俺に向かって振り下ろそうとすると

水が天から降ってくる

「あ?」

「え?」

硬直する二人

そして、嫌味たつぷりに言つてやる

天気予報をみておくこつたな

夏特有の大雨が降り注ぎ、アクアネックレスが大きく膨らんでい
き、巨大化する

「なああつ?!」

驚く二人

冷たい水を浴びたからか、老化も治っていった

ヲっちゃんも雨によつて若返つている

先ほどもまでは10CMぐらいしかなかったアクア・ネックレスが水
をすつてパワーアップしている

アクア・ネックレスの右腕を二人に向けて伸ばす、しかし

「動きがのろいぜ!!」

老化しているからか、アクア・ネックレスが大きくなった弊害か、動作がゆっくりとなつてしまつていた

二人には当たらない

「ダボがつ!!」

おらああつ、と敵のスタンドの攻撃を食らつて、ジッパーで右腕が吹っ飛んでしまう

離れてしまつた腕をかばう

「これでとどめだああああ!!」

ステイツキー・フィンガーズで襲い掛かってくる

そうして攻撃を食らつて倒れる

やつの方が

意味が分からない、といった顔つきで倒れるデレクという男
その後ろでは

手足が戻つて復活したヲっちゃんが正拳突き of 構えで立っていた

驚愕の表情を浮かべるもう一人の女

俺がアクア・ネックレスを巨大化させて、腕を伸ばしたのは、バラバラになつた彼女の両手両足と胴体をくつつけるためだった

普段の力のないよわっちいアクア・ネックレスならこうはいかなかつただろうが、水をたつぷり吸わせて人ひとり分のパワーを得た今ならぎりぎり可能だ

「こ、こんなバカな・・・」

そういつて身をひるがえして逃げる女

中々逃げ足が速い
しかし

水まみれのフィールドはアクアネックレスの独壇場だ

既に彼女の足元まで這いずらせてある

そのまま口の中まで侵入させ体を操作する

おお、なんかラジコンみたい

今ならおっぱいもめるかも、と思ったが、ヲっちゃんがこちらをにらんできていたのでやめておく

こちらの方まで歩かせる

「わ、私は女よ?!まさか殴るっていうんじゃないでしょうね?!?!」

いや、俺は男だ。そんなことはさすがにしない

ほっとする女

じゃ、同じ同性同士、ヲっちゃんお願いします

顔を青ざめさせるレイラ

「ヲまかせあれ」

そういつてこぶしを構えて、ラツシュを繰り出す

「ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ!!!!」

ヲヲアアアアアアアッ!!!

ぶっ飛んでいく相手

おー、ホールインワン、と頭の中でつぶやき彼女の元までいく

俺一人だったら殺されていたよ、ありがとう、ヲっちゃん

ハグをして勝利を祝う

デートめちやくちやになっちゃったね

「こうしてハグハグしてくれたら機嫌がなおるかも」

安いもんだな、と思いつつぎゅううううと抱きしめあう

.....

『私の助けは必要なかったか』

そういつてたたずむ全身黒づくめの人物

『閣下に言われてここまで監視、護衛をしておいたが本当に来るとはさすが閣下だ』

双眼鏡で抱きしめあう二人を見ながらそうつぶやく

双眼鏡を下ろそうとした瞬間見てしまった

ハグしあっている二人の後ろにたつ、ボロボロの男を

・・・

こ、こいつまだ・・・

デレクという男は予想以上にしぶとかった

ヲっちゃんの背中にナイフを突き立てようとしてくる

ハグしていて気が付かないヲっちゃん

腹をくくり、ヲっちゃんと位置を変える

背中に刺さる

激痛が広がり、息が漏れる

目を見開いて絶句するヲっちゃん

そのまま彼女にもたれかかる

「しねえええええええ!!」

ナイフを引き抜き、もう一度刺そうとしてくる男

そして、もっとも予想しない人物によってそれが防がれた

「どきなきい!!!」

ぐっばああああああ、とけられてゴミ箱にシュートされる男

お前は・・・

こちらの名前を泣きながら呼び続けるヲっちゃんの声を聴きなが

ら、意識が途切れていった

- T o b e c o n t i n u e d

十話 お休み おはよう グラ．．．誰だお前は
?! (驚き)

何だか心地いい

あたたかなものに包まれている

柔らかで、懐かしい感じだ

いい匂いが鼻腔をくすぐってむずがゆくなる

そつと目を開けると

二つの大きな肌色のお山が見えた

誰かな？グラ子か赤城あたりかな？と思いつつその山に手を伸ばしてもみしだく

手で優しく触りながら、堪能していく

そして顔を見ると

ビス子の顔が見えた

思っていた相手と違っていたので慌てて手を離すと、がしり、と腕をつかまれる

ビス子の方に目を向けるとなんだか息が荒く、熱っぽさを感じる
これはまずい、と思って脱出しようとする足と足を腰に回され、がんじがらめにされて身動きが取れなくなる

「ふふふ．．．。あなたって積極的な人だったのね．．．．．
いいわ♡おいで♡」

そういつてビス子がのしかかってきて．．．

．．．．．

心配だ

背中をナイフで刺されて、治療を受けて、今は死んだように眠っているという

彼を追ってきて偶然助けたというビスマルクに介抱を任せている

が、

いやな予感がぬぐえない

自分お手製の田中君人形を手に食堂まで向かう

きつと目を覚ましたらおなかがすくだろうから、今のうちにご飯を作っておかないと

食堂まで行くと、誰かが厨房に立っているのが見えた

赤い袴に黒髪のロングのおっとりした雰囲気的女性

「赤城か」

「そういうあなたはヲ級」

多少和解したとはいえ、まだまだ険悪な雰囲気である

それも、彼をめぐってのことだが

「どうされたのですか？」

「そういうあなたこそ」

赤城が作っている胃にやさしいおかゆなどの滋養物に目が行く

この女は彼の胃袋をつかもうとしているらしい

抜け目がない女だ、と考えつつ、彼女を無視して支度を始める

彼女もこちらから興味が失せたのか、料理を続ける

まけない

わたさない

気が合わない二人の思惑が一致した瞬間であった

.....

はあつ、はあつ、はあつ、と息が乱れるのもお構いなしん二人でベッドに寝転がる

おいてあった水をビス子に渡し、裸の体を隠させるためにシーツを渡す

渡した時に「あら、手慣れているのね。悪い人。」とクスクス笑われて少し罰が悪くなった。

目は笑っていないかったが。

そういえば自分は.....

「ええ、暴漢に襲われていたから通りがかった私が助けたの。」

どやっとな胸を張って強調するビス子。強調されているのは形の良
いお山なのか、自慢の内容なのかどちらかわからないがとりあえず胸
をもみながら話を聴き続ける。

「話を、んん、続けるわね……。あつ、ナイフを背中に、んああっん
♡刺されたあなたは・ひうつ♡鎮守府まで運ばれてえええん♡あ
ああ……。♡治療されていたの……。♡」

びくびくと体を小刻みに震わせながらそう述べるビス子

大体の事情は分かった。

そして、自分が寝起きにやってしまったことも。

嫁さんたちにしばらく搾り取られるだろうな、と覚悟をしつつ、ビ
ス子をいただくことにした。

どちらにせよお仕置きが待っているのなら、今はそれを忘れさせて
くれるものに溺れよう。

光沢が消えた瞳でこちらをうっとりとした顔つきで見えてくるビス
子と目を合わせないようにしながら彼女と二回戦目に入った。

。。。。。。。。

できた

これで彼も喜んでくれるはず

隣にいる暴食の女王とラインナップがかぶってしまったのは気に
入らないが彼の体調優先だ。

トレーにのせて、料理を運び始める。

すると、隣で今まで料理を作っていた赤城も料理を運び始める。

邪魔をするな、と目で訴えかけると、あなたが後から来たんでしょ
う、と返してきたので、足早に彼のいる病室まで向かう。

赤城も負けじと早足になってるので、それに並走する。

お互いに肩をぶつけ合いながら、相手を妨害しつつ、目的地まで
やってきた。

ドアをノックして愛しの彼に会おうとした瞬間。

声が聞こえた。

それも、途切れ途切れの会話にはおかしい、喘ぎ声のようなも

のが。

隣の赤城もそれに気が付いたようだ。

目を合わせて、同時にうなづく。

ドアの取っ手に手をかけて、そっと開けて中の様子をうかがう
すると、奥のベッドの方でぎしぎしと揺れている音が聞こえる
取っ手を握る手に力がこもる

彼はあれだけ調教して誰のものを教えてあげたのに懲りずに他の女といたしているようだ。しかも、見たことのない新しい女とともに。赤城も同じような表情をしている。

そのままドアをそっと閉める。

さすがに情事の真つ最中に割って入るほどデリカシーがないわけではない。

あと一時間ぐらいしたらもう一度こよう。

作ったものは自分で処理することにした。

力を籠めすぎたのか、トレーにひびが入る。

振るえる手をなんとか抑えながら感情を律する。

もう少ししたら彼と愛し合える。

それまでの我慢、我慢。

そのまま料理をもってその場を離れた。

赤城はじつと瞬き一つせずに彼らの情事を見つめていた。

赤城が彼を搾り取ったら次は私がかからからになるまでいただくことにした。

.....

満たされたような顔つきでこちらを見つめてくるビス子。

目が合うとニツコリと微笑んでくる。

そのあどけなさに心が揺れる。

いくら伴侶たちがいるとはいえ、スタイルの良い金髪の美人に言い

寄られて悪い気はしない。

最近俺もヲっちゃんたちの影響で色ボケしてきたのかな、と心配し

つつ、彼女に腕を貸してやる。

その上に頭をのせて嬉しそうに腕枕を堪能するビス子。

そうも喜ばれると、こちらもうれしくなってきた。

さきほどまで、身長が190CM以上ある彼女に包まれていたのを
思い出して少し恥ずかしくなる。

「いきなり襲われてびっくりしたけど、あなたに求められてうれし
かったわ・・・それも二回も♡」

顔を赤くして幸せそうに告げるビス子

グラ子と間違えました、とはいえずに引きつった笑みでごまかす。

時には真実を言わないほうがいいこともあるのだ。

さて、ドアの向こうでこちらをじつと見ている赤城をどうしよう
か、と考えつつ、気づかないふりをして彼女とのピロートークに興じ
るのであった。

▪ T o b e c o n t i n u e d

十一話 バラバラ猟奇さつじんじけん未遂（誤字にあらず）

「よくあの二人相手に戦って勝ったな、よくやった・・・大丈夫か？」
ダイジョウブです。

と某野球ゲームの改造博士のまねごとをしつつ、元帥にこたえる。
色々な意味で死ぬかと思っただが大丈夫だ。

「やつら二人はコンビのスタンド使いでな、こちらの仲間も何人かやられていた。だから、お前が倒してくれて本当に感謝している。」

そういつて、こちらの手を固く握って握手をしてくる。

経緯はどうあれ、なんとかなったからホツとする。

そして、気になったことを聞いてみる。

元帥。フっちゃんがスタンド能力を使ってきたんですけど何か心当たりはありますか。

俺がそう問いかけると目をそらす上司。

おい o i

「・・・俺の部下に白蛇というスタンド能力を一時的に与えられるやつがいてな。そいつが今回捕縛した敵の能力を奪って、お前のヲ級に貸し出した。期限付きだがな。」

数日前のことを思い出す。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ビス子との激しい運動が終わり、彼女を外まで送った。

なんでもビジネスホテルに今は泊まっているので、引越しの準備ができたなら、こちらの鎮守府まで移ってくるそうだ。

別れ際にハグとキスをして、彼女に手をふって見送る。

何度もこちらを振り返るその姿にときめきながら、名残惜しさを感じつつもわかれる。

さて

今まで直視していなかった現実と向き合う必要があるようだ。
後ろからこちらをじつと見つめているヲっちゃんたちに向き直る。
若干ジト目な彼女たちにたいして、声を掛ける。
「ただいま。」

「………おかえり」

「どうやら最初の第一声としては間違っていないかったようなので胸をなでおろす。」

「一人一人ハグしていく。」

「ビス子の匂いが体についていたので、香水をつけてごまかしておいたがばれているようだ。」

「ヲっちゃんに首をきゅつとつかまれる。」

「ちよつときて。」

「こういう時には逆らわないほうがいいと経験則で知っているの
素直に彼女に従う。」

「鎮守府の執務室まで向かい、ドアを閉めて中に入る。」

「その瞬間、自分の体がばらばらになる。」

「いや、正確にはジツパーで。」

「ヲっちゃんの横には自分がジョジョで見慣れた第五部のスタンド
が立っていた。」

「彼女の頭にはDISCがはめ込まれている。」

「なぜ彼女が、いや、それよりもこれから俺をどうするつもりなのか。」

「頭、両手両足が胴体と離れてしまい、身動きが全く取れない状態で
聴く。」

「恍惚とした表情で彼女が告げる。」

「二元帥とか言うヲとこの部下に、あなたが持っているような超能力を
DISCにして奪ったり、そしてそのDISCをはめ込むことで奪った
能力を使えるようにできる人がいたから譲ってくれるように頼ん
だの。こうしておけばあなたはどこにもいかずにゆっくりできるで
しょう♡」

空虚な瞳を輝かせながら、舌なめずりをして喜びに打ち振るえている。

先日デートを邪魔されたことで彼女の限界がやってきてしまったようだ。

ばらばらになった手足を嫁さんたちにつかまれる。

「あたまは私がもらうから、ほかの部分はあなたたちが好きに使っていいよ。」

その言葉を受けて、俺の手足を奪い合う嫁さんたち。

あちらこちらで七部の遺体争奪戦みたいな戦いが繰り広げられている。

はた目には、ちぎれた人間の手足を見た目麗しい美女たちが奪い合って戦っているように見えて恐怖しか感じない。

頭だけになった俺を抱きかかえて、ヲっちゃんが執務室を出る。

「次のお仕事までまだまだ時間があるから、いっぱい愛し合おうね……♡」

たすけて、と叫ぼうとした瞬間、手を口に突っ込まれて塞がれる。

「私が満足したら離してあげるから、それまで頑張って壊れないようにしてね、あなた♡」

意気揚々と彼女の胸に抱えられて運ばれながら、あっ、手足がぬるぬるする、と感じるのであった。

……

他にはもうスタンド能力をレンタルしていた娘とかいないですよ
ね？

いないですよね？（再確認）

「だ、大丈夫だ。白蛇がお前んところの嫁にDISCを貸したって言うっていたから何のためかと思っていたが、まさかそんなことに使っていたとは……」

たまげたなあ……、と彼がドン引きしつつ、話を続ける。

「お前さんたちが捕まえたスタンド使いの二人だが俺の白蛇のスタン

ドで記憶とスタンドの両方を抜き取って植物状態にしてある。そうでもないと暴れられて厄介だからな。万が一を考えて、だ。」

それには同感だ。スタンド使いを閉じ込めておけるような場所もないからそうする必要はあるだろう。逃げられて、こちらの情報を漏らされるのもまずいから一番良い手なのだろう。

デレクとレイラという二人組はあっさりとヲっちゃんが倒したが、強さはかなりの物だった。短期決戦でなければ負けていたほどには。「今、DISCの記憶を読み取って敵の居場所を突き止めている最中だ。もう少ししたら判明するだろう。」

それが意味するものはただ一つ。
最後の戦いということになる。

敵の数は5人だったのが、2人倒されて残り3人、のはずだったが……。

「話はどうもそう単純でないらしい。俺の部下が前に命がけで持ち帰ってきた情報と食い違っている。少なくともその倍の6人はいるらしい。」

短期間で3人も増えたというのですか？

「あの矢があれば増やしたい放題だろう。矢に任せて片っ端から刺せばスタンド使いを増やすことは簡単だ。仲間に引き込めるかどうかは別としてな。」

敵の戦力もわかった

これからが本当の戦いになるのだろう。

元帥の部屋を失礼します、と言ってドアを開けて出ていく。
そして、先ほど彼からもらったあるものを袋から取り出す。

今の俺にはまずい代物であるそれを。

銀色のわっかを取り出して眺めながら、これの存在がみんなに知れ渡ったら俺は死ぬかもしれないな、と考えつつ胸のポケットにしまっておく。

渡す相手は決まっているから、内緒で呼び出してこっそり送ろう。

その考えが浅はかなものであったことを知るのは、すぐ先のことであつた。

▪ T o b e c o n t i n u e d

十二話 ファイツ!! (カーン)

「二人がやられたか」

そう告げる能面の人物。

「コンビとしてはまあまあ強い奴らだったけど大方油断したんだろうよ。」

げひげひと笑いながら自分の考えを述べるモヒカン頭の男

「補充した3人を入れれば私たちはあと6人。状況としてはいいとは言えないな。」

黒のダブルのスーツに身を包みそうつぶやく男。

ここは、とある施設。

部屋の中は薄暗く、幽霊が出てくるといわれても信じてしまいそうなほどに陰鬱とした雰囲気を漂わせている。

「なあ、ボス。次はどうするんだ？二人がつかまっているから尋問か拷問で情報を吐かされているんじゃないか？」

「俺もそう思うぜ。何しろ最近の現代っ子は根性が足らねえ。根を上げるのが早いもやしばかりだからなあ」

2人が能面をかぶっている男に目を向ける。

その言葉を受けて能面の男が考え始める。

そして、とある結論に至った。

椅子から立ち上がり、ドアの方へと向かう。

「どこへ行くんだ？」

「決まっている。こここの場所もばれるだろう。本日中に放棄。別の拠点へ行く。ぐずぐずするな。」

そういつて部屋から出ていく能面。

その後ろ姿をみてため息をついた二人の男はやれやれ、決断が早い子って、と思いなながらも自分たちのボスの決定に従うために自分の荷物を引き払いに行く。

.....

心臓がバクバクいつている。

無理もない。俺はこれから一世一代のかけを行うのだから。

小さな箱をポケットから取り出し、中身を確認める。銀色の小さなわっかが中に収められていた。

それを見て、元帥の言葉を思い出す。

練度の限界というものを上げるために、練度が99まで到達している相手を選んで渡せと。

なぜ婚約指輪のような形をしているのか尋ねたら、戦いしか知らない艦娘達に結婚を体験させてやりたかったらとか。

あんた男や、とほろりと心の中で涙を流しつつ、彼から受け取った。そして、今はその相手を待っている。

先日こちらの体をバラバラにしてありとあらゆるプレイをしてきた女性。

そんな相手であつても愛してしまっているというのだから、彼女に調教されてもう戻れない場所まで来てしまっていることを自覚しながら深呼吸をして息を整える。

大丈夫、大丈夫。昔みたいになちよつと声をかけてきもつ、と言われたあのころとは状況が違うんだ。落ち着け、弱気になるな。

そう思い込もうとしても震える体。過去の苦い失恋の経験を思い出して苦しくなってくる。

すると手をとられて握られる。

あたたかく、触れ合つて居るだけどこちらの気持ちも落ち着いてくる手であつた。

その主の顔を見る。

俺が毎日見ている世界一大好きな顔だった。

青い瞳に、白に近い銀色の髪。俺と同じくらいの身長に出ているところは出ていて、引つ込んでいるところはきちんと引つ込んでいるスタイルのいい体つき。

フっちゃん

「昨日は激しかったね♡またあんなプレイしてもいい?」

あどけない表情で無邪気にそう言ってくるヲっちゃん。

体をバラバラにされて好き放題されていた時には恐怖も感じたが、彼女から離れようとは思えなかった。

「私に渡したいものがあるって聞いたんだけど。」

その言葉を受けて、彼女に左手を出してもらおうようにいう。

すつと素直にその言葉に従って左手をこちらに出してくれる彼女。

その薬指に銀色の指輪をつける。

固まる彼女。

もしかしたら気に入らなかったのか。

俯いている彼女の様子をうかがおうとすると、いきなり押し倒された。

がふつ、と腹にタツクルを食らい、そのまま床に倒れ込む。

彼女の目を見ると、ハートマークになっていた。

やばい

「あなた♡私うれしいわ。ついにプロポーズしてくれるなんて・・・♡」

服をいそいそと脱ぎはじめ、裸体をあらわにする彼女。

首に手をまわされ、唇を奪われる。

いつもとは違い、こちらを容赦なくむさぼるようなキスに意識が飛びそうになる。

酸素が足りなくなってきたので、彼女の中から吸い込んで奪い取る。

お互いにびくびくと震えながら舌を絡めあう。

こちらも我慢できなくなってきた。

理性が飛ぶ前に彼女を抱きかかえてソファアームまで運ぼうとしたとき

ドアの向こうからこちらを見ていた嫁さんたちに気づく。

じーっと見つめてきていて、なんの恥じらいも照れもなく覗き込んできている。

ヲっちゃんには気づいていないようなので、ヲっちゃんをお姫様抱っこで抱えてシャワールームまで向かう。

いい雰囲気の中で中断したらヲっちゃんが本気で怒るので、ひとまず逃げることにした。

ああ、みんなにはつちり指輪を渡すところ見られていたよ。どうしよう。

浴場で、ヲっちゃんとまぐあいながら頭を悩ませるのであった。

.....

「いなかったか」

『はい』

まあ、そうだろうな、と大方予想していた元帥が白蛇の報告を受けてそう返す。

敵は間抜けじゃない。仲間が帰ってこなかったから自分たちの情報が洩れているかもしれない。

そう判断してすぐに拠点を放棄したのだろう。

やつらの正体の手掛かりとなるようなものが何一つなかったのは惜しまれるが。

「二応すべての場所を調べさせろ。すべての拠点を一つ残らずな。」

その言葉を受けて部屋を出ていく白蛇。

十中八九手に入れた情報にのっていた拠点にはまずいないだろう。今頃新しい場所に居を構えているに違いない。

そう考えながら、今日の報告書に目を通してしていると部下からの通信が入る。

この回線は・・・

「田中か、どうした？」

俺が気に入っている男の一人、田中からの通信を開いて用件を聞く。

あの、元帥閣下・・・・。頼みがあるんですけど。

震える声でそう言ってくる田中。

なんだ。この男がここまで焦っているのは珍しいな。そう考えながら話を聴き続ける。

.....ケツコン指輪をあと20個増やしてください。

その言葉を受けて卒倒しそうになった。

To be continued